

「あの、永田町の大旦那様で御座います。」と、云つて、じつと伊佐雄の方を見る。
 伊佐雄は八重子が歸つたのだとばかり思つてゐたのに、思ひがけない舅父の磯谷民造が訪ねて来たこと聞くと怪乎として眼を据ゑてしまつた。この深夜に民造は何ににやつて来たのであるらう、而も八重子の不思議な様子といひ、ひよつとしたら何か磯谷家で重大な事件でも起つたのではなからうか、薄々最近の磯谷家の面白くない様子を聞き知つてゐた伊佐雄は先づそんなことから胸を轟かしはじめた。

伊佐雄はやがてお志保に命じて民造を一番奥まつた客座敷へ通させ、少時してから彼は我れと我心を漸うに押静めながら書齋を出ていつた。

客座敷へいつてみると、民造は上座に敷いた緞子の座蒲團のうへ、坐つて、寒さうに肩を縮めながら火鉢へあたつてゐるが、伊佐雄が入つてゆくのを見ると、

「やあ、暫くてした。こんな遅くやつて来てさぞ御迷惑ぢやらうが、……」と、云つていつになく改まつた挨拶をする。その顔は交友倶楽部で逢つた頃とは見違へるほど寝れて頬の肉の削けたのが殊更眼立つ。そして瞳の底には何とも名狀することの出来ぬ沈鬱な影が宿つてゐた。

伊佐雄はひと眼その面貌を見ると、何か恐ろしい事件が迫つてゐるのを直覺したが、なるべくさあらぬ態に装ほつて、ひと通り無沙汰の挨拶を済まして、扱て用談に移つた。

民造は矢鱈と煙草ばかり吸ひながら、考へ込んでゐるが、やがて低い聲で、

「なあ、伊佐雄さん、私は今夜實は八重子のことと伺つたんだが、……」と、云つて、じいつと伊佐雄の顔色を讀むやうに見詰めながら、「八重子は今夜何處へ行つとるのでせうな。」と、途方に暮れたやうに云ふ。

それを聞くと伊佐雄もはつとして、どう返事してい、か分らなかつたが、やがて、

「いや、實は私も今それを捜しとるところなんです。餘り歸りが遅いもんですからなあ。」と低い聲で云ふ。そして出ていつた時の模様やら、俣夫が東京驛まで送つていつたことなどを問はれるまゝに語つたが、民造は益々深い憂慮を眉のあたりに現はして、

「東京驛へいつたんですつてな、ふむ、そりや困つたことになつたもんだ。」と、沈痛な聲で云つて、今度はもう隠してはゐられないといふやうな顔つきになりながら、「いや、もうかうなつた以上は已むを得んから何事も貴方に打明けて相談せんけりやならん。實は今日の夕方にこん

な手紙が私のところへ来たのです。」と、云つて、民造は懐を掻き探つて、一通の封書を取り出し、それを伊佐雄の前へ差出した。

伊佐雄はそれを受取つて、切られた封のところからなかの手紙を引出してみた。なかには桃色の書簡箋に何やら鉛筆で走り書きしたのが入つてゐた。

伊佐雄はその手蹟をみると蒼くなつた顔をあげて、

「こりや八重子からの手紙ぢやありませんか？」と、呟いたが、民造は急に傷ましい顔になつて、

「さうです。八重子から私に宛てた手紙なのです。なかを読んで見れば分るが、私は實に父として面目ないことになつてしまつたのです。貴方に對して何といつてお詫びをしていゝやら、私は其言葉を捜すのに苦しむのです。」

民造は身も世もあらぬ様な果敢ない調子で云つて首を垂れてしまつた。

十七の三

伊佐雄はやがてもう一度手紙を取上げて読んでみた。なかにはかういふ文言が書いてあつた。

「父上様、今日といふ今日こそ私には一生に一度の悲しい日が参りました。私はもうこのまま堪へ忍ぶことが出来なくなりました。今覺悟を極めて良人の家を出ます。何處へ行くといふことは決してお聞きになつて下さいませ。私はどんなことがありましても決して短氣な眞似を致したりなどは致しません。何事も不孝の子と御あきらめ下さいませ。いづれそのうちに伊佐雄にも御詫びの叶ふ日が参りませう。……」

そこまで読んで來ると伊佐雄は急に顔色を變へて、

「ではなんですか、八重子は家出をしてしまつたのですな？」と慄へを帯びた聲で云ふ。

民造は深く合點いて、

「いや、彼女は一時的の精神錯亂を起したものと見えます。どう考へても正氣の沙汰とは思はれない。」と、云つたが、その聲は低く沈んでゐた。

「いや、精神が錯亂したにせよ何にせよ、家出をしたとなると一大事です。早く手廻しをしなけりや取返しのかんことになります。」と、云つて、そのまゝ、宙腰に立上りながら、

「お父さんの方では何處か行つてゐる先の手懸りはないでせうか。若し多少でも當があるんなら早速捜しにやる手段を講じないと、……」

「いや、それがまるで當てがつかんのです。私も貴方に聞いたら多少の手懸りが得られるだらうと思つてやつて來たのだが、……」

「そりや困つたことになりましたなあ。警察へ依頼すれば一番早いんですが、此際どんなことがあつてもそんなことは出来ませんし、どうしたものでせう。私に名譽といふものがなければどんな手段でも執るのですが……、それにしても實に無謀なことをして呉れたものぢやありませんか。八重子は貴方や私にどうなれと云ふのでせう。」さう云ふ伊佐雄の顔には隠しきれぬ憤怒が燃えて來た。

民造は答へる言葉もないやうに電燈の光りをじいつと見入りながら口を噤んでゐるが、やがて喉にからむ痰を切りながら、

「どうも何んとも申譯のない次第で。これといふのも平常から私の仕付けが悪いからですが……」と、さすがにそれから先は云ひ溢りながら「漸次様子を聞いてみると彼女もいろいろな

こととて貴方に御迷惑を懸けとるやうだし、私はそれを聞くにつけても何うかせんけりやならんと思つとつたのですが、……」

伊佐雄はいら／＼したやうな顔になつて、

「お舅さん。そんなことは今の場合お話しすべきことではないでせう。それよりも一刻も早く八重子の行方を捜さんけりやなるまいと思ふのですが、……」

さう云つてゐるうちに入口の紙襖がすうツと開いてそこから小間使のお清が顔を出し乍ら、

「あの、旦那様、永田町様からお電話で御座いますが、……」

伊佐雄は吐胸を突かれたやうに、

「電話だつて俺にか？」

「い、え、あのもし旦那様がお越して御座いましたら一寸御電話までといふ仰て御座いますか、……」

民造はそれを聞くと、何か活路を見出したやうに、

「私への電話ぢやな、そりやきつと歌子がかけたのだらう。では一寸出て見ませう。何かい、

消息かも知れんから。」

さう云つて民造はお清に案内されながら大急ぎで座敷を出ていつた。

伊佐雄はそのあとをじいつと見送つてゐたが、その足音が廊下の彼方へ消えてしまふと火鉢のわきに置いてあつた八重子の手紙をもう一度取上げて読み返してみた。手紙をもつ彼の手は云ひ甲斐もなく慄へて来て、彼の眼には刻一刻に不安な閃めきが募つて来た。

十七の四

少時すると民造はさも氣落ちがしたやうにしよんぼり又奥座敷へ歸つて来た。そして火鉢の前へ坐りながら、

「電話は矢張り歌子からか、つて来たんですが、どうも、どうしても八重子の行方が知れんといふて歌子も途方に暮とるのです。ほんとに何うしたものでせうかなあ。」と、嘆息をつくやうな調子で云つた。

伊佐雄もさう云はれてみるとどうにも仕様がなかつた。何處いらといふ當てもないのにさう

騒ぎたてた處で詮方ない話である。それにへまなことをして騒げば一家の秘密が世間へ暴露する恐れがあるし、と云つて此儘に放置して置けばどんな一大事が八重子の身のうへに起らうも知れない。彼の懊惱は漸次とその極に達していつた。

民造と伊佐雄とはそれから長いこといろ／＼凝議しあつたが、これといつてい、思案も浮ばないので、仕方がなくなつて、兎に角明日の朝までこのまゝに放置して置くより他に道がないといふことになつてしまつた。そのうちに十二時も過ぎてしまつたので、民造は今津家の迷惑を思つて、ひとまづ歸宅することにした。そしてもし少しでも手懸りが見付かつたら相互に報告し合ふことに極めて、やがて民造は座を立つた。

伊佐雄はそれを立關まで送り出してそのまゝ、書齋へ歸つて来たが、それと一緒に何ごとを思ひつたのかお志保を呼んで俄に自動車の支度を命じた。

お志保は此の深夜に何ごとかと思つたらしかつたが、八重子がこんな遅くまで歸邸しなかつたり、民造が時ならぬ時刻に訪ねて来たことか何か大事件が起つてゐるらしいのを薄々感付いてゐたと見え、妙に悲しげな顔をしながら命ぜられたまゝ、にもう宿へ下つて寢て

しまつてゐる運轉手を起しにやつた。

自動車の支度が出来ると伊佐雄は着換へをして、綿入を何枚も重ねたうへから厚外套を着込んで、そのまゝ乗り込んだ。そして運轉手がどちらへと聞くと、彼は低い聲で、

「遅く気の毒だが、大急ぎで大森までいつて呉れ。」と、云つた。

自動車はやがて暗い屋敷町の夜更けを幕地に下町の方へ駛つていつた。そして宮城の外郭を廻ると今度は日比谷から芝の高輪の通りへ出て、人ツ子ひとり通らない広い大通りを西へ向つて全速力で駛つていつた。

伊佐雄は袴々と迫つて来る夜寒に慄へながら、クツシヨンのなかへ體を埋めて、失踪した八重子のことばかり思ひつゞけてゐた。それにしてもたとひ死ぬほど清岡子爵を戀してゐるにもせよ、上流の社會に人となつてゐながら、名譽も捨て、親姉妹も捨て、そのうへ國家の法律の制裁を犯してまで家出をするとは實に思ひ切つた非常識な所業である。さういふ罪を犯せば直に恐ろしい責罰が來るといふことを彼女は打忘れてしまつたのであらうか。あの手紙の取亂した様子といひ、ひよつとしたら八重子が發狂したのではあるまいかとさへ彼は思つたのであつた。

伊佐雄は嫉妬、怨恨、憤怒、さういつた總ての感情に燃えながらも、仍ほ且つその心の底では冷靜な判斷と理智とを失はなかつた。今切迫してゐる問題が重大であればあるほど彼自身は飽くまで慎重に事を處しなげばならないと思つた。感情に煽られて輕舉をすれば累は忽ち今津家はもとより磯谷家へまで及んでゆくのである。たとひ八重子ひとり犠牲にしても、一門の名譽は何とかして取り留めなくてはならぬ。そして又一方では事件がこれまでになつて來てゐながらも彼はまだ八重子に對して「まさか」といふ感じをもたずにはゐられなかつた。不貞の妻として葬り去つてしまふのには餘りに彼が八重子を愛し過ぎてゐたのであつた。

自動車の窓からはやがて滿天の星影にほの白く浮いて見える海の光景が眺められたが、それもほんの束の間で道は又すぐに田圃道へ入つていつた。そして間もなく暗い切通しをあがると運轉手は送話口によつて命ぜられたとほりに、清岡子爵の邸前へいつてびたりと自動車をとめた。

伊佐雄はやがて自動車を降りて、大きな清岡邸の鐵門の前へ立つた。そして運轉手に命じて呼鈴かなにかあるだらうと思つて、それを捜させてゐると自動車のエンジンの音で眼を覺ましたのか、玄關の硝子戸にはぱつと火光が射して、間もなく一人の少年が寒さうな恰好をしながらそこから出て来た。

少年は鐵門の外に立つ伊佐雄をさも見馴れないやうにじろく透かして見てゐたが、やがて「何誰様で？」と、丁寧に訊く。

伊佐雄は態と平氣を装ひながら、

「清岡さんは御在宅ですか？」と、此方から訊き返したが、少年は氣の毒さうな顔になつて、「あの主人は今日一寸出まして御座いますが。」と、云ふ。その顔色を見ても留守を使つてゐるやうな氣色は少しもなかつた。

伊佐雄はうすく不在だらうと想像はして来たもの、ほんとにゐないとなるとさすがに力ぬけがしない譯にはいかなかつた。で、落膽したやうな聲になりながら、

「何方へおいてになつたかお出先は分らんでせうなあ。」と、いふ。

「さあ、一寸市内まで行つて来るからと仰有つてお出ましになりましたが。」

「それは何時頃です？」

「夕方御座いました。」

伊佐雄はなにか八重子の行方を知る手筈を求めたさに、今度は自分の方から、

「私は小石川の今津だが、今日私の妻が此方へお訪ねしやしなかつたてせうかなあ？」と、切りだした。

と、少年は急に丁寧な態度になつて、

「あ、今津様で被居いますか。今日は奥様はお越しになりませんが、お午頃お電話がかゝりまして御座います。」と、云ふ。

伊佐雄はそれを聞くと、何は兎もあれ八重子が電話をかけて清岡を呼び出したことだけは略想像がついた。で、それ以上訊ねるのもその場合何となく自分の威嚴に關はるやうな氣がするのて、

「それで、御主人は明日お立ちですか？御出發が延期になるやうなお話はないですか？」と、確

めてみた。

少年は首を振つて、

「いゝえ、もうお支度もなにもすつかり出来上つて居りますので、明日の正午に横濱からお立ちになることになつて居ります。」と、はつきり云つた。

伊佐雄はそれから間もなく、深夜に邪魔をしたことを謝して又自動車に乗つた。もうかうなつては何の手懸りもないので、そのまゝ、又すぐくと小石川の邸へ向けて歸つてゆくより他には仕様がなかつた。

自動車が漸うのこと高輪の通りまで歸つて來ると、その時伊佐雄はふつと思ひついて送話口へ口を當て、運転手に自動車をとめさせた。そして扉を開けさせて、そこからこつそり顔を出しながら、

「おい、お前はよく奥の件をするから知つとるだらうが、何處か奥が始終行く處があるだらう。もし知つとるなら隠さずに云つて呉れ。」と、嚴かな調子で云つた。

402

運転手は口止めてもされてゐるとみえ、初めのうちは白をきつてどうしても云はなかつたが

403

伊佐雄がもし實を吐かなければ如何なる手段にても訴へさうな氣振りが見えて來たので、到頭カッフエ・ローズのことを白状してしまつた。

伊佐雄はそれをきくと餘りに意外だつたので、却て眞偽を訝しんだが、兎に角どうせ歸り途のことであるから一應そこへも寄つてみようと思つた。

伊佐雄は氣むづかしさうな聲で、やがて、

「ぢや其ローズへ一寸寄つて見ろ。」と、命じて強く扉を閉ざしてしまつた。

その時、時計を出してみるともう午前一時を過ぎてゐた。

十七の六

榮 處

自動車は間もなくカッフエ・ローズの前へ來て横着けになつた。夜の二時までは營業してゐるのが、この店の特色なので、寢靜まつた通りにもそこばかりは明かるい燈火の輝きが路の面へ流れ出している。そして酒場の方では酔ひ痴れた客が何か大聲で饒舌つてゐるのが、戸外の方までぶつ／＼聞えて來る。

伊佐雄は何んだか人に顔を見られるのがひどく恐ろしくなつて、そのまゝ、車内の電燈を消させて扉のところから顔を出したが、酔漢が騒いでゐる聲を聞くと自分でそこへ入つてゆく勇氣はどうしても起らなかつた。それに人目を忍んで逢曳をしてゐるものなら、うつかり入つていつて訊ねたとて、そんな人は來てゐないぐらゐで断られるにきまつてゐるので、伊佐雄はやがて一策を案じだした。この運轉手が始終送り迎へをしてゐるとすれば給仕などはいづれ顔を見知つてゐようから、いつそまるで自分は顔を出さずに運轉手に迎ひに來たやうな風をさせて八重子の在否を確かめさせようと思ひついた。て伊佐雄は運轉手を呼んでこつそりその旨を含めた。運轉手はすぐさまカツフェの扉を開けてなかへ入つていつた。そしてほんの二分もた、ないうちに又そこから出て來て、自動車の窓のところへ驅け寄りながら、

「旦那様、あの夫人は矢張り被來つてゐらつしやるさうで御座います。」と、云ふ。

伊佐雄は八重子がまさかそんな處にゐやしまいと想つてわく／＼しながら待つてゐたので、其返事を聞くと却つて意外な感じに打たれて思はず胸を轟ろかしながら、

「さうか。」と、稍慄へを帯びた聲で云つた。そして少時の間どうしたものかと考へ込んでゐた

が、その時になると何とも名状し難い憤怒の念ばかりが込み上げて來て、ともすると彼は節制を失ひさうになる。いつそ自分で踏込んでいつて退引ならぬ現場を押へて、總てを破壊してしまはうか。たとひ何んと罵られても、笑はれても、それをさへすればその場で解決がついてしまふのである。決闘をしようと思ふなら武器を持つて闘ひもしよう、自分の名譽のためならば手段の如何を選んではゐられぬ、伊佐雄は此處に清岡と八重子がゐると知つたうへはもう後へ退かれぬ仕儀になつてしまつた。

伊佐雄はやがて興奮のために息を弾ませながらついと自動車を下りた。そして運轉手に案内させてカツフェの扉を開けたが、そこにはひとりの女給仕が怪訝さうな顔をしながら突立つてゐて、

「被來いまし。」と、云ふ。

伊佐雄は躍る胸を押へながら、

「清岡君が來てゐるだらう。」と、云つて、そのまゝ、スクリーンの陰からつか／＼階段へ上つていつた。

女給仕は仕方がなさ、うな顔をしてあとから随いて来たが、階段を上つてしまふと彼に追いついて、後から、

「何誰様で御座います？」と、丁寧聞く。

伊佐雄はそれには答へずに、三つある私室のなかでたつたひとつ閉まつてゐる一番端れの扉の前へいつて、

「此處か。」と、云ひながら容赦もなくその把手へ手をかけようとした。

と、女給仕は慌たゞしく走り寄つてその手を押へながら、

「い、え、あのそこは他のお客様です。」と、云つて、開けさせまいとしたが、伊佐雄はそのへどもどした言葉の様子でそれと見てとつて、

「俺は今津だ。何にも怪しいものぢやない。」と、腹立たしさうな調子で云ひ放つて、そのまゝ女給仕を突き退けながら、突如その私室の扉をがたりと押開けた。

伊佐雄の眼の前にはそれと同時に明るい電燈の輝いた室内の有様がひとめに映つた。正面の安樂椅子には八重子がくづをれるやうに腰をおろしてどうしたのか腕木のうへ、後向きに突伏

してゐる、その傍には清岡子爵が腕拱みをしたまゝ、じつと形を正して坐つてゐる。そしてその前の卓子のところでは思ひも懸けぬ山中がたつたひとりてちびくウキスキーの洋盃をあげてゐた。

十七の七

開いた扉のところからぬつと入つてゆく伊佐雄の姿をみると清岡子爵も山中もさすがに怪乎として、呆氣にとられたやうな顔つきをしてゐた。八重子もその足音で人が入つて来たのを知つてか、ふつと此方へ眼をやつたが、思ひも懸けぬ良人がそこに突立つてゐるのをみると、かすかな呻めき聲を發して、みる／＼顔色を變へてしまつた。

清岡はやがて蒼く引緊つた顔をしながら立上つて、伊佐雄に軽く一禮しながら、

「今津さん、實は今お宅へ電話を懸けようと思つとつたところですよ。」と、静かな聲で云つて、先づその椅子を伊佐雄にすゝめる。

伊佐雄はそれには返事もせずじいつと清岡の顔を凝視しながら石像のやうに佇立してゐる。

た。

風雲が險惡とみてとつた山中は突如椅子から立ち上つて、

「ぢや夫人、私はあんまり遅くなりますから此れで失禮致します。何かの御用向きは又明日電
話で伺ひますから。では御免。」と云ひ捨て、そゝくさ逃げるやうに室を出ていつた。餘程酔
つてゐると見えて、その足許はふらくしてゐた。

八重子も子爵もそれには見顧りもしなかつた。

子爵はやつと節制を取返したやうに靜かな顔色になつて、

「ほんとに今津さん、丁度い、處へ来て下さつた。實は今お宅へ電話でさう云つて、誰方が夫
人を迎ひに来て頂かうと思つとつた處なんです。」と、云つて、今度はさも當惑したやうな顔で
八重子の方をみながら「夫人から伺つたところに依ると、貴方はもう何も彼も御存知ださうで
すから此際私からは何も申上げません。又いづれ機會を選んで、十分貴方に辯明もしよう、又
謝罪もしようと思つてゐるのです。」

伊佐雄はそれでも口を開かなかつたが、清岡はその顔を傷ましきうに見て、

「そりや貴方の方から私に對して仰有り度いことも澤山あるでせうが、併しどうか此際だけは
それを仰有らないて下さいまし。私はもう明日の午後にはこの日本を離れる男なのです。二年
経つて歸つて来るか、三年たつて歸つて来るか、或は又一生彼地で暮してしまふか分らない體な
のです。どうか私を此のまゝ、黙つて外國へやつて下さい。そしてどうか私の言葉を信じて、夫
人と私との間に一點の疚しいこともなかつたことを承認なすつて下さい。私はそれだけは誓つ
て貴方の前で云ひます。」子爵の顔には男らしい眞率な色がはつきりと現はれて來た。

伊佐雄はこの私室のなかに、二人の他にまだもう一人立會人がゐたと云ふことが意外である
と同時に、妙に安心の緒口になつた。そして先達の手紙の様子と云ひ、今の態度といひ彼はさ
う無下に子爵を疑ふ譯にもいかならぬと思ふやうになつた。

子爵の云ふところに依ると、八重子はその晚今津の家を出奔して子爵と一緒に歐羅巴へ遁る
つもりで來たのだといふ。山中から莫大な金を融通して貰つて、それを旅費にどうしても一緒
に連れていつて呉れと云つて彼女は子爵を責めに責めぬいたのだといふ。子爵はもうほとく
持て餘したやうな調子でそれを伊佐雄に語つたが、事理がはつきり伊佐雄の心に理解されたと

思ふとやがてついと立上つて、

『では私はもうこれで失禮します。』と一禮して、今度は八重子の方を向きながら、『ちや夫人私
はこれでお別れします。もう貴女にも一生お眼に懸る機会もあるまいと思ひますから私といふ
ものは遠い地平線の彼方に消えてしまつたものとして、どうかこれからは今津さんと幸福な日
を送つて下さい。歐羅巴へいつても私はもう一切お消息もしませんから、それだけは悪しから
ず思つて下さい。ではさやうなら。』さう云つたかと思ふと子爵はそのまゝ、くるりと後を向いて、
すゞ〜室を出ていつた。

跡には八重子の激しく啜り泣く聲だけが室の空気をふるはした。

伊佐雄は子爵が歸つてしまふと、さうしてゐる譯にもいかなないので磯谷邸へ八重子の行方が
分つたことを電話で報せて置いて、立遊る八重子を漸くのこと自動車へ乗せて兎に角ローズ
を出た。そして直様永田町へ廻つて、それなり八重子を磯谷の邸へ預けて、伊佐雄は唯一人で
小石川の邸へ歸つて來た。その頃にはもう夜が白々と明けかゝつてゐた。

十八の一

朝から慵くどんよりとしてゐた空は午後になると益々暗く陰鬱に曇つて來る、いつか寒い寒
い風さへ少しづつ、動いて來て、どう見ても雨催ひの空模様に変つていつた。

横濱の大棧橋には三艘繋つた大汽船のなかで、一番目の碇泊位置についてゐる香取丸はもう
あと二十分ほどで出帆するので、見送り人や、船相手の商人などはまるで蟻の匍ふやうにぞろ
ぞろ釣橋を降りて來る。船から降りた人の群は棧橋から舷の方を見上げながら、そこに立つ送
られる人々と名残り惜しさうに言葉を交はしてゐる。その人の群は刻々に濃くなつていつた。
清岡子爵はその時船首の方の甲板の欄に倚つて、蒼く引緊つた顔をしながらじいつと棧橋の
方を見下ろしてゐた。正式にどうかのといふのではないので、彼は獵服のやうな身輕な旅
行服を着て、洒落たソフトを少し前のめりに被つてゐる。

見送人のなかには石坂子爵や、大河内、松浦などの面々も打交つてゐた。總勢五十人ばかり
のなかには、貴夫人らしい婦人や、半白の老人なども混つてゐたが、そのなかでも若い貴族の

一連は一番賑やかに談笑してゐた。船のなかで別盃を挙げたので、その餘勢は彼等に様々の話題を與へた。清岡の歐羅巴行きはまだ疑問になつてゐるので、そこではいろいろな取沙汰があつた。

第一のサイレンが巨獸の咆哮するやうな凄まじい轟音をひびかせた。それは空氣にうなりを立て、遠く町の方までも響鳴して行く。

「あ、吃驚した。えらい音をたてるなあ。」と石坂はその音で話を胸切りにされて耳に手を當てたが、それと同時にふつと棧橋の彼方を眺めながら吃驚したやうに、

「お、今津夫人がやつて來た。稻垣君も一緒だな。」と、云ふ。皆はその聲で一齊にそつちを振顧つた。

棧橋の彼方からは石坂の云ふやうに八重子が貞夫と一緒に息せき急ぎ足で此方へやつて來る。人眼にたつやうな華美な棒縞のコートを着て、頭髮は水の垂れるやうな束髪に結つてゐる。どんな遠くからでもひと眼で分るやうなけばくしい風姿であつた。

八重子は皆の眼が一樣に自分の方へ向いてゐるので、面伏せらしくあらぬ方を見ながら大急

ぎで歩いて來る。たつたひと晩の間に彼女はひどく面癩れがして、頬の色の蒼ざめてゐるのが傷々しいほどだつた。貞夫は輕快な背廣のうへからオーバーコートを被て、細い杖を小脇に抱へながら二歩ほど遅れてついてくる。

彼等はやつとのことで見送り人の群のところまで辿り着くと、誰れにもなく一寸眼顔で挨拶して、そのまゝ、舷側の方へ寄つていつた。

石坂はおせつかいに口を出して、

「夫人。清岡は彼處にゐますよ。」と、皮肉らしい調子で云ふ。

八重子はすぐさま清岡の姿を見付け出してそつちへ歩み寄つていつたが、併し唯じいつと彼の方を見上げてゐるだけでしばらくの間は口もきかなかつた。急いで來たせるか肩先はぶるぶる慄へて、他眼にも分るくらゐ息が弾んでゐる。

清岡も悸乎としたやうな顔をしながら黙つて彼女の方を見下ろしてゐるが、黙つてゐるは人前もあるの、やがて、「どうもお忙がしいところを態々有難う。どうか今津さんに宜しく仰有つて下さい。」と、大きな聲で云ふ。

八重子は一寸頭を下げて、

「御機嫌よう。……」と、涙くんだ聲でたゞひと言それに答へた。

それと同時に船内では出帆の鉦が消魂しく鳴り響いて、つゞいてもう一度汽笛が鳴つた。と船尾の方からは眞白な泡の山がもくもく湧き上つて、舷側の鐵板は小刻みにふるへながら、彪大な船體はやがて小山が搖ぎ出すやうに徐々と棧橋を離れてゆく。

十八の二

香取丸の巨大な船體はさういふうちにも刻々に棧橋を離れてゆく。清岡子爵は多くの船客達の間で混じつて頻りに帽子を打振りながら別れを惜しんでゐたが、その眼はともすると八重子の方へ惹かれていつた。

八重子はまるで根が生たやうに身動きもせずじいつと清岡の姿を見送つてゐたが、その眼にはもう涙も出ないやうな絶望の思ひが宿つてゐた。今日別れてしまへばもう永遠に逢ふ機会もない人である。いづくの國の果てとも知らず、別れわかれになつて生きてゆかなければならぬ

い悲しい運命は今この今その岐路に迫つてゐるのである。それを思ふと繊細い女心にどうして悲歎の涙に沈まずにゐられよう、氣も狂ほしい哀惜の念は胸に迫つて、彼女は頻りに聲なき慟哭をつゞけてゐたのであつた。

香取丸はもう三尺ほどの大きさに遠ざかつていつた。曇り空の下に一筋ながく煤煙は流れて、船尾から湧き起つて来る水泡だけが靜かな海面に長い長い濛をひいてゆく。八重子の怨みは眞實それよりも長かつた。

沖の方ではかすかな汽笛が一聲、聲断れぎれに聞えて、それをこの港への名残りに到頭香取丸は防波堤の彼方の外洋へ出ていつてしまつた。と、みると、もう四邊には見送りの人影も薄くなつて、一番最後まで残つて好奇心をもつて八重子の素振りを注視してゐた石坂達のひと連れも、黙つてぶら／＼町の方へ歸つていつてしまつた。

それとみると、貞夫は八重子の方へ近寄つていきながら、

「ねえ、八重子さん。いつまで見送つてゐても仕様がないだらう。そろ／＼歸らうぢやありませんか。」と、云ふ。

八重子はそれでもまだ沖の方を見送りながら黙つてゐるが、ふと氣付くと今迄やつと持ち耐へてゐた空からは大粒の冷たい雨がぼつり／＼と落として来た。

「あ、到頭降つて来た。さ、急いで歸らないと、ずぶ濡れになりますよ。此處いらは伸も何もないんだから。」と、云つて、貞夫はやつと八重子を促して歩き出した。

八重子は喪心したやうに俛首れて、唯機械的に歩を運んでゐるといふ風であつた。そして時時うすく涙ぐみながら深い／＼歎息をついたりした。

税關の出張所の前まで來かゝると、そこには石坂達が何か飯でも食べる相談でもしてゐると見えて、ひと塊りになつて立つてゐるが、八重子が通りかゝるのを見ると冷評すやうな「左様なら」を浴びせかけたりした。

八重子はそれを聞くと目禮だけして別れてしまつたが、少し行くと今度は蒼ざめた顔をあげて、

「ねえ、貞夫様。私、どうしたらいい、てせう。何處かまるで知つた人のゐない遠い國へても行つてしまひ度う御座いますわ。」と、悲しみに充ちた聲で云ふ。

貞夫はそれを宥めるやうに、

「そんな馬鹿なことを云ふもんぢやありません。今日貴女はこれから家へ歸つて重大な任務を果さなければならぬ體ぢやありませんか。お父さんからあれほど頼まれて來たんだから、僕に對してもどうか無茶なことをするのはよして下さい。」

八重子はかすかに啜り泣きの聲を洩らしながら、

「私、このまゝ、家へ歸るのが厭なんです。今日は伊佐雄や父なんか集まつて、これから先の私の身の始末を相談するんだつて云ふぢやありませんか。私、いつこのまゝ、死んでしまひ度い、……」

雨はますます激しく降りだして來た。貞夫はもしものことがあつてはと思つたので、やがて、俣を見付けて八重子をそれへ乗せ、無理やりに停車場へ連れて來てしまつた。そして何かと遊る八重子をやつとのこととて發車しか、つてゐる東京行の電車へ乗せてしまつた。

鶴見を過ぎる頃には寒雨も愈々本降りになつて、港の海面は一面に銀灰色の雨の脚にかき暮れてしまつた。遠い海外の旅へ去つた清岡子爵は今どんな寂しい思ひに暮れながらその海のう

へを航してゐることであらう。

十八の三

八重子が貞夫に連れられてやつとのこととて永田町の磯谷邸へ歸り着いたのは午後の三時少し過ぎてあつた。その日は伊佐雄には隠れて清岡を送りにいつたので、どうせあとで知れるとしてもその時には何も云つてなかつた。どうか見送りだけは許して呉れ、それでなければどんなことをするかも分らないと云つて八重子が泣き狂ふので民造は仕方なしに到頭彼女の横濱行きを許して、たつたひとり遣ふことは出来ないの、態々貞夫を電話で呼んで同伴を頼んだのであつた。民造の心ではもう何ごとも貞夫に依頼するより外はないと思つてゐた。

豫定よりも歸りの時間が少し遅れたので、民造はひどく心配してゐた。で、八重子が歸つたと聞くとほつと安心の吐息をつきながら、報らせて来た小間使のお絹に、

「てはそのまゝ、ずつと此處へ来るやうにさう云つて呉れ。」と、云つて、書齋のそこいらを片附させた。

やがて八重子は貞夫と一緒にしよんぼりその座敷へ入つて来た。そして火鉢の前へ坐りながら、

「唯今。どうも有難う御座いました。」と、云つて、丁寧に手を支へて辭儀をした。

民造は力めて静かな顔をしながら、貞夫の方を向いて、

「や、どうもお忙がしいところをまことに恐縮でした。」と、云つて、頻りに禮を云つたりした。

八重子はそのまゝ、じつとして、父と貞夫との話しに聞入つてゐるが、やがて顔をあげて、

「あの、お父様。伊佐雄は今日何時頃此方へ参ると申して居しましたらう？」と、訊く。

民造はその顔をみながら、

「さ、三時頃にはやつて来ると云ふ話だったが、つい今しがた電話で、麻布の本邸の方へ廻るから晩になるかも知れないと斷つて来た。何かお父さんと話でもして来るのだらうと思ふが、私はどうも今夜は何か先方から重大な條件を提出してきやせんかと思はれてならんだ。」と、心配さうな聲で云ふ。

八重子は黙つて又首を垂れてしまつた。

そこへ歌子が出て来る、一座は妙にしんみりとして、今にも迫つて来る不慮な出来事をおづおづ待つてゐるやうな氣色になつて来た。

歌子はどうかしてせめて民造の氣だけでも引立てようとして、いろ／＼な話をしかけたがそれでも何んの効果もなかつた。唯なるべく面倒な問題へ觸れないやうに話の筋を運んでゆくだけ、歌子の力ではどうすることも出来ないのであつた。

五時少し過ぎると、突然玄關の方から小石川の旦那様がおいて遊ばしたと云つてお絹が取次いで来た。民造は洋館の方の二階の應接室へ通させて、しばらくするとそつとひとりてそつちへ出ていつた。もし呼んだら八重子だけ應接室へ来いと彼は云ひ置いていつた。

歌子はさうしてゐる譯にもいかないので、やがて氣を利かして、

「あの貞夫様も姉様も私の居間へ被來つて下さいませんか。此處ぢやお話しも出来ませんか。」と、云つて彼等を父の書齋から連れ出す工夫をした。

貞夫も八重子もやがて立つて、長廊下の向うにある歌子の居間へいつた。八重子が今津へいつてからはその十疊の座敷は歌子ひとりのものになつて、机や本箱や飾り棚の位置もすつかり

かはつてゐた。そして壁にかけた繪などもまるて取換へられ、そこには北海道の牧場の繪や、廣々とした雪景色の寫眞などが懸つてゐた。それはみんな武田の欽哉から送られたもので、今歌子の空想を支配してゐる唯一の對象物なのであつた。

八重子は久しぶりでもと自分も起き臥し、てゐた座敷の有様をみると耐らなく懐かしくなつて来た。この窓際へ机を持つていつて、夕暮れの空を眺めながら清岡へ手紙を書いたことも幾度であつたらう、それを思ふと八重子には又過ぎし昔のことゝもが次々と思ひ出されて来るのであつた。

十八の四

應接室の方では何ういふ話になつてゐるのか、父からは八重子に出て来いとも何とも云つて来なかつた。そのうちに漸次と時間は経つてゆく。八重子は何の音沙汰もないだけに却つて氣が揉めて来た。

貞夫と歌子とは氣にまかけてゐるながら、どうかして八重子の問題に觸れまいとするやうに、

頻りに別な話をしあつてゐる。それがまた貞夫には大きな興味を興へてゐるらしかつた。

八重子は暫らくすると我慢してゐられなくなつて、やがてそつと座を立つていつた。

歌子はそれを見咎めて、

「あら、姉さま、何處へおいで遊ばすの？」と、云つたが、八重子はあとを見返りもしずに、

「あの私ちよいと電話をかけにいつて來ますわ。」と、いふ。そしてそのまゝ、紙襖をあけてついと廊下の方へ出ていつてしまつた。

八重子は裏庭のひと眼に見渡される濡れ縁へ出て、そこへしよんぼり佇みながら何ごとか考へ込んでゐた。雨は漸次と強く降りまさつて來て樹立の底ではざわ／＼と物騒がしく風の音がさわいてゐる。池の水もいつか水嵩が高くなつて、飼つてある水禽も小舎へ入つてしまつてゐた。陰鬱と云へばこのうへもない陰鬱な日であつた。

八重子は自分の運命といふことに漸次と深く考へ進んでいつた。今日敢なく清岡子爵に別れてしまつたうへはこの身の行末はどうなるであらう。昨夜のローズの有様を目撃した伊佐雄がどうして自分の罪を許して呉れよう。譬へ伊佐雄がどんなに広い心を持ち、どんなに名譽といふ

ことを恐れても、今度ばかりはもう周囲の事情などには構つてゐまい。今朝曉方ちかくになつて自動車で實家まで送りつけて呉れた時、彼はどんなに激しい言葉を殘して別れていつたらう。「もう一度よく自分のしたことを反省してみるがい。私はもうこれ以上の侮辱には到底耐へられない。今度こそきつと斷然たる處置をとるから、そのつもりで私を恨むな。」と、火のつくやうな調子で云つて、伊佐雄は自動車の扉をばたきと閉めた。その時の心持ち、今思ひ出しても八重子はぞつとするやうである。

良人がさうまで立腹してしまつた上は自分の位置はどうなるであらう。自分はこのまゝ、今津の家から離縁されてしまふのであらうか。それとも又恐ろしい苛責の筈に夜晝せめさいなまれながら名ばかりの夫婦で暮らしていかなければならぬのであらうか。夫を思ふと、たつたひとりになつた今、八重子の胸には今迄自分のして來たことがはつきり思ひ返され、反省されると同時に血を吐くやうな切なさが犇々と迫つてくるのであつた。もう疾うからどうでもなれと捨て鉢な氣にはなつてゐながら父の顔を見、その聲をきくとさすがに彼女も悲しさが身をせめるのであつた。八重子の眼にはやがて悲痛の涙がとめどもなく湧きあがつて來た。

それにしてもあの清岡は今頃どうしてゐることであらう。雨に降りこめられた船室で何を思ひ、何を悲しんでゐることであらうか。浩蕩とした波路の果てに降り迷ふ雨の脚はその思ひをどんなに深く鋭くすることであらう。あゝ、せめてあの船の後を追うて今ひと眼逢ひ度い、あの胸に凭れて盡きせぬ名残を涙の限り泣いて泣いて泣きつくしたい。……

八重子はそんな悲しみに身も心もひたしつくしてゐるうちに、四邊は漸次と息をひくやうに寂しく暮れかゝつて來た。ふと振仰ぐと樹立の陰に見える二階の應接室にはもう明るい電燈が輝いてゐる。そこで今自分の果敢ない運命が良人と父との手に握られ、散々に弄ばれ突き崩されてゐるのかと思ふと彼女は耐らなくなつて來た。どうかして今そこで話されてゐる話を少しでも聞き度い。

八重子はやがて我れにもなく洋館の方へ歩いていつた。

十八の五

廊下から洋館へ通ふ大きな切戸のところまで來ると、その時洋館の方の階段のところでは誰

れかゞ階下へ降りて來るやうな氣配がする。八重子は一度開けようとして懸けた手をそつと引いて、切戸を細めに開けてみると、丁度そこからは眞面に見える女關のホールではもう伊佐雄が歸るところと見え、明るい花電燈のなかで小間使に外套を着せかけて貰つてゐる。その後には民造が悄然として立つてゐた。

伊佐雄は何か重大な事件を双肩に脊負つてゐるやうに顔色はひどく蒼ざめて、切れの長い唇を一文字にきり、と引結んでゐた。外套を着てしまふとちらと民造の方を向いて、

「や、どうもお邪魔をしました。どうか向後のことはよろしく。」と、云つて妙に丁寧に別れの挨拶をしながらそのまゝ、女關の石階を降りていつた。

民造は、

「どうもいろいろ御心配をかけて、……」と口籠りながら云つて、それを階段の降り口まで送つてゆく。その顔にも妙に改まつた色がみえてゐる。

自動車の警笛はやがて門内の馬車廻しの方で聞えた。

民造は傷ましい眼眸をしながらその後を見送つてゐたが、やがて深い嘆息を吐きながら此方

へ歩いて来る。

八重子はそこに立つてゐるのを見付けられてもと思つたので、すぐさま切戸はそのままにして置いて廊下の方へとつて返した。そしてその曲角のところて父の來るのを待つてゐたが、父の姿が見えると、彼女はついでと走り出て、

「お父様。もう伊佐雄は歸りましたの？」と、云つた。

民造は思ひ懸けないところから八重子が出て來たので吃驚したやうにその顔をみつめながら、

「お前はそこにあるたのか。」と、云つて、急に苦々しい顔になりながら、「お前ひとりであるのなら幸ひだ。一寸話し度いことがあから應接室まで來て呉れ。」と、云つて、そのまゝ、又洋館の方へ引返してゆく。

八重子は伊佐雄との間の話がどうなつたかと思つて、おづくしながらその後隨いていつた。今の伊佐雄のたゞならぬ様子でみると何か一大波瀾が起つてゐるらしいのは大方想像がつく。それにしてもどうなつたのであらうか。

應接室へ來て見るとそこではおみつが跡片附をしてゐた。今までさかんに煙草を吸つたものとみえ、明るい電燈の輝く華麗な室には濛々と薄煙が立ちこめてゐた。

民造はいきなり今迄坐つてゐたらしい腕椅子へがくりと腰をおろして、おみつに、

「おい、みつ。そこはさうやつて置いておい、から俺に水を一杯もつて來て呉れ。」と、命ずる。

おみつは片附けた盆を持つて、

「はい、畏まりました御座います。」

と、素直に云ひながらそのまゝ、室を出ていつた。

たつた二人になると、民造は力めて嚴かな顔色になりながら、

「八重子。」と、低い聲で呼んで、「お前は飛んでもないことをして呉れたなあ。」と、底力のある聲で云ふ。

八重子はそのひと言でもう返事もし得ないやうに俯向いてしまふ。

民造は猶ほも言葉をついで、

「事件がかうなつて来てしまつてはもう私は何を云ふ元氣もないが、併し今日といふ今日まで、私はまさかお前がこんなことをして呉れようとは思はなかつた。清岡の方のことはまあ第二の問題として、私はお前の心がこれほどまでに無考へになつてゐようとは思はなかつた。お前は自分のみならず、この私まで破滅の淵へ投じてしまはうとするのか。」と、慄へ聲で云ひながら何か懐をもぐぐさせてゐるが、やがてそこから一通の證書のやうなものを取出して、それを八重子の眼の前へ突きつけた。

それは八重子が山中へ對して書いた金の借用證書であつた。

十八の六

八重子は父の手で卓子のうへ、置かれた借用證書をみると慄乎としたやうに顔色をかへて、「あら、それは、……」と、思はず口へ出して云つたが、民造の強い顔をみると、もう何も彼もなるがまゝになれと云つたやうな自棄な顔つきになつてしまつた。それまで父の手に押へられてしまつた上はもういくら腕いたとて駄目だと思つた。

民造はその顔を穴のあくほど見詰めながらやがてその證書を突きつけて、

「八重子、これは一體どうしたものだ。相手もあらうに、こんなものをあの山中へ渡すなどは、無考にも程があるぢやないか。この證書があとからどんな禍を残すと思つとる。」と、云つたが、そのまゝ、力なげに顔を背けて、「お前は知るまいが、今日實は山中が今津の本邸へこれを持つていつて、お父さんに向つて強請がましいことを云つたのだ。東海汽船の方の或重要な賣買権を一手に占める目的で山中はこれを武器に使つたのだ。そればかりぢやない、お前の秘密もすつかり彼奴の口からお父さんの耳へ入つてしまつたのだぞ。」

八重子は首を垂れたまゝ、死んだやうに身動きもしない。

民造は今度はいら／＼したやうな顔になつて、

「一體お前は何の用があつて二千圓三千圓といふ金を彼奴から借りたのだ。そんな金の必要が何處にある。」と、詰るやうに云ふ。

八重子は仕方がなくなつて、

「あの、何も彼も私が悪いんで御座います。どうかお許しなすつて、……」と、云ひながらそ

のまゝ涙に沈んでしまふ。

「いや、私は今の場合善い悪いのといふことを問うてゐるのぢやない。お前は何の必要があつてこんな借金までしなけりやならんのかそれを訊いてゐるのだ。今津の方でも随分金は自由になるだらうし、それに實家からも可成りな額の金が月々いつとるのだから、それで足りん筈はないぢやないか。」

八重子は歎り上げながら、

「いろ／＼贅澤なものを買つたりしましたもんですから……。」

「それなら何故私の處へさう云つて來ないのだ。お前は私のあることを忘れたのか！」

「いゝえ、決してそんな譯ぢやないんで御座いますけど、一旦彼方へ縁づきましたうへはさう度々お父様へ申上げるのもなんだものですから……。」

民造は泣き歎る八重子の姿をまじ／＼見ながらそのまゝ深い思ひに沈んでゐた。そして漸次と自分も絶望的な顔になりながら少時の間押黙つてゐたが、やがて、

「兎に角この證書は私の方で買ふことにしてこの事件だけは片がつく筈になつたが、併し今津

の家とはもう到底今迄のやうな状態で交際してゆくことは出來ない。兩家の社會上の地位から云つても今差當つて離婚をするなど、云ふことは到底出來る話ぢやないのだから私は先方の條件を入れてひと先づ夫婦が別居する體にして、お前の體を實家へ引取ることに話を極めたから、お前もそのつもりでこれからは大に謹慎してゐなけりやならん。自分のしたことをよく反省してみ、飽くまで自分の身を清く持つやうにしなければ、この私までが社會に對して顔向けが出來んことになる。」と、云ふには云つたが、民造は自分の心の底に燃えてゐる憤懣の十分の一も云ひ得ない様子であつた。そして神經的に眼を瞬きながら、

「今あの今津との關係が面白くなかつたら、私の事業はどうなつてしまふと思ふ。折角これまでにして來たのも水の泡になつてしまはんけりやならんのだ。」と、歎息をつくやうに云つて、腕椅子の椅背へがくりと頭を寄せかけながら口を噤んでしまつた。彼の顔には益々絶望の色が濃くなつて來た。

八重子は唯ひた泣きに泣きつゞけるばかりであつた。

十九の一

八重子はその日から磯谷の邸へ引取られて、再び自分の生れた家で起臥することになった。手廻りのものや衣裳などはその翌日から三日間に亘つて今津の家から運ばれて来たので、彼女は父の許しを受けて以前母の居間になつてゐた奥の十疊へ自分の居を構へた。衣裳箆篋なども自分の氣の向くやうに飾つて、悲しいなかに何處か肩がぬけたやうな安心を覚えながら日を送つた。

清岡からはその後唯の一度も消息がなかつた。着いたとも着かぬともそれさへ八重子の耳へは聞えて来なかつたので、八重子の悲しみは却つて深くなつてゆくばかりであつた。

磯谷の邸へ歸つた當座はさすがに八重子も謹慎してゐたが、日が経つに従つて、漸次氣にゆるみは出て来る、それに一度捨て鉢になつた彼女の心は事ごとにつけて妙なむら氣を勃發させずには置かなかつた。ふとしたこととて腹を立てたり、泣いたりするやうなことが漸次と募つていつた。しまひには民造さへ持て餘すやうなことが往々あつた。

さうした歇斯的利亞性な心持が募つてゆくに從つてひとり心を悩ますのは民造であつた。八重子の道ならぬ行爲から今津家とも一日に面白くなくなつて今ではともすると此儘縁が切れて了ふかも知れないやうな羽目に陥つてゐるのである。もし今津との聯絡が断れてしまつたとしたら彼の事業はどうなつてしまふであらうか。汽船會社と造船所とそれに磯谷商會と、この三つが三角同盟を結んでゐればこそ彼も比較的自由に活動することが出来たのであるが、もしその間に少しでも扞格が生じて来たとすれば彼の事業は忽ち蹉跌を來たして又もとのやうな逆境に沈淪してしまはなければならぬのである。それは民造にとつては死にまさる苦痛であつた。それと同時にどんな不孝な子であつても、たつた二人きりの姉妹であつてみれば八重子にも絶ち難い煩惱がかゝつて、彼女の將來といふこともひどく彼の頭腦を悩ました。そして心ではいろ／＼に焦つたり、悶えたりしてゐながらもいつか八重子に對する溺愛は彼の意志を鈍らしてしまふ。彼はその二つの難境の間に板挟みになつて、日々苦惱のうちに轉々してゐるのであつた。

八重子は父のその苦惱をよく知つてゐた。どうかして父をその苦惱から救ひ出さなければな

らないとは思つてゐながらも彼女にはどうすることも出来ないのであつた。或時は自分の方から進んで伊佐雄に詫言を入れて再び今津の家へ復歸しようとも思はないでもなかつたが、いざとなると捨鉢な氣がむら／＼と起つて来て、彼女の決心を鈍らせてしまふ。八重子自身もそのまゝ、清岡のこともなにも思ひ切つて、今津の家へ復歸するのが一番策を得た道だといふことを痛いほど明かに知つてゐるのであつた。

その月も末近くなつて、そろ／＼交際社會も忙がしくならうといふ。帝國劇場では某婦人會主催の觀劇會が開催された。それは遙々佛蘭西から渡つて来た歌劇團の演技で、もう初日をあけるとすぐから非常な人氣を煽つたものであつた。某婦人會はその一日の座席を買占めて上高は全部慈善の目的に使用するといふのでその觀劇會を催したのであつた。八重子は今迄そんな會には必ず出席する例になつてゐたので、彼女の許へもその會の幹事から懇々入場券を送つて寄越した。

八重子は謹慎中のことゝ、實家へ歸つて来てからはまるでさうした席へも顔を出さなかつたが、出好きの彼女がさういつまでも火の消えたやうな寂しい邸へばかり整伏してはゐられなかつた。

つた。彼女は日が経つにつれ、何とかして明るい世界へ出たくてもういち／＼してゐたのであつた。

美しい色紙に刷つた觀劇券をみると彼女は到底じつとしてゐられなかつたので、父の民造に哀願してやつとのこととて久しぶりでの外出を許して貰つた。民造は餘り家にばかり置いては却つて歇斯的利が募ると思つたので、已むなくその願ひを許すと、もに、又何かの危険を感かつて、懇々歌子に同伴を命じた。

十九の二

八重子は殆んど一月振りで外出するので、唯もう氣が軽くなつたやうにいそ／＼してゐた。併し長い間の氣苦勞はいつか艶やかな彼女の頬にも暗い影を刻んで、いくら晴々しい顔をしてゐても心の底に宿る悲しきは打消すことが出来なかつた。

八重子は歌子とふたりで化粧室へ入つて二時間の餘もかゝつて化粧をした。八重子の方は日に日に絢爛な眼に立つやうな衣裳を好む傾きになつて来て、その日も藤色に鳳凰の模様をおい

た派手な襲に、古代の樂器を浮かした唐錦の帯といふこしらへて、胸にかけた金鎖や髮針などにも、高貴な寶石がちら／＼光つてゐた。歌子の方はそれと反對に漸次と地味に地味になつてゆくの、縞お召の極めて簡素な衣裳を着て、無雜作に束ねた髪には西洋花の簪をたつたひとつさしたきりだつた。年から云へば二つも下てるながら姉と並んで立つと、何方が姉だか分らないやうな扮装であつた。

八重子はそれを嫌つて、あれを着ていけ、これを着ていけといつて頻りにもう少し派手に粧らせようとしたが、歌子は素直に笑つて、

「私、これだ、のよ。私みたやうなものが派手にすると可笑しう御座いますわ。」と、いつて聞き入れなかつた。

自動車の支度が出来ると二人は澤山の召使たちに送られて邸を出た。その日はからりと晴れ渡つてゐて、溜池の通へ出ると降るやうに星の輝く空が自動車の窓から一面に見えて來た。まだ肌寒い砂塵を含んだ風が颯々とその窓をかすめてゆく。

帝國劇場へ着いてみると、もう歌劇は序幕が開いてゐた。二人は入口のところ立つて迎へ

る會の幹事達の挨拶を受けて女案内人の後からそのまゝ、座席の方へ通つていつた。

その晩の出しものはコミックオペラで「腕環」と、云ふのだつた。明るい廣間を現はした舞臺には燕尾服を着た紳士や花と着飾つた貴婦人達が二十人ばかりも登場して、愉快な調子でさかんに歌をうたつたり、舞踏したりしてゐる。二人が入つていつた時には丁度その一座の明星とされてゐる若い女優が銀鈴のやうな聲を振絞つて獨唱をやつてゐた。

座席へ就くとそこいらには見知りの誰彼が坐つてゐるので八重子は彼方此方へそつと挨拶をした。そして浮々とした心持で舞臺の方へ眼を遣つた。

その幕が終ると観客席には明るい光がぱつと點ぜられた。今迄は薄暗闇でよく見えなかつたが明るくなつてみるとその日は恐ろしい大入りで、女の髪や西洋人のボンネットがまるで花のやうに観客席の全部を埋めてゐる。薄色の幕から反射して來る光線は柔かい明るさをそのうへに投げて、空氣の底には香水の匂ひや人蒸息が甘く溶けてゐた。

八重子は歌子を促がして廊下の方へ出ていかうとしたが、歌子は妙に恥かしがつてこのまゝ、座席に残つてゐるといふ。仕方がなしに彼女はひとり出ていつた。そして廊下の出口を出る

時には自分の美しさを人に誇示するやうにそれとなく肩を張つて歩いていった。
廊下へ出ると出遇ひ頭に、

「まあ、八重子さま。」と、云ふ聲がしたのでふつと振顧つてみると、そこには學校友達の入江、内海、寺田など、云ふ懐かしい連中がひとかたまりになつて立つてゐるので、八重子は吃驚して眼を敏てながら、

「まあ、……」と、云つてそこへ立止つてしまふ。

「ほんとに随分しばらくして御座いますのねえ。」と、皆は懐かしさうな口振で云つて、八重子の方を見たが、その眼の底には何かしら冷たい光があつた。

八重子は唯叮嚀な挨拶をもつてそれに答へた。

十九の三

なかでも寺田はじいつと八重子の方をみて、

「あの、貴女唯今永田町のお宅の方なんて御座いますつてねえ。私兄から一寸伺ひましたが……」

……と、云ふ。

八重子はかうした昔の友達に顔をみられるのが辛かつたのもぢくしてゐたところへ寺田にさう云はれたので心もち顔を染めながら、

「え、私少し體が悪いもんですから。」と、言葉を濁してしまつた。兄から聞かなくても八重子が今津家から實家の方へ引取られてゐる事實は人の噂にも上つてゐるので、皆はそれとなく知つてゐる筈であつた。

寺田はそれでも飽くまで表面をつくつて、

「お體がお悪いんで御座いますつて？ そりや可いけませんわねえ。」と、眉を擧めながら、「ほんとお大事に遊ばせよ。私達も此間から御心配申してゐたんですわ。」と、云ふ。

それから學校の同窓會などの話のはじまつて、皆は多愛もなく打解けてゐるやうな顔はしてゐたが、その間には學校時代に覺えたやうなしみりした親しさが少も残つてゐないのを八重子はそれとなく感じた。口では面白さうに笑つてゐても、すぐそのあとから厭に勿體らしい社交的辭令が出て来る。

そのひと連れの傍をさまざまに着飾つた人の群が流れていつた。

石坂や松浦、大河内、さう云つた連中も八重子に挨拶しながら通つていつた。そして誰れも彼もしまひには通りすがりの西洋人までが彼女の美しい姿を振顧つてみていつた。

さまざまの階級の人達から挨拶される度に八重子の頬には満足の微笑がのぼるのであつた。そこへふいに又後から、

「夫人。…」と、云つて彼女を呼びとめたものがある。

振顧つてみるとそこにはいつ来たのか山中が来て立つてゐる。彼は脂ぎつた顔に愛想笑ひを浮べながら、

「夫人、その後はどうも御無沙汰致して居ります。お變りも御座いませつか。」と、云つて丁寧に挨拶をしたが、そのまゝ、彼女の方へそつと摺寄つて、

「あの、實は一寸御眼にかゝつてお話致し度いことが御座いますんですが、もし御都合が出来ますなら東洋軒へもお伴致し度いんですが、…」と、追従笑ひをしながら背廣服のチヨツキのところを揉み手をする。

八重子はひと眼山中の姿をみた時に悪い人間に逢つたものだと思つた。今度の別居事件に就いてはこの山中がいろいろ原因をつくつてゐるので、何とかして腹癒せをしてやり度いと思つたが、何を云つても知つた友達ばかりの中なので彼女はうっかり口がきけなかつた。そして話があるといふのを素氣なく扱ふ譯にもいかなないので、

「お話があるんならそこで伺ひませう。」と云つて、彼女は入口の扉に近い方へ歩いていつた。と、山中はその後から隨つて来て、

「まあ、さう仰有らずにお手間は取らせませんから、一寸東洋軒までお伴を願ひ度いんで… それに私も一應お話しをした上で夫人に謝罪をしなければならんことも御座いますし、又改めてお願ひ致さなければならんことも御座いますから。」と、執拗く云ふ。

八重子は父民造のさばきて彼との間の金銭上の關係は切れてしまつてゐるものゝ、清岡との間の秘密を知つてゐるのは彼なので、うっかりした眞似も出来ないと思つて仕方がなしに彼の云ふ通り東洋軒へ入つていつた。

東洋軒の食堂には一杯客が立て込んでゐた。明るい電燈の下では食器のがちやく音や談笑

の聲が賑やかに聞えてゐる。棕櫚竹や常磐樹の鉢物の蔭を白い上衣を着た給仕達が忙はしきうに往來してゐる。

山中はやつと給仕に頼んで隅の方にあるひとつの卓子をあけて貰つた。

「さ、どうぞお懸けなすつて。」と云つて彼は八重子に椅子を與へながら給仕に珈琲を命じた。

十九の四

山中は四邊にざわ／＼してゐる人前もあるので、初めのうちはさあらぬ話に紛らかしてゐたが、開幕の警鈴が鳴つて人影が漸次と薄くなつて來ると、彼はやがて卓子へ寄りかゝるやうな恰好をしながら、八重子の方へ話しかけた。

「どうも先達はいろ／＼御迷惑をかけまして、何とも申譯が御座いませぬ。實はあんなことにする筈ではなかつたのでしたが、今津さんが餘り分らないことを仰有るので、私もつひ眞氣になつてしまひまして、貴女のお父様にまでどうも飛んだ御迷惑をかけてしまひました。何ともお詫の致しやうもありません。」と、幾度か頭を下げながら云つた。

八重子は何を云はれても黙つてゐるが、つひ我慢が出来なくなつて、

「でも貴方も餘りぢやありませんか。あれほど堅いお約束をして置いたのに……」と、云ひかけると、山中はそれを両手で押へて、

「いや、恐れ入りました。どうかそれだけは仰有らないで下さいまし。それでなくても私はもうひどく後悔じとるのですから。」と、云つて、苦笑ひをつくりながら、「お庇様で磯谷さんの方からのお言葉で萬事は解決がつかましたんですから、どうか今迄のことはさらりと水に流して頂き度いもので。それでないところの私が穴へでも入らんければならないことになりますのでな。へ、へ、へ。折角これまでにお近しく頂いて居りますのに、もしこの儘御縁が切れるやうなことにでもなりますと私も非常に残念ですから、……」

八重子はその顔を眞面に見て、

「でももう貴方も私を利用して仕事をなさることも出来なくおなりなんですから、このまゝ縁が切れてしまつても惜くはないぢやありませんか。」と、擲論するやうに云ふ。

山中は頭を掻いて、

「さう仰有られてしまふと全く一言も御座いませんよ。私も東海汽船の方のことは他から頼まれてやりましたッけて、決して自分の意志ではなかつたんですからそれだけはどうか幾重にもお含みを願ひ度いんです。ねえ、夫人、もうそんなことは水に流して、どうか以前同様もし御用でもありましたらどうか私に仰有つて下さるやうにお頼み申します。」と、云ふ。

八重子は折柄給仕が運んで来た珈琲を前へ引寄せて黙つてゐた。

山中はウキスキイを取つて珈琲のなかへ混ぜて呑みながら、何か頻りに考へ込んでゐたが、やがて、四邊を憚るやうに聲を潜めて、

「實はね、夫人、今夜御相談し度いといふのは他のことぢや御座いません。今日一寸貴女の御一身上のことに就いて妙なことを聞き込んだもんですからそれについて一寸お話を致したいと思ひまして、……」と、思惑ありげに笑ひながら云ふ。

八重子はつひ引込まれて、

「私の一身上のことつて何んですの？」

「いや、そりや詳しくお話し、ないと分りませんが、……」と、云つて山中は話の順序をたて

るやうに咳拂をしながら、「實はこんなことを私の口から申上げるのは失禮に當るかも知れませんが、あの、夫人は近々のうちに愈々今津さんの方をお引取りになるといふぢや御座いませんか。」

八重子は今別居こそしてをれ、そんな進んだ話はまだ少しも耳にしてゐないので、

「何んですつて、私が今津から、……？」

と、云ふのを山中は巧みに引取つて、

「いや、こりや今津さんの口から直接に伺つたことなんです。一旦別居させたらうへで時機をみて断然離別するとかういふことを今津さんが御自身で云つて居られましたもんですから、私も全く容易ならんことだと存じましてなあ。……」さう云つて山中は顔色を讀むやうにまじく八重子の眼のところを見る。

八重子はひよつとしたら伊佐雄が愈々そんな決心を極めたのかも知れないと思つたが、たとひ今離婚になつてもそれはもう已むを得ない成りゆきだと思はずにはゐられなかつた。八重子にはもしさうなるとすれば却つて身のきまりがつくやうにさへ思はれるのであつた。

十九の五

八重子は少時するとやつと口を切つて、

「そりや私にお訊きになるよりも今津の方からお訊きになつた方が早いでせう。今津の口からさういふことが出たとすればこれより確かなことはないんですからねえ。」

山中は八重子の顔色が動いたのをみると、そこへつけこんで、

「こんなことを申して又御立腹なさると困りますけど、實は私も夫人の御一身については陰ながら随分心配して居りますのですから、どうかそのおつもりで、悪くお取り下さつては困ります。」と云つて、残りの珈琲をぐつと飲み干しながら、「それでかうなりました以上は、私の考へてはいつとも今津さんの方とはさつぱりと手をお切りになつてしまつた方が夫人には御得策ぢやないかと思ひます。今津さんの方ではもうそれとなく跡の奥さんの候補者といつたやうなものを捜して被居るんださうですし、此際愚圖々々して被居つては却つて後から御不利益なことが起りやしないかと思ふんですが……」

八重子はそこまで聞くと顔をあげて、

「山中さん、どうかもうそんなお話はお止めなすつて下さい。さういふ問題は今津と磯谷とその兩家の間のことであつて、貴方がたに立入つて頂く問題とは違ひますから。」

山中は又頭を掻きながら、

「は、は、。恐れ入りました。さう仰有ればおほきに左様で……」と、云つて、「つひどうも夫人の御利益ばかり考へとるもんですから差出がましいことを申上げて済みません。」

そこへ誰れかゞ入口のところからそつと此方を覗き込んだ。とみるとそれは思ひも懸けぬ伊佐雄であつた。矢張り観劇に來たものと見え、會社からすぐに劇場へ廻つたやうな風姿をしてゐるが、彼は棕櫚竹の蔭からちらりと此方の様子をみると、何と思つたかそのまゝ、ついと踵を返して彼方へ歸つていつてしまつた。

八重子は胸を躍らせながらその後を見送つてゐるが、やがて又伊佐雄とひき違へに今度は四十格好のフロツクコートを着た、口髭の濃い、品のい、紳士が、そこの入口のところから入つて來た。

山中も伊佐雄の姿をみるとさすがに呆氣にとられたやうな顔をしてゐるが、その紳士が入つて来るのをみると突如椅子から立ち上つて、

「お、伯爵。」と云ひながら大急ぎでそつちへ歩み寄つていく。そしてその前へいつて媚びるやうにぺこ／＼辭儀をしてゐるが、やがて、

「御紹介申上げませう。」と云つて、その紳士と一緒に此方の卓子へ歸つて来る。

その紳士は宮島といふ伯爵であつた。八重子も屢々公會の席上で逢ふので顔は知つてゐるが、まだ言葉をかはしたことは一度もないのであつた。貴族院でも有力な位置を占めてゐる人で、それと同時に花柳界などでも可成噂の多い人であつた。つい一年ほど前に夫人を喪つたので、八重子もそんなことから宮島といふ名を記憶してゐるのであつた。

山中は自分で椅子を持つて来て伯爵を坐らせるとやがて改まつた調子で宮島伯爵を八重子に紹介した。八重子はいつもの交際馴れた嬌態をして、

「よく方々でお眼に懸かりますんで御座いますけど、まだ御挨拶も申上げませんで、どうかよろしくお願ひ致します。」と云つて、丁寧に挨拶した。

伯爵はポケットから銀製の葉巻入れを取り出しながら鷹揚に笑つて、

「いや、どうも私こそ。」と、云つて、如何にも氣のさくい調子で、「御尊父の方は私も知つてるのですが……」と云つて葉巻きに火を附けようとする。山中は側からマツチを摺つて恭しくそれに點けてやつた。

父の民造を知つてゐるといふことから話の緒が出来て、伯爵は八重子にいろ／＼な話をかけた。山中は其間ていかにも取做すやうな態度で兩方へお世辭を振り撒いてゐた。

十九の六

八重子はしばらく話をしてゐるうちにいかにも平民的な、氣のさくい伯爵の人柄が分るやうな氣がした。つひそれに引込まれていろ／＼な取留めのない話をしてゐるうちに幕になつたのみえて、又食堂にはぞろ／＼観客が流れ込んで来た。

八重子は伊佐雄のことや歌子のことが氣になるので、やがてさうもしてゐられなくなつて、徐かに起上りながら、

「あの誠に失禮で御座いますが、私伴れが御座いますので、お先へ失禮いたします。」と、云つて、卓子を離れた。

伯爵はそれをみると軽くうなづいて、

「いや、私こそ失禮しました。つまらん話でお引止めして。」と、云つて葉巻の煙を天井の方へ吹きつけながら、

「若し芝の方へでもおいででしたら私の邸へもお寄りなすつて下さい。何も御馳走はないが、今度茶室を建てましたから。……」と、云ふ。

八重子はもう一度丁寧に辭儀をして、

「有難う御座います。いづれ又お邪魔に出ますから、……」

「どうか御尊父によろしく。」

八重子はその聲をあとに聞き捨て、食堂を出ていつた。山中はその出口まで送つて来た。

座席へ歸つてみると歌子はしよんぼりたつたひとりてそこに坐つてゐるが、八重子が來ると同時に方々からいろいろな人の視線が集まつて來るので、さすがに自分までが面伏せさうに眼

を逸らしながら、

「何處へいつて被居つたの？」と、訊く。

八重子は何喰はぬ顔で、

「今皆さんに逢つてしまつたもんだから食堂へお伴してゐたの。今の幕面白かつて？」と云ふ。

歌子は沈んだ聲で、

「え。」と答へたが、やがてそつと八重子の方へ顔を近寄せて、「あの小石川の兄様が來て被居るのを御存じ？」と、云ふ。

八重子は白々しい顔をして、

「まあ、さう、何處に？」と云つたが、歌子の指さす先をみると、伊佐雄はつい三側ばかり先のところに坐つてゐるのであつた。

八重子はさすがに胸を躍らせたが、そのうちに又第三幕目が開いたので、そのまゝ舞臺の方へ眼を逸らしてしまつた。

その幕は戀の場面であつた。舞臺一面に花園を現はして、その真中に大きな大理石の噴水が

こしらへてある。月夜の光景とみえて、簀の子のところからは眞白な光が雨のやうに降りそ、いて来た。そこへ先刻の女主人公の女優が現はれて来て、澤山な天使をかせに使ひながら管絃樂を相方に透きとほるやうなソプラノの聲で戀の歌をうたふのである。

曲折極まりない節廻しなので歌詞は何を意味するのか少しも分らなかつたが、その聲を聞いてゐるとさすがに甘い歡樂の波に引攫はれてゆくやうな酔ひ心地を覺える。

八重子の胸にはその樂聲が再び古創をえぐる様に響いて、清岡のことがまるで夢幻のやうに思ひ出されて来る。今頃は何處の國の都で寂しい起臥しをしてゐることであらう。倫敦でか、巴里でか、それを思ふと八重子の眼には涙が云ひ甲斐もなく滲んで来るのであつた。そして思ひはいつか舞臺の面から遠い萬里の波濤を越えて異國の方へとさすらつてゆく。

その次の幕間になつても伊佐雄は素知らぬ顔で到頭此方を振り顧らなかつた。八重子は今茲て顔を合せるのがいかにも心苦しいので、やがて歌子を誘つて廊下へ出てしまつた。そして頭痛がするからと云ひこしらへて、そのまゝ、劇場を出て、電話で自動車を呼び寄せて、ずつと邸へ歸つていつた。

その晩八重子は幾度か悪夢に襲はれて安々と睡ることが出来なかつた。清岡のことや、離婚のことが先々と問題を生んで、そのために彼女は半夜轉々として將來のことを思ひ煩つたのであつた。

二十の

帝國劇場へ行つた翌々日のことである。午少し過ぎに貞夫の名で八重子のところへ電話が懸つて来た。もし手が空いてゐるなら電話口へ出て呉れ、急に所用があつてお話し度いからと取次の者は云つた。

八重子はしばらく貞夫にも逢はないので、電話と聞くと妙に懐かしいやうな心持ちになりながら早速居間から電話室の方へ出ていつた。

電話口へ出てみると、懸けてゐるのは貞夫と思ひの他、それは山中であつた。彼は自分の名で磯谷家へ電話をかける譯にいかないの、態と貞夫の名を騙つたのであつた。

「もし、もし、貴女は夫人で、私はあの山中で御座います。へ、へ、へ。」

と云はれた時には此方が貞夫だとばかり信じきつてゐたゞけに八重子は少し腹立たしい心持ちさへした。

山中は八重子に詰られない前に貞夫の名を騙つた詫びやら、帝國劇場でのごことなどを長々と饒舌つた。そしてそのあとで、實は今日急にお目懸つてお話し、たいことがあるから、若し御都合が出来るなら一時間ばかり暇をみて何處か逢つて貰ひたいと云つた。

八重子は何の用とも知れないので氣が浮かぬやうな返事をしながら行くとも行かないともはつきりしたことを云はなかつたが、山中の熱心な口振りで見ると何か自分にとつては重大な事件であるやうな氣がして來たので、なるべくなら電話口でそれを聞かうとした。併し山中はどうしてもそれを云はない。こゝでは他聞もあるからどうか是非今日中にお眼懸れるやうにして呉れと云つて頻りに懇願した。電話口に響く物音でみると、彼は會社からでもかけてゐるらしい様子であつた。

八重子は仕方がなくなつて、それではこれからすぐにローズへ行くから彼處で逢つて話を聞かうと答へるよりほかに仕様がなかつた。山中はそれを聞くとひどく喜んで、それでは是非さ

う願ふことにして、ローズで待つてゐるからと云つて電話を切つてしまつた。

八重子は自分の居間へ歸つて來ると何かしら重荷を背負はされたやうで氣が氣ではなかつた。山中は一體何のためにさうまでして自分に逢ひ度いのであらう。重大な事件といつてももう彼との間の金銭上の關係はすつかり切れてしまつてゐるのだし、清岡も遠い海外の旅に出てしまつたうへは彼が直接關係してゐる事件はひとつもない筈である。

さう思つて來ると八重子はふつと帝國劇場のことを思ひ出した。さういへばあの時山中が伊佐雄のことを頻りに云つてゐたのを覚えてゐる。離婚のことに就いて彼が妙に含んだやうな物の云ひ方をしてゐたのを八重子ははつきりと思ひ出した。もし山中が自分に對して何か計るところがあるとなればきつとその離婚に關したことに相違ない。その後は今津家とも消息が絶えて、伊佐雄がどういふ決心をきめてゐるかは少しも分らないのである。表面は平靜を保つてゐるやうに見えても、その底にはどんな企畫が計畫されつゝあるのかそれは八重子には少しも分らないのであつた。殊にあの晩、八重子が山中と話しをしてゐるところを伊佐雄にも見られてゐるのであるから、ひよつとしたらそんなことから、何か事件が突發して來たのではあるまい

か、八重子はさう思ふと何かしらすぐそのことが急に心配になつて来た。
 八重子はやがて自分で着換への支度をした。その日は民造も所用で朝から留守であつたし、それに歌子も茶の湯の月並會があつて午から出ていつたので、その隙をみて彼女はこつそり邸をぬけ出ようと思つたのであつた。で、餘り眼に立つ風装も出来ないで、縞物のお召しに地味なコートを着て、小さなオベラバッグを持つたなりの姿で女關の方へ出ていつた。
 婆や、小間使に送られてその立關を出るとき彼女はちよつと銀座まで買物に行つて来るからと云つて、伴を連れていけといふのを強ひて斷つてそゝくさ邸を出ていつた。そしていつになく溜池から電車で銀座の方へ出た。

二十の二

カッフエー・ローズへ来てみると、八重子は先づその入口を潜るのが妙に面伏せだつた。あの晩以來はつたり此家へも足を向けなかつたので、女給仕などもさぞ變に思つてゐることであらう。それに人の出入の多いところ故、ひよつとしたらいろいろんなことがもう彼等の耳へ入

つてゐるやしまいか、さう思ふと被來いましと云つてさも懐かしさうに迎へて呉れる女給仕の顔色までが疑はれて、八重子は唯氣忙しさうに大急ぎで階段を上つていつた。

山中は清岡が旅へ發つ前の晩八重子と別離を惜んだあの私室でたつたひとりてしよんぼり待つてゐた。扉を開けて八重子が入つてゆくのを見ると、彼は突如起ち上つて来て、愛想笑ひをしながら、

「や、どうも只今は失禮いたしました。」と、丁寧に挨拶をして、そのまゝ、八重子の後へ廻つて、コートを脱がせてやつたり、オペラバッグを受取つたりしながら、

「どうも此様なところまで態々御足勞を願つてまことに相済みません。ほんとなら私の方からお邸へ出るのが願なんです、その例の一件で失策つて居りますのでなあ、は、は、は、は、いから圖々しくてもさすがにお邸の門だけはくゞれんもんですから。」と、笑ひながら云ふ。

八重子も仕方なしに笑つてゐた。

山中はそのまゝ、八重子を安樂椅子へ坐らせながら自分もすぐ傍の腕椅子へ坐つて、

「でも今日はよくおひとりでお出ましになれましたなあ。私はまた何誰かお伴がありやしない

かと思つて、その方を心配してゐましたんですが……。」

八重子は初めて口を切つて、

「私も此頃はひとりて出歩くのを嚴禁されてゐるもんだからほんとに詰まらないんですよ。今日は幸ひ父も妹も留守だもんですから、その間にそつとぬけ出して來ましたの。これ御覽なさい、平常着のまんまで、そのうへ此處へ來るのに電車でやつて來る始末なんですもの。」

「電車で？は、は、は。そんなにまでしてお出でを頂いて何とも申譯がありません。最前電話の時にさう仰有つて下されば、此方から自動車でお迎ひにいく筈で御座いましたのになあ。」山中は折柄女給仕が運んで來た紅茶と菓子器を八重子の方へすゝめながら云ふ。

八重子はさういふ山中の顔色を讀むやうにじろく、眺めてゐるたが、やがて紅茶々碗を取り上げて、

「ねえ、山中さん。あの御用といふのは何んですの？それを早く聞かして下さいましな、私少し心配になることがありますから。」

山中はそれと一緒に煙草に火をつけて、

「いや、どうも申遅れました、今お話し致します。」と、云ひながら紫色の煙を鼻からすうつと吐いて「實は先日一寸帝劇でもお話し致したことなんです、あの時は生憎宮島伯爵にお眼にか、つたりして到頭お話しがそのまゝになつてしまつたんですが、……。」

八重子は思ふ豪といふやうな眼色になつて、

「ぢやなんですか、お話しといふのは今津のことなんですか？」と、訊く。

山中は又愛想笑ひをして、

「左様です。」と、答へたが急に眞顔になつて、「實はあの後又會社の用で一寸今津の大旦那に眼に懸りましたんですが、その時のお話では何んでも先達帝劇で夫人にお話し致しましたあの件が急に實行されるやうなお話ししたので、實はそれがどうなつて居りますか、夫人の方からもひとつ伺つてみたいと思ひまして。」

八重子はそれを聞くと途々考へて來たことが單なる杞憂から急に事實に移つたやうな氣がした。そして自分の方へは何の音沙汰はなくても、離婚の問題は隱密のうちに着々と運んでゐるのではあるまいかと思はずにはゐられなかつた。

二十の三

八重子はやがて顔をあげて、

「あの、私の方へはまだ何とも話がないんですけど、それぢやなんですか、今津のお父様から貴方へはそんなお話しがあつたんですか？」

山中は尤もらしい顔になつて、

「ぢや夫人の方へ何とも仰有つておいてなさらないところをみるとまだ正式に御發表にはならないと見えますなあ。」と、云つて煙草の煙を吐きながら、「いや、實はかうなんです。私の伺つたところでは、到底かうやつてゐても夫婦の間が圓滿に解決することは不可能であるから、今少し餘熱がさめて來たのを幸ひにいつそ思ひ切つて離婚にしてしまはう。それには夫婦の將來のこともあるからなるべく世間へ知れないやうに祕密の間に處置をつけてしまはなくてはならんと、かう仰有つておいてゐました。その時の御様子ではなんでも二三日うちに愈々その方の手続きをお履みになるやうな様子でしたが、又何かお差支へても出來たんですか知ら、……」

八重子はその言葉にじいつと聞き入りながら深い思ひに沈んでゐたが、やがて今度は怪訝さうな顔になつて、

「でも山中さん、こんなことを云つて失禮に當るかも知れませんが、あの今津のお父様が貴方のやうな人によくそんな祕密をお話しになるぢやありませんか。此の間のことがあつてから今津では貴方を大變に恨んでゐるといふ話ですのに、そんな一家の祕密まで打明けて御相談をするなんて變だと思ひますがねえ。」

山中は媚びるやうに額へ手を置いて、

「は、は、は、貴方のやうな人とは恐縮ですなあ。どうもさう仰有られちやこの山中も立つ瀬がない。」と、笑ひながら云つて、「そりや夫人がさうお思ひになるのも御尤もです。あの事件以來私はほんとのことを云ふともう今津さんのお邸へも、それから又東海汽船の方へも足踏みの出來ない人間になつてゐる筈なんです。ところがうまいことには、私の方の會社と東海汽船とが妙なことから提携しなければならぬやうな事件に出遇しましたし、それに私もあの今津さんのことと強請れる種をひとつふたつ握るやうなことになりましたんで、そんなことから今ぢや

却つて私の方から條件をつけてお話しをすることが出来るやうな地位になつてしまつたんです。今津さんはあゝ、みえてもなか／＼秘密の多い方ですから、先方の出様によつちや私も随分うまい儲け口もあるんですが、そんなことはまあ今の問題ぢやないとして、私は夫人のことも或程度までは此方から積極的に聞き出すことが出来る力をもつて居りますんです。』

八重子はそれを聞くとこの山中ならばそれくらゐなことは仕兼まいと思はずにはゐられなかつた。眼中利害といふものより外に何も無いこの男は使ひ様によつてはどんな利益でも與へて呉れるかはりに、敵になつたらば随分悪辣なこともしかねないのを八重子は交際ふ初めからよく知つてゐた。で、今津との問題もこれほど熱心に口を入れるところから察するときつと何か彼の心の底には企畫があるに相違ない。それは八重子自身に關したことであらうか、それとも今津家に關したことであらうか。此間の話でみると、伊佐雄は既に後妻の候補者を選擧してゐるとさへいふてはないか。そんなことから又何か爲めにする計畫をめぐらして、この山中は最初からの一念どほり東海汽船に對して自分の所志を斷行しようとするのではあるまいか。八重子の心にはさうした考へが先々と浮んで來た。

山中はそれを知つて知らずかやがて言葉を改めて、
「ねえ、夫人。兎に角私は現在今津さんに對して今申上げたやうな位置にゐるのですから、私の申すことだけはお疑ひにならないで、どうか夫人の方でもほんとうのお思考を洩らして頂き度いんです。私は夫人のためにはどんなことでもして御助力をしようと思つて居りますのですから、……………」

二十の四

八重子は長い間考へた末やつと口をきつて、

「まあ、兎に角その事はそれとして置いて一體もし私が今津と別れるとしたら、それが貴方とどう云ふ關係を持つんでせう。貴方がそれほどまでに被仰るんですから今津の方のこともほんとうだらうと思ひます。さうなつた時にそれは私と今津家との間のことで、貴方には何の關係もないと思ふんですが、……………」

山中はそれを聞くと椅子から乗り出して、

「いや、私の申上げるのはそのことなんです。今も申上げたとほり今津さんの方ではもう離婚の手續きをするばかりになつてゐるんですから、此際夫人の方も十分前後のことをお考へ遊ばす必要があると思ふのです。そこで今度は私からは是非御相談いたし度いことが起つて来た譯なんです。」

山中はさう云ひながら又新しい煙草に火を點けて、八重子の思惑を推し測るやうな、話の順序をと、のへるやうな顔をしながらまじ／＼八重子の顔を見てゐた。

二人の間には少時の間沈黙がつゝいた。明るい午後の日射しは禿げあがつた山中の頭へしみて、何處から入つて来たのか一疋の小蠅がそのまはりをぶん／＼飛び廻つてゐる。窓から見える空には一點の雲影もなく、蜘蛛手に張り廻された電線は吹く風にゆらく／＼と動いて、何處か隣町を自動車の警笛が往つたり來たりしてゐる。

山中はやがて改まつた聲になつて、

「夫人、茲て是非御相談いたし度いといふのは他のことぢやないんで御座います。いや、その前に伺つて置き度いのはあの清岡子爵のことなんで御座いますが、もし此際夫人が今津さんの

方と御縁が切れるやうなことになるとしましたら清岡さんの方との御關係はどうなるんで御座いませう。矢張り先達仰有つたやうなことで、此れからもずつと只今のやうな状態てつゝいていくもので御座いませうか。」

八重子はそれを聞くと心もち頬を染めて、

「あら、そんなことを改まつて訊かれちや私困りますわ。」と、云つたが、急に艶めかしい嬌態をして軽く卓子へ凭れかゝりながら「いくら私があの方のことを思つたつて、もうあんな遠い處へ被往てしまつたんぢやどうにもならないぢやないの。」と、さも術なげに云ふ。

山中は笑ひもせず、

「しかしそんなことは何んでもないぢや御座いませんか。いざとなりやすくは彼方の後を追つて歐羅巴へお出になりやい、んで御座いますもの。歐羅巴といつたつて、金さへありや譯もなく行けるところですし、今津さんから御離縁になりやもう天下晴れて被往れるお體なんてすか
らなあ。」

八重子はそれと一緒に漸次とまた悲しげな顔色になりながら、

「でもそんなことは到底私には出来ませんわ。たとへ覺悟は極めても、私の父が許して呉れやしません。清岡さんのことも私、どうしたつて忘れられやしないんだけど、もうかうなつてしまつては何も彼も駄目なんてすわ。」

山中はその眼のところをじつと見詰めながら、

「しかし若し茲で清岡さんが貴女に對して結婚をお申込になつたとしたら無論貴女は御承諾遊ばすんでせうな？」

「さあ、それはどうですかねえ、その場合になつてみなけりや分りませんわ。」八重子は小娘のやうに首を傾げて爪を噛みながら「たとへ私が今離縁になつたとした時に、清岡さんは今更私にそんな申込みをなさるやうなことはないと思ひますわ。それだけの御決心があつたら彼地へお立ちになる時にもつとどうにかなつてゐる筈だと思ひますわ。ほんとうのことを云ふと清岡さんはそれほど私のことを思つてゐる下さらないんです。彼地へお着きになつたつて手紙一本下さらないし、お立ちになる時だつてあんな素氣ない御様子だつたし、私この頃になつてしまふ、それが分つて來たんです。一時は今津へ對しての氣兼ねであつたつて被居るんだとも

思つてみましたけど、それにしてもあんまり水臭過ぎると思ひますわ。」八重子はつひこんな愚痴を云つてしまつた。

二十の五

山中は八重子の云ふことを一々熱心に聞いてゐるが、やがて言葉を奪ふやうに口を入れて、「いや、夫人がさういふお心持ちなら私もほんとうのことを申し上げませう。實はこのことを申し上げるに就いて、私は随分いろいろに考へてみましたすが、夫人の方が既にそんなお心持ちになつてゐらつしやるのなら、私の方でも隠してゐる必要はありませんから申上げてしまひませう。今後のことを思ふとたとへ夫人は御立腹になつても、それを申上げて置く方が利益になるのですから。」と、云つて、彼は駄目を押すやうに八重子の顔をみて、

「實はあの清岡子爵ですが、あの方には思ひ合つた一人の戀人があるのを夫人は御存知ですか？」

八重子はそれを聞くと今迄つひぞ耳にしたことのない話なので、慄乎としたやうに眼を睜り

ながら、

「え、清岡さんに戀人が？ 私そんなことちつとも知りませんわ。何處の何誰ですの？」と、
急ぎ込んで訊く。

山中はそれを抑へて、

「まあ、お待ち下さいまし。今お話しを致しますから。」と、云つて彼は笑ひながら、「そりや夫
人が御存知ないのも無理は御座いませんよ。それを知つてゐる人は此の廣い世間にたつた三人
きりないんですからなあ。」

「まあ、そんな祕密なんですか？」

「祕密どころか、もしそれを世間へ發表でもしようものなら私達は殺されてしまふかも知れな
いです。それも相手は日本人ぢやなくて英國の女なんです。」と、山中は稍得意らしく云ふ。

「まあ、英國の女ですつて？ どうしてそんな者がまたあの方に、……？」

「それが面白いんです。私も先方の人の素性は少しも存じませんが、何んでも彼地でもい
家のお嬢さんださうで。清岡さんとはもう十年以來の戀ひ仲なんださうで御座いますよ。日本

へ追駈けて來るのなんのつていろく悶着があつたんださうですが、幸ひい、ところのお嬢さ
んだけに世間へも知れずに濟んだんです。今度も清岡さんはそのお嬢さんと結婚して、彼地で
家庭をおつくりになるおつもりでお出懸けになつたんだといふ話ですが、……」

八重子はそこまで聞くとふと首を傾けずにはゐられなかつた。さう云はれてみると思ひ當る
ことがないでもなかつた。清岡が倫敦で學生生活をしてゐた頃厄介になつてゐた或裁判官の
娘で清岡がひどく可愛がつてゐたりリーナといふ子があつた。その娘は非常な日本好きで彼が日
本へ歸つてからも始終手紙を呉れたり贈物をして呉れたりすると云つて、よく清岡は八重子に
話して聞かせた。八重子は眼の大きな、鼻の高いその娘の寫眞も見せて貰つたことさへあつた。
ひよつとしたらそれが今の話の女ではなからうかと思ふと、八重子は急に何とも云へない不快
を覚えて來た。まさかとは思つても、何となく欺かれてゐたやうな氣がして、彼女はひどく心が
暗くなつて來た。しかしそのうちにどうせこの山中が云ふことであつてみればそのまゝ信じて
しまふのも馬鹿々々しいやうな氣もして來て彼女の心には一點の疑惑は残つたが、それでも不
快な心持ちはまた漸次と消えていつた。

八重子はやがてそれもこれも山中が何か爲めにするところがあつて云ふのだらうぐらゐな氣持ちで、

「でも山中さん、貴方どうしてそんなことを探つて被來つたの？ それほど祕密なことが、清岡さんと大して關係もない貴方の耳へ入るには何か譯がなくちやなりませんわ。一體誰れにお聞きなすつたの？」

山中はうすく笑つて、

「それを云つてしまつては何にもなりやしません。貴女の前で、すから申上げたつて差支へはないんですけど、どうかもう少しお待ちなすつて下さい。丁度清岡さんと同時に英國へいつてゐた人で、その事件に關係してゐた人がたつた二人あるんです。私はそのなかの一人の方から聞いたんですから決して間違ひはありません。」山中はさう云ひながら落着き拂つた顔で煙草の煙をぶうつと天井へ吹きつけた。

二十の六

山中はそれから清岡のことに就いて、いろ／＼聞き込んだことをば、當り障りのないやうな言葉で語つてゐたが、八重子が清岡の戀人だといふその英國の女のことについて根掘り葉掘り噂の出處を訊ねたので到頭包みきれなくなつて、その當時の關係者のひとりである外務省の或書記官の名を明かしてしまつた。八重子は無論それを信じはしなかつたが、それでも山中がそのことに就いてまだ何か隠してゐるらしいのが氣に懸つてならなかつた。

山中は清岡のことはそれぐらゐ切上げて今度は妙に改まつた調子になりながら、

「そこで夫人。私が伺ひ度いのはこれから夫人のお體がどうなつていくかといふことなんて御座います。無論さういふ風であつてみれば、清岡さんの方ともうま／＼お話合がつくかどうか分りませんし、それに今のお話の御様子では夫人の方でもたつてあの方と御結婚遊ばさうとも思召して被居らないやうですし、さうなると夫人のお體といふものはどうなるんで御座いませう？」

と、思ひ入つたやうな調子で訊く。

八重子はそぐはぬ笑ひ方をしながら、

「そんなこと私にだつて分りやしませんわ。もし私今津と別れるやうになつたら尼にでもなつ

てしまひませうかねえ。さうでもしなけりやいくら私だつて世間へ對して恥かしくつて、……

……」

山中はそれをみると苦笑ひをして、

「御笑談でせう。そんな馬鹿な事を仰有らないでどうか眞實のお心持を伺はして下さいませんか。それを伺つたうへで、私は又少し考へて頂き度いことも御座いますんですから、……」

八重子は急に先をはぐらかすやうな顔色になつて、

「ほ、ほ、ほ。そんなことどうだつてい、ぢやありませんか。その時になつてみなけりやどうなるか分りやしませんし、よくく體の始末がつかないけりや思ひ切つて死んでしまふばかりですわ。私この頃なんだか死に度くつて死に度くつて耐らないんですもの。」

「御笑談仰有つちや可けません。今の若さでそんな死ぬなんて、私をお調弄ひになるのもい、加減になすつて下さいまし。」山中は態と眞顔になりながら煙草ばかり吸つてゐるが、やがて又重しく口を切つて、「いや、こんなことばかり云つてゐるは埒が明きません。私それぢや失禮でも打割つてお話し、てしまひませう。夫人はもし此際誰方が結婚の申込みをする方がありましたら、條件次第に依つては御承知下さいますてせうか？ それをどうか私まで打割つて聞かせて頂

けますまいか。」

八重子は益々笑談のやうに、

「そりや貴方、出戻りのこんなやくざな者を貰つて下さる方があればいつでもいきますわ。そのかはり社會上の地位が高くつて、お金が澤山あつて、それで私に思ふ存分贅澤をさせて下さる方でないけりや駄目ですわ。もう窮屈な家だつたら眞平御免蒙ります。ほ、ほ、ほ、ほ。」

山中は考へ深い顔になつて、

「地位が高くつて、金があつて……」と、口のなかで繰返したが、やがて、

「ぢや先の方のお年などはお構ひになりませんか？」

「さあ、餘りお爺さんぢや厭ですけど、大概なら我慢しませうかねえ。ほ、ほ、ほ。若くつて綺麗な方なら猶ほ結構ですけど……」

山中はそのまゝ黙つて考へ込んでゐるが、しばらくすると思惑ありげに合點いて、

「それだけ伺つて置けば安心です。いづれ又そのことに就いては時機を見て御相談いたします

からし」と、呑込顔に云ふ。

八重子はひとりて笑つて、

「ほ、ほ、ほ、。貴方も随分氣の早い方ですわねえ。まだ私の體がどうなるとも極らないのに、後口の詮索をするなんて随分失禮ぢやありませんか。私はまだかう見えても今津の妻なんてすわ。ほ、ほ、ほ、。」

山中もそれを云はれるとさすがに苦笑ひをして頭を掻いた。

二十の七

山中は餘り長く八重子を引留めても悪いと思つたかして、少時すると自分から立ち支度をしなから、

「ては夫人。あんまり遅くなりましてはお邸の方もどうかと思ひますから、今日はこれでお別れ致しませう。態々御足勞を願ひまして、……。」と、云つて叮嚀に辭儀をする。

八重子も立ち上つて、

「ぢや山中さん、御用といふのはそれだけなんですか？」と、呆氣なさうに云ひながら脱ぎ捨てたコートを椅子の椅背からとつて着る。

山中はその顔を思惑ありげな眼でみて、

「どうも詰らん用でお呼び立てして申譯が御座いませぬ。いづれこのことに就きましたは、又お眼にか、つてお話し致しますから。」と、云つてうすく笑ひながら、「併し今日のことの後日になつてどんな幸福を夫人にお與へ申すか知れないのですからなあ。今は申上げませんけど、いづれ時機が参りましたら、私も夫人に十分讃めて頂かうと思つて居りますのです。」

八重子には何のことだか見當がつかなくかつたが、それでも唯笑つて會釋した。そしてそのまま山中が開けて呉れた扉から表の廊下の方へ出ていつた。

女給仕達の聲に送られてカツフェ・ローズの女關を出ると、八重子は人目があるのですぐそこへ、

「ては左様なら。」と、云つて、山中に別れてしまはうとした。山中はせめて電車の停留場まででも送らうと云つたが、八重子は體よく斷つて、それなりたつたひとりて銀座通りの方へ出てい

つた。

夕暮ぢかい大街道には賑やかな人の群が流れてゐた。街路樹の柳ももううすく色づいて、その陰にはぼつりぼつりと町の灯が輝きはじめてゐた。電車や自動車はひつきりなしにその間を駛りすぎて、警笛の音や鐵輪の軋る音がいかにも氣忙はしいどよみをつくつてゐる。靜かな空には少しづつ、風が動いて來た。

八重子は久しぶりて美しい店々の飾り窓をのぞき込んだり、行摺りの人の姿を眺めたりしながらわれ知らず尾張町の方まで歩いて來たが、その時その停留場の處で彼女はふと思ひ懸けない人の姿をみつけた。はじめのうちは後向きに立つてゐるので誰とも分らなかつたが、彼女が近寄つてゆく途端にふと此方を振顧つたので、その人の顔は街燈の灯影にはつきりと映つてみえた。それは外套を着て中折帽を深々と被つた稻垣の貞夫であつた。

八重子は吃驚して、

「あら、貞夫様。」と、小さな聲で叫びながらそつちへ近寄つていつたが、貞夫はそれに挨拶を返す拍子に何故か場合が悪いやうにぼつと顔を染めた。それもその筈で、彼のすぐ傍には伴れら

しい十八九の美しい令嬢風の女が派手なお召のコートを着て、女優卷に結つた顔を少しそむけながら立つてゐた。

八重子はその時まで伴れがあるのに少しも氣がつかなかつたが、それと知ると慙と素知らぬ顔をして、

「貞夫様。先達はどうも……。」と、改まつた挨拶をしながら、「此れから何方へ？」と、訊く。

貞夫は強ひて笑顔をつくりながら、

「一寸帝劇まで。」と、答へたが、變に思はれてもと思つたかして、横濱へ行つた時のことやら、それから後の消息などをたてつけに話した。

八重子はそれに受答へをする間も伴れの令嬢から眼を離さなかつた。何處の誰れとも分らなかつたが、それは何にしても美しい人であつた。

貞夫は時間が迫つてゐるのでやがて云ひ憎さうに別れを告げて日比谷の方へ行く電車に乗つた。八重子もそれへ乗れば乗れたのであつたが、慙と貞夫に、

「どうかお遊びに。」と云つて、その次のに乗つた。そして日比谷まで來ると陸まじさうに電車

を降りて帝劇の方へ向つて歩いてゆく二人の後姿を見送りながら自分はそのまゝ、三宅坂の方へ乗り越していつた。

八重子には山中のことよりもそのことの方が妙に氣に懸つてゐた。

二十一

それから間もなく、山中が豫告したとほり今津家からは愈々公然離婚の交渉が持ち込まれた。民造もその以前にさる公會の席上で伊佐雄やその父の亮一郎に逢つた時、それとなく彼等がそんな氣振りをみせてゐたのを感じてゐたし、それにいろ／＼な噂も聞えてゐたことゝて、公然交渉を開かれてもさして狼狽はしなかつたが、併し、民造自身にとつてはそのことが一大打撃たるを免れなかつた。若しこのまゝ、八重子が今津家から離婚になつてしまへば世間に對する外聞よりもなによりも、兩家の間で比較的密接な關係を持つてゐた總ての利害關係は漸次と縁が切れて、彼自身は益々不利な境遇に落ちてゆかなければならなくなるのである。八重子を結婚させた動機は全くそこにあつたので、離婚になればそれはすぐにも裏へ返つて來るに極つてゐる。

磯谷商會も此頃では東海汽船と、それから神戸の方の造船所、鐵道院、海軍省などの信用を恢復して來たので、以前に比べればぐつと安固な地位に立つてはゐるが、それももとを云へば今津亮一郎の庇護に他ならないのである。そして今その庇護は磯谷商會を見捨てようとしてゐるのである。

民造はもう到底八重子を説伏して今津家へ歸らせるなど、云ふことは出来ないと言つてはゐるが、それでもまだ何處かに未練があつて、一應はその手段も執つてみた。併しそれは豫期どほりの徒勞に終つてしまつた。八重子は丁度四月の初めに今津家から正式に離婚になつてもとの磯谷姓へ戻つてしまつたのである。

八重子は初めのうちはさして悲しいとも思はなかつたが、日が経つに従つて妙に歇斯の利々な憂愁を覺えるやうになつて來た。自分の身の罪咎をはつきり意識すればするほどそれは悔恨の種とはならず却つて先々と自暴自棄な心持を生んでいつた。もうかうなつたからは何をしても構はぬ、どうせ未始終はどんな身のうへに落ちてゆくとも知れない體である。唯このうへ父の身にさへ禍ひを及ぼさなければそれでいゝ。さういつた投げやりな捨て鉢な氣は日に日に

募つてゆくのであつた。

民造の方は又それとは反對にもう八重子のことなどを考へてゐるだけの餘裕がないのであつた。表面ではまだ今津と事業のうへの關係は断れなかつたが、彼はそれを未然に察してそれぞれ準備をと、のへて置かなければならなかつた。それをするには何か思ひ切つた事をしなければならぬ。日夜民造の頭腦に映るのはそのことばかりであつた。商會の重役である鬼塚などは朝晩二度づ、も邸へやつて來る騒ぎであつた。

四月も漸次と中旬ちかくなつて、日毎に吹き誘ふ春の風はやがて満都を花に酔はせる行樂の日を運んで來た。空は毎日どんよりと花曇りにくもつて、上野、向島の人出は山の手の町にまで賑はしさを添へる。山王の櫻は邸の窓からも手にとるやうに見えて、朝な夕な眺めは何とも云へず美しかつた。廣い邸の庭園には日なかにいろ／＼な小禽が來てはひつきりなしに囀つてゐた。

その花の盛りの或日、芝の高輪にある宮島伯爵の邸では觀櫻の園遊會が催された。それは實際社會でも年中行事のひとつになつてゐる會合で、主に貴族の人々が集まる例になつてゐた。

八重子は今迄に一度もそれへ招かれたことはなかつたが、今年は見知りが出来たせるか態々伯爵から案内状を送つて寄越した。そして會の前々日には山中から電話が懸つて來て、伯爵も非常に待つてゐられるから萬障を繰合はせて是非出席してくれと呉れ呉れも懇願した。

八重子は一も二もなく出席する氣になつた。人なかへ出るのは何となく後護い氣もしたが、彼女はもうそんなことを考へるに足らずに心持が荒み過ぎてゐた。唯明るい會合の席へ出て、自分の憂愁をまぎらし、ひとつには自分の美しい姿を誇り度くて耐らないのであつた。自暴自棄は彼女にどんなことでも敢てさせようとしてゐるのであつた。

二十一

宮島伯爵邸の觀櫻會の當日はやがて來た。

その日の八重子の風姿は實にすばらしいもので、態と人目を惹くやうにけばくしい粧ひを凝らして、頭から足の爪先までいづれも金に飽かしたものばかり着付けてゐた。紋錦紗の薄色の地に裾一面櫻狩の模様を纏つた襲ねを着て、それに西陣で別誂へに織らせた唐錦の帯をしめ、房々

とした束髪には粒高な真珠を盛つた櫛をさしてゐた。少し面寝れのした頬も白粉の色に一段と凄艶な美しさをみせ、ひとしほ大きくなつた眼は男の心を燬き盡さずには置かないやうな惱ましさを含んでゐた。八重子がかうした風姿をするのもひとつには離婚された身の退けめを掩ふため、彼女は孔雀のやうな誇りを以て見る人の心を頭から壓しようとして試みたのであつた。

八重子はその日、父の民道からも公然と評しが出たので、指定の正午から少し遅れて、邸の自動車で高輪の宮島邸へやつて来た。宮島邸は軒並に豪壯な邸宅のある高輪でも有数の景勝の地を占めてゐて高堂を背に脊負つた一萬坪に餘る庭園はその近邊でも一寸比類のない廣大なものであつた。電車通りに開いた大きな鐵門の正面には佛蘭西人の技師が設計した瀟洒な洋館がみえてその奥が破風づくりの母屋になつてゐた。往來からも高堂に生ひ繁る樹立の縁は塀越しに見えて、その日は自動車や馬車や俥が門から溢れて往來の塀際までずらりと並んでゐた。

八重子は門内の小砂利の上で止つた自動車から降りると、そのまゝ庭園へ通ふ柴折戸の方へすら／＼と歩いていつた。そこには小さな卓子を出して、家扶やら書生やらが丁寧に辭儀をしながら客を迎へてゐる。

八重子が入つてゆくと家扶らしい紋付に袴を穿いた老人は威に打たれたやうに一禮して、

「失禮で御座いますが、何誰様で？」

と、おづ／＼訊ねる。

八重子は態と重々しい調子になつて、

「あの、私磯谷で御座いますが、……」

と、云つたが、今迄今津と云ひ馴れてゐたので急に實家の名をなのるのが口に馴染まなかつた。

そこへ彼女の姿を何處から見付けたのか、フロックコートを着た山中が庭園の方から飛んで出て来て、

「やあ、夫人……。』と云ひかけて急にそれと氣付いたやうに苦笑ひをしながら「は、は、は、もう夫人ぢや御座いませんでしたなあ。何んと申上げたら宜しいでせう、お嬢さま、は、は、は、は。それも變てすなあ。」など、笑談のやうに云つて、「併しようこそお出懸けでした。伯爵は先刻からお待兼ねで、さあ、どうか此方へ。」と、我がもの顔に八重子を庭園の方へ案内してゆく。

彼はもう少し酔つてゐるらしかつた。

八重子は四邊に人目があるので、唯愛想らしく笑ひながら黙つてそのあとに隨いていつた。廣々とした芝庭には方々に汁粉屋だの、壽司屋だの、模擬店が出来て、蜘蛛手に張り廻した小旗やだんだら幕が吹く微風にそよ／＼と軽く靡いてゐる。

大きな池の汀際から山手へかゝるなだらな小徑のところどころには櫻の老樹が今を盛りと咲き亂れて、その落花の蔭を美しく着飾つた紳士や淑女が三々五々逍遙してゐる。そして彼方此方の屋臺では丸一の大神樂や、喜劇などが開演されて、太鼓の音や三味線の音が、春らしい浮ついた調子で陽気に噪いてゐる。その前にはそこにも此處にも一團の群衆が面白さうに笑ひながら見惚れてゐて、新橋あたりの美妓と見えいづれも赤前垂をかけた仇者が其間を甲斐々々しく幹旋して歩いてゐた。

八重子が入つてゆくとそこらにうろ／＼してゐた藝者も紳士も眼を睜つて一齊にその美しい姿を眺めた。八重子はそのなかを少し俯向いてさつさと歩いていつた。人の視線が集まれば集まるほど彼女は態と誇りかに歩いてゆくのであつた。

山中はとある櫻の樹陰へ來るとそこに集まつた四五人の人影を指さして、「あの貴女、伯爵はそこに居られます。」と、小聲で呟いた。

三十一

その時、宮島伯爵はふと八重子の姿を見つけて、いきなりつか／＼と此方へ歩いて來ながら先方から、

「やあ、ようこそ。」と、聲を懸けた。

八重子はそのまゝ、そこへ立止つて、心持ち頬を染めながら、

「今日は又態々お招き下さいまして、……」と、云ひながら叮嚀に禮を述べた。

伯爵は鷹揚に合點いて、

「いや、どうも、お事多いところをようこそ來て下さつた。どうか何も無いが、ゆつくりお遊び下さい。」と、云つたが、その眼には如何にも満足らしい色が浮んでゐた。

山中は二人の間に立つて頼に愛想を振り撒きながら取り做してゐるが、時分よしと見て取る

と今度は媚びるやうに八重子の顔をみて、
 「あの、貴女、如何で御座います。皆さん彼方へ被往つておいて、すから、私がお庭を御案内致しませうか？」と、云ふ。

八重子も合點いて、伯爵に、

「ては一寸失禮いたします。又後程お眼にかゝりますから。」と挨拶をして、そのまゝ池の方へ歩いていつた。はら／＼と散る落花のなかを少し首を傾げながら歩いてゆく八重子の姿はまるで妖精のやうに美しかった。伯爵はうつとりしたやうな眼つきをして、それとなく見送つてゐた。

八重子は到るところで人の視線を集めながら池を廻つて山の方へ登つていつた。見知り越しの人々に逢ふ度に軽く挨拶を交はしながら漸次と人影の薄い山の中腹の亭のところまで登つていつたが、ふとその時彼女は山中の方を振顧つて、

「ねえ、山中さん。あの今日は今津からは誰れも來てゐませんか？」と、氣懸りらしく訊く。

山中はさも意を得たやうに笑つて、

「い、え、今日は何誰も被來つちや居りません。御案内はいつてゐる筈ですが、何か御差支へがあると思ひまして、……。」と、云ふ。

八重子はそのまゝ、そこへ立止つて、

「そんならい、けど、……。」と、口のなかで呟いた。

そこからは園遊會の光景がひと眼に見下ろされた。明るい午下りの日光は眞青な芝草のうへに燃えて、白く咲いた櫻の花陰や、天幕の陰に立つ人の群がまるで繪のやうに美しくみえてゐる。鳴物の音はかすかに聞えて來て、生漚かい微風と一緒に人の胸に得も云はれぬ歡樂の念ひを唆る。そして遠く擴がつた品川の海に浮ぶ白帆の影もすが／＼しく八重子は久しぶりで生きかへつたやうな心持ちになつたのであつた。

奥の庭の方へ降りてみると、そこには例の石坂や、大河内や、松浦などの一團が矢張招待されて來てゐる女優の一團と一緒に、麥酒のコップをあげながらわい／＼騒いでゐる。八重子と同窓の友達や、方々の宴席で逢ふ知名の貴夫人達もそこ、に打群れてゐるので、八重子はやがて山中に別れて、その間を燕のやうに縫つて歩いた。到るところで彼女は歓迎され、

そして又逢ふ人毎に彼女の美しさを讃嘆しないものはなかつた。
 八重子は午後の長い時間を今の悲しい身のうへも何にも打忘れて面白可笑しく暮らしてしまつた。陰ではいろんな噂をする者があつても、面と向つて離婚のことなどを云ひ出すやうな禮を知らぬ者は一人もないので、彼女にはすべてが快く、楽しく過ぎ去つていつた。なかでも若い貴族達は彼女の周圍へ集まつて来て、その昔まだ彼女が處女であつた時代と同じやうに彼女を款待して呉れた。殊に石坂子爵の噪きやうなぞは端の見る眼も可笑い程であつた。
 夕暮れは漸次と近づいて来た。客もそのうちに一人去り二人去りして、そこいらが何となく疲れたやうな色に掩はれて来る。模擬店の前には酔つた人の群が藝者達をつかまへて聲高に談笑してゐるが、その聲も次第次第に寂れて、方々の屋臺では藝人達がもうそろそろ鳴り物をしまひだした。

二十一の四

八重子は慌たしい四邊のさまをみると、自分も丁度い、潮時と思つたので、そろ／＼歸り

支度をした。それにしても折角かうして張り切つた心持ちで出て来てゐるながら、今日の半日を思ふと妙に物足りない氣がしないでもなかつた。

八重子はざわ／＼云ひながら門の方へ打群れてゆく人達のあとから隨いていつたが、その時母家の裏のところからは山中が誰れかを捜すやうなきよろきよろした眼つきをしながら走り出て来て、八重子の姿をみると突如兩手をあげて手招きした。

八重子は何ごとかと思つたのでふと立止まつて、今度はそつちへ歩いていつたが、山中はそれをみるとにこ／＼笑ひながら近寄つて来て、酒臭い息を吐きながら、

「ねえ、貴女、あの實は伯爵が一寸貴女にお伺ひしたいことがあるさうで、もしお差支へがなければもうしばらくお残りを願ひ度いと云つてゐられますが、如何で御座いませう。」と、云ふ。

八重子は格別差支へもないのであつたが、何を云つても伯爵邸へは初めて招かれて來てゐるので、妙に遠慮が出て、

「別に差支へはないんですけど、でも私あんまり遅くなりますから、……。」と、逡巡する。
 山中はそれを抑へて、

「いや、決してお手間はとらせませんから、お差支へがなければどうかさうなすつて下さいまし。さうして頂くと私の顔も立ちますから。」と、慌たゞしく云つて、そのまゝ、又母家の方へばた／＼瀧けていつてしまふ。

やがて庭先からはひとりの小間使が出て来て、叮嚀に辭儀をしながら、

「どうぞ此方へ。」と、云ふ。

八重子は仕方がなしにその小間使の後に随いて、人去つた芝庭を眞直に突切つて、別棟になつた茶座敷の方へ案内されて行つた。そこらはもうほいやりと温かく暮れて、樹立の宵闇には櫻の花がほの白くちらりちらりと散り迷つてゐる。方々に散在した燈籠にも灯が入つてゐた。花圃を前にした離れ座敷へ來ると、そこにはあか／＼と電燈が點つてゐて紫檀の火鉢に火も入れてあれば、その前には琥珀色の緞子の座蒲團も敷いてあつた。八重子はすゝめられるまゝ、に沓脱石から縁端へ上つて、開かれた障子からそつと間内へ入つていつた。

なかは十疊ばかりの座敷で見るから敷寄を凝したものであつた。襖といふ襖は銀地に墨繪の山水が描いてあつて、天井の木口も匂ひゆかしく、黒檀の床柱、奈良塗り仕立の壁、何處をみ

ても金めを殺した贅澤な好みが見せてあつた。そして九尺床には宗達の花鳥の双幅が懸けてあつて、その前の銅瓶には暹咲の黄梅が品のいゝ枝振に生けてあつた。

八重子は何ひとつ批の打ちどころのない座敷の様をさも感じ入つたやうに眺めてゐるが、そこへ又別な小間使ひが茶の心得のある體つきで茶道具を運んで來た。そして紙襖際つと叮嚀に手を支へながら、

「どうぞお召し遊ばして、御前は唯今すぐに御目に懸られますから。」と、云ふ。

八重子はそのまゝ、火鉢の傍へにじり寄つた。そしていゝ工合に熾つた炭火のうへ、手をかざしながら黙つてじいつとしてゐるが、その時になつて山の方から淅々と落ちる瀧の音が初めて聞えて來た。

いつまで待つてゐても山中さへ姿を現はさないのので、八重子は稍や不安な氣になつてそつと四邊の様子を窺つてゐるが、少時すると踏石を傳ふ庭下駄の音がしてやがて伯爵がたつたひとりて座敷へ上つて來た。

「やあ、お待ちせしました。」と、云ふ聲は鷹揚にひいて、紙襖を開けて笑ひながら入つて來

る伯爵の顔はつやく／＼してゐた。いつの間にか紋服をぬいて瀟洒とした大島の對の着物に着かへてゐた。

二十一の五

八重子は伯爵が入つて來るのをみると座蒲團から滑つて、淑やかに手を支へる。伯爵は火鉢の傍へ來て、そこに敷かれた座蒲團のうへ、無雜作に腰を下ろしながら、

「さあ、そんな他人行儀にせずに遠慮なく坐つて下さい。いや、さう堅くされると私の方が却つて困つてしまふから。は、は、は、は。」と、笑つて、伯爵は八重子を座に歸らせ、火鉢のなかの火箸を弄びながら、「今日は又お歸りのところを引留めてまことに恐縮でした。私は少し貴女に聞き度いことがあるもんだから、丁度今日がい、機會だと思つて。……だが併しほんにお差支へはないのかな？」と、云ふ。

八重子はつ、まじやかに眼を伏せて、「あの別に差支へは御座いませぬのですから。……」と答へたが、伯爵はその顔を笑ひながら見て、

「いや、それなら結構だが……」と、あとは吸ひさしの葉巻を啣へてその煙に言葉を紛らしてしまふ。

二人はその儘妙に取りつき場がなくなつたやうに口を噤んでしまつた。殊に八重子は仲介者の山中が來て呉れないので何を云ふにも伯爵の威に押されるやうに極りが悪かつた。

伯爵はやがてさも黙つてゐるのが氣塞りらしく、頻りに今日の園遊會のことなどを話したりしたが、その種も盡きて來ると、今度は俄に收まつた調子になつて、

「實は貴女にお伺ひし度いといふのは他のことでもないが、……」と、云つて、そつと用件の口を切りだした。

八重子は何ごとかと思つて息をつめて聞いてゐた。

伯爵はやがて云ひ憎さうに、

「いや、貴女ももう山中からお聞きになつて、多少は知つてゐられるかも知れんが、實はその私の後妻の問題なのです。私も奥を喪つてからこのま、獨身で過ごさうと思つとつたのですが、矢張りそれでは社會が許さんのでな、は、は、は、は。そこでひとつもし出来るものなら貴女にそ

の御相談をしてみようとかう思つたのです。貴女も今津家から又磯谷さんの方へ歸られたことだし、再縁する希望がなければ兎も角も、この間の山中の話では良いところがあつたらといふやうな話してあつたものだから、私もふつとそんな思考を持つやうになつたのです。」

八重子はその伯爵の言葉が餘りに意外であつたので、悸乎としながらまるで夢でも見てゐるやうな心持ちでゐた。まさかそんなことはなからうと思つてゐたのが、かう眞向から切り出されてみる時さすがの八重子も恥かしさに顔を伏せずにはゐられなかつた。

伯爵は猶ほも熱心に言葉をつゞけて、「實はこの事については然るべき仲介者を立て、貴女の方のお考へを聞くのが道なのですが、併し私はそんな面倒なことをするよりもかうして膝を突き合はせて、直接に貴女の意圖を確めた方がいゝと思つたのです。お互ひにもう收まつていざこざいふ境遇でもなし、却つてその方が相互の爲めに正常な理解が得られていゝだらうと思つたのです。甚だ不賤な話で、貴女には失禮に當るかも知れんがそこはどうか私に免じて許して下さい。」と、云つて伯爵はいかにも滞りのない態度で笑つてみせた。さすがに花柳界などでも評判の人だけあつて、云ふことが粹に捌けてゐた。

八重子は黙つて膝のうへで手巾を弄んでゐた。

伯爵はしばらく間を置いてから、また今度は更に碎けた調子になつて、

「先達山中がお目に懸かつた時に貴女から話しのあつた條件は無論私の方でも履行することにします。貴女は或は不満足かも知れんが、併し私としては出来るだけのことはするつもりであるのです。唯こゝで問題なのは例の清岡子爵の件なのです。……」さう云つて伯爵は靜かに冷えた茶を啜つた。

二十一の六

伯爵は茶を啜つてしまふと今度は新しい煙草に火を點けて、

「私の方でもかうして何もかも打明けて話してしまふのだから、どうか貴女もつまらん廻り氣などを出さずによく誤解のないやうに聞いて下さい。實はあの清岡のことに就いては山中からお聞きかも知れんが、今のところ到底或女以外の人とは結婚が出来ん事情になつてゐるので、私は丁度彼の男が英國に居る時分に一緒に居つたものですから、よくその間の事情を知つ

とるのです。』

伯爵はやがていつぞや山中の口から聞いた清岡の戀人であるリーナのことを事細かに語りだした。あの時山中は外務省の書記官から聞いたといつてゐるが、かうなつてみるとその實伯爵の口から洩れたのがはつきり分つて來た。それもその筈で、その頃伯爵は大使館附の書記官として英國に渡つてゐたのであつた。

リーナのこととは山中から聞いたのと少しも違はなかつたが、八重子はそれ以外に更にさまざまな事實を聞くことが出來た。いつぞや今津と二人で新婚の旅へ出た時、奈良で出逢つたあのメエフィールドといふ英國の貴族夫妻は實はそのリーナの伯父伯母に當る人であること、それから彼等が日本へ渡つたのは無論觀光の目的もあつたが、それよりも第一の要件は清岡の意圖を捜るためであつたこと、さうした意外な事實は伯爵の口から先々と語られて、しかもそれは一々符節を合はせたやうに事實に適合してゐるのであつた。

伯爵は更に語をついで、

『それで今度の歐羅巴行きも、實を云ふと決して貴女に關係したことはないのです。もう此

處まで話してしまつたからには何も彼も云つてしまふが、ほんとうはそのリーナがお母さんと二人で新嘉坡まで出向いて來たので、清岡はそれに逢ふためにこの日本を離れていつたのです、英國へ渡るなどと云ふのはその場の口實で、今頃清岡は新嘉坡でそのリーナと二人で楽しい夢をみてゐることとせう。それにあゝ云つて立つていつたからにはまさかすぐに日本へリーナを連れて歸つて來る譯にもいかんでせうから、これから先の彼の行動が見ものなのです。』と、云つて伯爵は火の消えた煙草を火鉢へさして、『實はこのことだけはあの山中にも話さなかつたのですから、どうかそのつもりで貴女にも祕密を守つて貰ひ度いのです。』と、云ふ。

八重子は聞く事毎に意外な事實ばかりなので、まるで夢のやうな氣がするのであつた。初めのうちはまさかと思つてもみたが、この伯爵が責任をもつて云ふからにはもう疑ひを挟む餘地はないと思つた。悲しい、突詰めた思ひは次々と湧いて來る。今迄自分は全くあの清岡子爵に欺かれてゐたのかと初めて氣がつくと、彼女は其の悲しみの底から胸も張り裂けるやうな憤怒の念や嫉妬の惱みが旋風のやうに渦巻いて來るのであつた。

八重子はひと言も口をきかずに唯伯爵の云ふことをじつと聞いてゐるが、そのうちに座に

た、まれないほど心が亂れて来たので、いづれ何かのことは父ともよく相談したうへて御返答するからといつて、突如歸り支度をした。

『それでは兎に角一應考へてみて下さい。』と、云つて、伯爵は格別引留めようともせず、そのまゝ、起ち上つて呼鈴を押した。そしてさも氣が、りらしい顔になつて『あの今お話し、たことは私の方で爲めにするところがあつてお話し、たのではないんだからどうかその點だけは誤解のないやうに願ひます。』と、駄目を押すやうに云つた。

絹雪洞をもつた小間使がやがて庭石づたひに此方へやつて来た。八重子は伯爵に厚く禮を云つてそのまゝ、その女の後に隨いて門の方へ出ていつたが、芝庭のうへ、出ると晝間の賑はしさは何處へ消えてしまつたかと思はれるばかり満地に風寂びて、燈籠の覺束なげな灯影には櫻の落花だけがほの白く闇に浮いてゐた。

二十一の七

小間使ひや書生に送られて玄關へ出ると、そこには磯谷家の自動車がちやんと支度をして待

つてゐた。

八重子は小間使が着せかけて呉れるコートの袖をとほしながら、

『ではあの御前によく申上げて下さいまし。』と、大風に挨拶して、そのまゝ、運転手が開けて待つ扉から肩を張つて自動車へ乗り込んだ。

そこへ、内女關の方から、砂利を踏む慌たゞしい足音がして、

『あ、ちよつとどうかお待ちなすつて、……』と叫んで、誰れか、大急ぎで驅けて来る。と、みると、それは山中であつた。

山中は半分外套を着かけたなりで自動車の傍へ走り寄つて、扉をしめようとしてゐる運転手の手を押しながら、『ね、夫人、いや貴女、ずつとお邸へお歸りならどうか私を櫻田本郷町まで乗せていつて下さいませんか。あのちよつとお話し致し度いこともありますので……』と、云ふ。

八重子が黙つて合點くのを見ると山中はそのまま、車内へ乗つて来た。自動車はやがて騒々しい機械の音を残しながら、八重子と山中を乗せて、宮島伯爵邸の大きな鐵門を出ていつた。

山中はちやんと外套を着てしまふときも待兼ねてゐたやうに八重子の方をみて、
 「貴女、あの唯今伯爵から何かお話しが御座いましたらう？」と、云つて、八重子が合點くの
 を見ると、「貴女はどうお考へ遊ばしますか、實は私がいつぞや申上げましたのはこのことで、
 私はもう早くからその御相談を受けて居りましたのですが、……」と、得意らしい眼つきで云
 ふ。その眼は酒の酔ひでとろんことしてゐた。

八重子は態と顔を背けながら、

「さあ、私には何んて御返事して、か分りませんわ。私もいろ／＼考へてみなくちやならな
 いこともあるから。」

「そりや無論さうで御座いませうとも。兎に角一大事で御座いますからねえ。」と、云つて山中
 は媚びるやうに笑ひながら、「でも私に云はせると、今度のは至極御良縁だと思ひますんですが
 なあ。宮島伯爵といへば何といつても財産は唸るほど御座いますし、それにもし御結婚が成立
 するとなれば貴女は伯爵夫人におなりになるのですからなあ。」

八重子にはその伯爵夫人といふ言葉が胸を刺すやうに響いた。伯爵夫人！ 何といふ誘惑的

な言葉であらう、今の八重子にはさうした言葉ほど力強く胸に響く言葉はないのであつた。

八重子の眼の前には豪壯な宮島伯爵の邸宅の有様や、現在の地位がはつきりと浮んで來た。そ
 の豪華な生活振り、あの派手な園遊會の光景！ 今もし自分が結婚を承諾しさえすればそれら
 はすべて自分の主裁の下に屬すやうになつて、この自分は伯爵夫人といふ榮譽ある地位に上る
 ことが出来るのである、而も伯爵は自分の過去の暗い罪咎を問はずに、出戻りの自分に對して
 誠意のある求婚をしてゐるのではないか……。

それと同時に又八重子の胸にはまだ見ぬリーナの面影が清岡のそれと相纏綿して浮んで來
 た。自分は清岡に欺かれてゐたのである。これほどまでに實意を盡し、貴重な犠牲を拂つてゐ
 るにも拘らず、彼はそれに酬いないのみか、却つて償ふことの出來ぬ侮辱を自分に與へてゐる
 のである。八重子の胸は悲しさと口惜しさに張り裂けるほど喘いで來た。復讐！ 口惜しさ、
 切なさの餘りにふと動いたその心持ちはやがて八重子の身の上に一轉機を劃する動機をつくら
 ずにはゐなかつた。

「伯爵夫人！」その言葉は再び彼女の胸に力強く響いて來た。

山中がさきくくと分りきつた利害を説いてゐるうちに自動車はいつの間にか櫻田本郷町まで来てしまつた。

八重子はそこで山中に別れる時、浮の空で再會を約して、

『いづれその時に貴方まで御返事をしますから。』と、云つた。そして深い思ひに暮れながらたつたひとりて邸の方へ歸つていつたが、その晩は邸へ歸つてもそのまゝ、居間へ引籠つて心が定まるまで彼女は父にも歌子にも逢はなかつた。

二十二の二

夕陽は今銀座の裏町に揃比した蔓々のうへに夢の様なほんのりとした橙黄色を流してゐる。もう少して長い晩春の日も暮れか、らうとしてゐるのである。下の通りではしつきりなしに自動車の警笛が聞えて、騒々しい町のどよみと一緒に漸次と宵闇が迫つて来る。カツフエ・ローズの私室にももう明るい花電燈が煌々と輝いてゐた。

窓際の安樂椅子には稻垣の貞夫が病院からの歸りとみえ、いつもの背廣服を着て、さも疲れ

たやうに腰をかけてゐる。その傍には八重子が派手な縞お召の着物に紫紺色の模様のある羽織を着て、だらしなく體を捻ぢ曲げながら坐つてゐる。二人の前の小卓には果物のむいたのや、抓みもの、ソウセエジなどが置いてあつて、白葡萄酒の大きな洋盃が半分づゝ、飲みさしたまゝになつてゐる。

八重子は馴れぬ口に三杯も飲んだので、頬は紅く燃えて、眼が何とも云へない艶めかしい濕みをもつてゐる。胸にあまる情熱の激しさはその指の先にまで細かく慄へてゐるやうだつた。

八重子は甘えるやうな、駄々をこねるやうな調子で、

『ねえ、貞夫様。そんなにお隠し遊ばさないだつてい、ぢや御座いませんの。なにも私が邪魔をしようといふんぢや御座いませんし、唯誰方だかお名前だけ伺つて置き度いんですわ。』と、云ふ。彼女は此間銀座の辻で貞夫と連れ立つてゐたあの美しい令嬢の名を聞かせろといつて頻りに貞夫を責めてゐるのであつた。

貞夫は當惑したやうな顔色になつて、『貴女にも困るなあ。さうどうも疑ひの眼をもつて見られちや僕は立つ瀬がありやしない。あれは僕の戀人でもなんでもないんですつてば。唯僕、人

から頼まれて、一緒に帝劇へいつたばかりなんですよ。」

「まあ、あんな白々しいことを。そんなことを仰有つたつて私、信用致しませんわ。もう白状しておしまひなさいましょ。ほんとにあの方は誰方のお嬢様なの？」

貞夫は仕方なさうに煙草の火をつけて、

「それぢや疑ひの晴れるやうに名前を云ひませう。さうしたら貴女にだつて分るだらうから。」と、云つて貞夫は八重子から眼を逸らしながら、「あれはそれ日本橋に村木と云ふ時計屋があるでせう、彼處の娘なんです。」

八重子は思はず眼を輝やかして、

「まあ、あの、村木の？ちや虎の門の東京女學館へいつてゐる方ですわねえ。あの方ならお綺麗なんて一時大した評判でしたわ。」と、云つて、うつとり眼を空へさまよはせながら、「ちや貴方どうしてあの方を御存知なんですの？」

「どうしてつて云ふ譯はないけど、彼處は僕の方の病院の患家なんですもの。」と、貞夫は曖昧らしく云ふ。

八重子はしばらく黙つてゐたが、やがて唇だけて笑つて、

「ほ、ほ、ほ、貞夫様。それで分りましたわ。お醫者様なんてほんとになんて御座いますわねえ。きつと貴方が診察に被往るうちにあの方に、……ほ、ほ、ほ。」

貞夫も笑ひ出して、

笑談ぢやない、貴女も實に妙なところへ氣を廻すんですねえ。さうどうも誤解されちや仕様ががない。」

「ほ、ほ、ほ、私の誤解でせうか。誤解だつたら私首を差上げますわ。」と云つて八重子は貞夫の方へつと寄り添ひながら、「そんなに眞面目臭つた顔をなすつても駄目ですわ。お顔にちやんと書いてありますもの。ほ、ほ、ほ。」

さう云ふ八重子の顔はひどく歇斯的的になつて來た。その眼にも唇にも嫉妬の影がそれとなく現はれ來た。

貞夫は考へ深い眼つきになつて、黙つてその顔をみてゐた。

階下では球を突く音がかすかに聞えて、戸外はもうとつぷりと暮れきつてしまつた。

二二二の二

八重子はそのまゝ、口を噤んで、硝子窓から星の輝く空をみてゐたが、やがて妙にいらいらしたやうな顔色になつて、

「ねえ、貞夫様。貴方ほんとうはあの村木のお嬢さんと結婚遊ばすおつもりなんてせう？きつとさうですわ。」と、云ふ。

貞夫は八重子の執拗さに呆れたやうな顔をしてゐたが、やがて何と思つたか急に眼を輝やかして、

「どうもさう追窮されちや仕方がない、ぢやほんとうのことを打明けて話させう。」と、云つて、新しい煙草をとりだしてそれへ火を點けながら「實は僕ひよつとかするとあの娘を貰ふやうになるかも知れないんです。それにはいろ／＼事情もあるんですが、今それを云ふ必要もありませんからそれはそれとして置いて、兎に角僕が今先方から結婚を申込まれてゐるのは事實なんです。僕の方ぢや無論それほど進んだ考へもないんだが、……。」

八重子はその言葉を中途から引奪るやうに口を入れて、

「それ御覽遊ばせな。いくらお隠し遊ばしたつて駄目ですわ。私ちやんと知つてゐるんですもの。」と、云つたが、八重子はそのまゝ、眉のあたりを暗くして、「もう貴方もお年格好はよし、それにあんな御綺麗な方なら御結婚遊ばした方がよう御座いますわ。」と、いふ。

貞夫は卓子のうへの洋盃を弄りながら、

「いや、それに就いては僕の方にも多少考へがあるんです。そりや今結婚してもいい、にはい、が、併し僕は今年の秋頃からどうかして歐羅巴へ行き度いと思つてゐるもんですから彼方から歸つて来るまでは成る可く獨身でゐたいんです。」

「まあ、ぢや貴方も彼方へ被往いますの？さうなると日本が寂しくなつてしまひますのねえ。なんでも此間のお話ぢや大河内さんも石坂さんも彼方へ被往つちまふんだつて云つて被居いました、そんなに皆さん被居らなくなつてしまふとほんとに心細う御座いますのねえ。」

貞夫は笑つて、

「ぢや貴女も行けばいい、ぢやありませんか、幸ひ清岡君も行つてゐるなり……。」

八重子はそれを聞くと何とも云へない傷ましい顔をした。そしてそのまゝ、低く首を垂れてしまつたが、少時すると今度は雙眼に一杯涙をためて、きつと貞夫の方を上眼にみながら、
 「ねえ、貞夫様。私少し事情があつてもう清岡さんのことはきつぱりと思ひ切つてしまひましたわ。もうあの方のことに就いては何も仰有らないう下さいまし。私が伺ふと又未練な氣が起りますから……。」と、云つて、急にヒステリックな嗚咽にむせびながら「それよりも貞夫様。今日はどうか私の愚痴を聞いて下さいましな。私此節妙に心が荒んで来て、いろんなことを考へるやうになりましたの……私ほんとうのことを云ひますと、今迄思ひ詰めてゐたのは清岡さんひとりぢやないんですわ。こんなことを申すのは恥かしく御座んすけど、私、私、貞夫様、貴方も私の戀人のひとりでしたんですわ……。」さう云つて八重子は佛蘭西絹の手帛で顔を掩つてしまつた。

貞夫はそれを聞くと呆氣にとられたやうな顔になつた。初めのうちは顔つきにそぐはないやうな微笑を浮かべてゐたが、その頬は漸次と紅く燃えて来て、眼の色が自然と空想的に輝いて來る。そして彼は引緊まつた唇から苦しさうに息を吐きながら黙つて八重子の襟脚のところを凝視してゐた。

八重子は細かく肩を打慄はせながら頻りに歎息してゐた。寶玉の燦々と輝くその繊細い指は手帛の間からちら／＼と見えて、その指も心に溢れる興奮を示すやうに神経的に慄へてゐる。二人は長いことさうしたまゝ、沈黙の底に坐つてゐた。

二十二三

八重子はやがて顔をあげて、自棄になつたやうに飲みさした白葡萄酒をぐつと飲み干しながら、その洋盃を手につつま、
 「今更こんなことを申上げたつて、貴方は嘘と思召すかも知れませんが、でも今迄のことをずつと考へて下すつたらきつと何か思ひ當ることがおあんなさるだらうと思ひますわ。今まではほんとうにどうかしてこんなことを貴方の前で訴へたくないと思つて、どんなに苦しみましたらう。私は清岡さんのことさへなければ一生このまゝ、私の胸のなかへ祕密として葬つてしまつたかも知れませんが、それに……。」そこまで云ひかけて彼女はふつと口を噤んでしまつた。

貞夫は何と云つてい、か返事に困つたやうな顔をしてゐたが、やがて思ひ切つた顔になつて、『いや、八重子さん、貴女の云ふことはよく分かりました。貴女がさう率直に云つて下さるなら僕もこゝで今迄の事をすつかり打明けて告白してしまひませう。』と、云つて、若々しく眼を輝かしながら、『實は僕もこんなことを云ふのは氣恥かしいけど、ほんとうは僕も一時貴女を戀してゐたことがあるんです。今でもその感情はずつと續いてゐますが、併し僕は強い意志でそれを壓服してしまつたのです。考へて見れば今迄にもそれを告白する機會はいくらもあつたんですが、僕はどうしてもその機會を利用することが出来なかつた。無論それは臆病なせるもあつたが、しかし僕にはもう最初から一種の斷念がついて廻つてゐたのです。』と、云つて、自分も又飲みさしの洋盃をあげながら、『でももう今となつては總てが時とともに過ぎ去つてしまつたのです。もう何を云つても遅いんです。』と、考へ深い調子で云ふ。

八重子はそれを聞くと又蒼ざめた頬へほろ／＼と涙を流しながら、

『まあ、そんな心細いことを仰有つちや私厭で御座いますわ。まだ私達は若いんで御座いますもの。』と、強ひて調子を張つて云つたが、貞夫はそれを抑へるやうに、

『いや、僕だつてさうも思はないぢやないんですけど、それをもう一層深く考へつめてゆくと僕等はもう決して若くないといふことが分るので。貴女だつて今迄の結婚生活や、清岡さんとの間の紛紜などを考へてみたら決して自分の心が若いとは云へますまい。それを強ひて押隠して若い若いと思つてゐるとその間にはもつと苦い矛盾が出来て來るのです。』

八重子は漸次と切なさうな顔になつて、何か云はうとしたが、どうしたものかそれなり力なげに口を閉ぢてしまつた。彼女の俯向いた顔からは涙がしつきりなしに流れ落ちて、膝の上へ置いた手帛のなかへぼたりぼたりと落ちてゆく。

貞夫はそのさまをさも傷ましさに見遣つてゐた。激しい誘惑は幾度か彼の胸にも渦巻いて來たやうであつたが彼はそれを一心になつて押耐へてゐるとみえ、切なさうなその眼には苦悶の色がまざ／＼と映つたり消えたりした。

八重子はしばらくすると又口を切つて、

『ほんとに私どうしたらいい、だらう。』と、消え入るやうな聲で呟いた。自暴自棄になつた心は今蜂が蜜の甘きにつくがごとくに放縱な愛に餓えてゐるのである。體が自由なだけ寂しさ

は一層深く心にしみて、彼女は唯一途に情熱の燃ゆるがまゝに身を任せ度くてならないのであつた。それほど彼女は自分自身に對する責任さへ打忘れてゐた。

貞夫はやがて宥めるやうな聲で、

「八重子さん。何もさう苦悶することはないぢやありませんか。かう二人で心を打明けて話してしまつた上は、もうそれ以上に求めるところはないと思ふ。又それ以上のことを求めようとすれば決して、結果は來ないにきまつてゐます。僕だつて貴女だつてもうそれほど愚かぢやないと思ふんです。」と、云つて、神經的な瞬きをしながら「それよりもどうか貴女の將來の方針を僕に聞かして呉れませんか。それが目下の急務なんですから。」

二十二の四

八重子はやつと顔をあげて、

「でも私にとつちや將來のとよりも現在のこのことの方がどんなに大事だか知れないんです。今かうして生きてゐたつて、人間ですもの、今夜にも死んでしまふか知れやしませんし、私もう將來

なんて云ふものに望みをかけて生きていくだけの餘裕をもつてゐないんで御座いますわ。いくら腕いたつてもうあと四十年と生きられる體ぢや御座いませんし、その日その日の風次第で、浮草のやうに生きていつたつて矢張り一生ぢや御座いませんか。今日の戀人を捨て、明日の戀人を待つなんて、そんな當てにならない望はあつてもなくても同じなんですもの。」

貞夫はそれを聞くと眞面目な顔つきになつて、

「いや、そりや可けない。八重子さん、貴女は今非常に危険な思想に落ちていかうとしてゐる。世の中は決してそんな風に考へちや可けないものなんです。そりや自暴自棄になつたもの、考へてす。」

「そりや無論さうで御座いますとも、私はほんとにもう貴方の仰有るとほり自暴自棄になつてしまつてゐるんですもの。」と、八重子は絶望を眼に輝かしながら云つて、「貴方、もし私を可哀想と思召すなら私の心にもなつてみて下さいましな。自分の罪とは云ひながらこんな境遇に落ちてしまつた女は誰れだつて自棄になつてしまふに極まつて居ります。かうしてゐれば漸次悲しい身の上に落ちてゆくばかりで眞面目に救つて下さる方がなければ私達は死ぬ迄かうして苦

しないでいかなければならないんです。私、それが厭さに、たつた一日でも面白く暮らせるならこの生命を捨て、しまつても惜しくはないと思つて居りますんです。」

「いや、そんな下らない現實主義になつてしまつちや可けません。たつた一度結婚に失敗したからといつて、それで絶望してしまふやうなことぢやあんまり弱すぎるぢやありませんか。」

「い、え、結婚に失敗したゞけならなんですけど、私は戀にも失敗してしまつたんです。それが私の胸に之からどんな深い創痕を残すことで御座いませう。」と、八重子は涙ながらに云つて、いきなり耐らなくなつたやうに貞夫の方へ肩を寄せながらその手をそつと握りしめて「ねえ、貴方、貞夫様。どうか許して下さいまし。こんな失禮なことをして、お怒りになるのは知れてゐますけど、私もう自分で自分を制して置くことが出来なくなつたんです。せめてかうしてゐさへすれば私の胸は靜まるんです。どうかお怒りにならないで下さいまし。」と、云つて、それでも恥かしさうにその握つた手のうへ、顔を伏せてしまつた。

貞夫はひどく當惑したやうにその手をそつと振離さうとしながら、

「八重子さん、今更そんな子供らしいことをするのはよして下さい。僕はそんなことをされる

とひどく不愉快な心持がするんです。さつきも云つたとほり、すべては時と、もに過ぎ去つてしまつてゐるんです。」と、力強い聲で云つたが、やがて又急にやさしい調子になつて「ねえ八重子さん。貴女は頭腦がどうかしてゐるんです。幸ひ今夜は天気もい、から戸外へ出て少しそこいらを散歩して歩かうぢやありませんか。さうしたらきつと気分がさつぱりするでせう。」さう云つて貞夫は自分から立ち上りながら八重子を促がした。こんなことをしてゐて、もしや二人の身のうへにとんだことでもあつては、取返しがつかないと思つたので、貞夫はその危険を避けるために態と八重子をこのカツフェ・ローズから誘ひ出さうとしたのであつた。

八重子は頻りに泣き沈んで、頑固な子供にやうに體を揉んで起ち遣つてゐるが、そのうちふと氣が變つたやうにすうつと起つて來て、ものをも云はずつか／＼私室を出ていつた。貞夫はその後から黙つて隨つていつた。

二十一日

カツフェ・ローズの酒場は今が一番出入りのさかる時刻なので、八重子は人目に立つのが厭

さに大急ぎでその女關を出た。そして貞夫と肩を並べながらほの暗い裏通りを何處へといふ當てもなくぶら／＼足に任せて歩いていった。

道はいつしか濠端へ出て、彼等は山下橋を渡つて高架鐵道のガードの下をくゞつてしまつた。ホテルでは何か大きな夜會でもあると見えて、門内の廣場には俵や馬車や自動車や眞黒に詰めてかけてゐる。窓口には明るい燈火が煌々と輝いて、制服を着た給仕が廊下のところを出たり入つたりしてゐる。

日比谷の通りへ出ると、そこらには賑やかな人の群が動いてゐるので何事かと思つて四邊を見廻すと、その時公園の樹立のなか、らは唳々たる音楽の音が聞えて來た。さういへばその日はその音楽堂で軍樂隊の演奏のある日なのであつた。

二人はその人の群と一緒に公園のなかへ入つていつたが、音楽堂の前には黒山のやうな群衆が集まつてゐるので態とそれを避けて松本樓の裏から樹立の蔭を池の畔の方へ入つていつた。そしてとある人氣のない樹陰のベンチを捜してそれへ腰を下ろした。

そこからみると空には降るやうな星影が瞬いて、眞黒な樹々のしげみの底では囁くやうな葉

摺れの音がしてゐる。音楽堂の方からは甘い樂の音が折々流れて來て、噴水の音と一緒に樹立の奥へひゞいてゆく。アーク燈は夢のやうに息をして、その紫銀色の光は八重子達の足のところまで忍び込んで來る。じいつとしてゐると青葉の匂ひが鼻先に迫つて來た。

八重子は暗闇のなかで幾度か耐らなくなつたやうに嘆息をついてゐたが、やがてほの白い顔を貞夫の方へ向けて、「ねえ、貞夫様。ほんとにい、晩ですことねえ。私、こんな晩にたつた一時間でもい、から貴方を自分の戀人にしたと思つてゐたう御座んすわ。……ね、貴方。どうか後生ですから私に甘えさして下さいました。」と、夢みるやうな聲で云ふ。そしておづおづ手をさしのべて貞夫の膝のうへ、置いた。

貞夫は黙つてゐたが、かうまでに自制を失つた八重子の心のうちを思ひ遣ると却つて可哀想に思はれて來て、そのまゝ、そつと彼女の襟脚のところへ唇を持つていつた。そして惑はずやうな髪の香にひたりながら自分も幸福に酔つたやうな心持ちになつてゐた。その時蛇のやうに血に餓えた八重子の手はいつの間にか貞夫の手を千斷れるほどしつかりと握り緊めてゐた。

青春の血のゆらぎを咬るやうな音楽のひゞきは漸次と急調に亂れてゆく。貞夫の心もそれと

一緒に少しづつ、感傷的になつて来て、まだ八重子を思つてゐた時分の切ない心持ちが我知らず胸一杯に込み上げて来る。そして心に残つた葡萄酒の酔ひ心地は次第に幸福の感じを倍加させて、彼自身も危く節制を失はうとしたのであつた。

その時小徑の向うからは二三人の男女が笑ひ興しながら此方へやつて来た。貞夫ははつと我れに返つて、八重子の肩から顔を離しながら、

「八重子さん。そろそろ歸らうぢやありませんか。」と、喉へからむやうな聲で云つた。

八重子はうつとりしたやうな聲で、「どうかももう少しかうさせて置いて下さいました。私今が非常に幸福なんですすから。」と、云ふ。そしてどうしたのか袂で顔を掩つてしく／＼啜り泣きしだした。

小徑の人影はやがて又遠くへ歩み去つてしまつた。笑ひ聲だけが樹立の彼方に聞えて、四邊は再び青葉の匂ひにつままれて、夜の静けさに歸つていつた。

八重子はそれをみると狂氣のやうに何ごとか呟いて、いきなり貞夫の胸へ顔を埋めてしまつた。

二人は長いことさうやつたまゝ、で口もきかずにゐた。

二十二の六

その次にやつて来た足音は漸次と二人のゐる小徑の方へ近づいて来たので二人ははつと我れに返つて握りしめてゐたその手を離しながら兩方へ退いた。それと一緒に樹立の角のところからは四五人の學生ががや／＼云ひながら歩み出て来て、さも怪訝さうに二人の様子をそつと差し覗きながら前を通り過ぎていつた。そして又樹立の彼方へ曲ると何と思つたか殊更に口笛を吹き鳴らしながらどつと笑ひ崩れた。

八重子は腹立たしさうにそつちを見送つてゐたが、又貞夫の肩へ體をよせて、

「ねえ、貴方、あの私、ほんとうのことを申すと近いうちに又再婚するかも知れないんで御座いますよ。」と、云ふ。

貞夫はそれを聞き咎めて、少し身を退きながら、

「え、再婚するんですつて？ どうして？」と、訊き返す。

八重子は顔を背けて、

「い、え、まだはつきり極まつたことぢやないんですけど、こんな私にも結婚を申込んで下さる方があるもんですから。…」

「そりや相手は一體誰れなんです。我々の交友してゐる範囲の人ですか？」

「さあ、それを申上げてい、か悪いか分りませんが、…實はまだ秘密になつてゐるんですけど、貴方はもう何もかも御存知なんですからお話し、てしまひますわ。實はあの芝の宮島さんなんですの。」さう云ひ乍ら八重子はつと顔を上げて貞夫の眼のところをじいつと見詰めた。貞夫はさも吃驚したやうに、

「えッ、宮島さん？ あの伯爵の宮島さんですか？」と、訊き直したが、八重子がそれと合點くを見ると今度は態とらしくにいつと微笑んで、

「そりや良縁ぢやありませんか。宮島伯なら人物もい、し、社會的地位もよし、それに伯爵夫人は貴女の最初からの理想だつたんだから。」

「まあ、厭な貞夫様。私もうそんな伯爵夫人なんて理想は持つてゐませんわ。」と、八重子は嬌

態をして、「でもほんとにあんな方と結婚をして宜しいもんでせうかねえ。私ほんとに迷つてゐるんで御座いますわ。」

「い、も悪いも、彼方から申込んで來た結婚ならどしく受ける方がい、ぢやありませんか。殊に今津君ともあ、なつたあとだから、貴女にとつちやたしかに好い機會です。あの宮島さんと結婚したら、貴女のこれからの生涯はきつと幸福になる。」

八重子は黙つてその言葉に聞き入つてゐたが、やがて、

「でも私さうは思ひませんわ。これが初めての結婚ならなんてすけれど、もう心がこんなに荒んでしまつてはねえ。…それにほんとに結婚するとなると私の自由な時はもう幾日もないことになつてしまふんですわ。」

貞夫は黙つて何ごとか考へ込んでゐたが、やがて、

「併しもう貴女には自由な時は必要がなくなるでせう。伯爵夫人といふ地位に上れば、貴女はきつと我々のやうなものに興味を持たなくなるに極つてゐるんだ。貴女と僕達とは漸次と距離が遠くなつてゆく。そしてそれと一緒に貴女はずん／＼幸福になつてゆくに相違ないです。」

八重子は黙つてそれには答へなかつた。答へようとしても何かなしに胸が迫つて言葉が口へ出て来ないのであつた。

二人はそれから宮島伯の家庭のことなどを語り合つた末、もう時間が遅くなつたので、そのまゝ、ベンチを離れて又正門の方へ歩いていつた。そしてもう少しも少しといつて別れを惜しむ八重子を貞夫は態々虎の門まで送つていつて、そこでやつと別れを告げた。

八重子は蒼白い街燈の灯影を、幾度か後を見返りながら永田町の邸の方へ歸つていつた。貞夫にはその後姿が何かしら運命の或起伏を暗示してゐるやうに思はれ、彼女の日に日に荒んでゆく心が不惑に思はれてならないのであつた。

二二二の二

今津家と縁が切れてからと云ふものは磯谷商會は又漸次と悲境に陥つていつた。その経過は眼には見えなくても、實質のうへに於いて甚だ面白くない結果を生んで来た。それには米國の方の相場の變動も一面の影響を與へたが、それよりも第一折角恢復した信用が東海汽船など、絶

縁すると同時に又少しづつ、地に墮ちはじめたからであつた。それでも民造は何かの機會を利用して世間を驚倒させるやうな大仕懸けな仕事をしてみせると口癖のやうに云ひひしてゐた。併し彼の健康はそれに耐へられるかどうか、誰れしも危ぶんでゐたのであつた。

その間で、八重子の再婚の問題は着々と歩をすゝめていつた。民造は八重子から宮島伯爵のことを聞くと、一も二もなく賛成した。どうせ再婚させなければならぬのであつてみれば少しでも今津より家柄のいゝ家へ遣れ、ばこれに越した話はない。さうなれば世間へ對しても顔が立つ譯であるし、幾分でも八重子の不名譽を取返すと同時に伯爵夫人といふことがまた民造にとつても少からず歡ばしかつたのであつた。

民造は自分で運動して媒約を頼んだり、婚儀に對する準備をしたりした。宮島家からはいろいろ銚衡のあつた末、立派な仲人を立て、今度は正式に申込んで来た。それで八重子も正式に承諾する、話しはとんく極まつて、宮島家と磯谷家とは六月の末の吉日を選んで目出度く婚儀を取結ぶことになつた。それが極ると同時に世間へも公然と發表されたのであつた。

今津家のことがまだ人の口の端を去らないこと、て、世間ではその婚儀に對してさまざま

世評が喧しかつた。或ものは伯爵が名譽を擲つて八重子の醜骸を購つたといひ、又或ものは伯爵の胸に燃ゆる戀の焰の激しさを嘲ふやうな調子で噂して歩いたりした。併し伯爵も八重子もそんなことには少しも耳をかさなかつた。八重子は殆んど寢食を忘れて結婚の支度に没頭してゐた。

その間にも彼女は自分に残された最後の自由の時を樂むために、劇場へ出入りしたり何か會合でもあると大概なところへは顔を出したりしてゐた。その度毎に何かの噂の種を彼女はつくらずにはゐなかつた。

以前と違つて石坂や大河内や峰や松浦といつたやうな若い貴族の人達に接するにも彼女はまるで藝者か女優のやうな浮ついた態度を示した。言葉の受渡しなども、なるべく軽くかるく持つていくので、端でみてるものにはそれが又意味ありげに見えたりするのであつた。それに會合の席などともすると酒を飲んだりするので、彼女の亂倫な噂は日に日に高くなつていつた。併し八重子は自分ではさうまでに思つてゐないので、それを打消す手段などは少しも執らなかつた。そして間さへあると美しい着物を着て雲雀のやうに樂さうに噪いで歩いてゐた。

宮島伯とは彼方の要求に従つて、月に三度ぐらゐるは必ず逢ふことにしてゐた。大概の時は人眼がうるさいので、高輪の邸へ訪ねていつたが、伯爵はその度毎に様々な方法で彼女を歡び迎へた。そして邸のなかのことなどもそれとなく八重子に呑み込ませるやうに仕向けたりした。伯爵家には亡つた夫人の残していつたひとりの遺兒がゐたり、それは今年とつて十二の美代子といふ愛らしい令嬢で、長いこと葉山の方の別荘へやつてあつたが、丁度結婚のことが極まる頃から又高輪の邸へ引取られて、そこで寂しく起臥してゐた。伯爵はどうかしてこの美代子を八重子に懐かせたいと思つてゐるので八重子が訪ねて來る度にその席へ呼び出して、いろいろに取做してやつた。

美代子は生れながらにして何處かに陰影のあるやうな陰鬱な子であつた。

二十三日

その日も八重子は午過ぎから高輪の宮島伯邸へ行つてゐた。前の晩から電話で打合せがしてあつたにも拘らず、伯爵は急用が出来て華族會館まで行つてゐたので八重子が訪ねていつた

時には丁度留守であつた。併し必ず一時間以内には歸つて來るといふので、八重子はいはれるまゝに奥の座敷へ通されて、伯爵の歸りを待つてゐた。

たつたひとりて紅茶を飲んだり、果物をたべたりして待つてゐると、そこへ小間使が茶の熱いを持つて出て來たので、八重子はそれを呼び止めて、

「ね、あの、美代子さんは被居つて？」と、訊ねてみた。彼女は所在なさに美代子をせめてもの話相手にしようと思つたのであつた。

小間使はそれを聞くと叮嚀に辭儀をして、

「はい、あの唯今お學校からお歸りになりましたして御座います。あの此方へお出て遊ばすやうに申上げてても宜しう御座いませうか。」と、云ふ。

八重子は嬉しうに合點いて、

「え、どうぞ。私、寂しくつて仕様がありませんから、若し御暇なら一緒に遊びませうつてさう申上げて下さいました。」と、首を傾げて云ふ。

小間使は承はつて出ていつた。

やがて思ひもかけぬ縁先のところでひそやかな足音がする。と、みると、美代子はいつの間にか庭を廻つて、縁先の沓脱石のところへ來てぼんやり立つてゐるのであつた。

八重子はそれをみるとにつこり笑つて、硝子越しにやさしく手招きしてみせた。それでも美

代子は上つて來ようとしなない。

八重子は仕方がなしに自分が立つて縁端へ出ていきながら、

「美代子さん。そんなところに立つて被居らないで此方へ上つて被來いな。私と一緒に遊びませう。お厭？」

美代子は寂しく笑ふばかりで妙に含羞んでゐて返事もしない。

八重子は今迄にもいくら力をつくしてもこの美代子が自分に馴染んで呉れないので妙に氣懸りになつてならなかつた。自分の方では出来るだけやさしくしてゐるのに、どうしてそれを受け入れて呉れないのだらうと、それがひどく焦悶かしくも思へるのであつた。

八重子はやがて氣を變へて、

「ちや私もお庭へ出て一緒に遊びませう。」と白けたやうな顔をしながら云つて、そのまゝ、庭下

駄を穿いて芝庭へ下りていつた。そしておづ／＼彼女の顔を見上げる美代子の手を執つて、池の端へいつて、その汀際へ佇んだ。

池の水面には青々と水藻が浮いて、その蔭には緋鯉や真鯉がまるで繪に描いたやうに長閑に泳いでゐる。午下りの明るい日射は青葉の間から縞のやうに射し渡つて、池の水は日の照るところだけどんよりと濁つてみえる。

森閑とした庭の奥では帛を裂くやうな鋭い小禽の啼き聲が聞えた。

八重子は池面を見入つてゐる美代子の横顔をそれとなくじいつと見詰めてゐた。頬の色は蒼く沈んで、圓らかな眼は如何にも惻巧さうにくる／＼してはゐるが、それだけに何處か親しみのない冷たい表情をもつてゐる。八重子はその時になつて、初めてもし自分がこの宮島の家の人となつたらといふ考へが起つて來た。伯爵をはじめ、他の人達はどうでもなるとしても、此美代子だけは到底彼女の力では手なづけることは出來ないと思つた。第一たつた十二や十三の令嬢にしては言葉少なくて、老成てゐる。人並優れて母思ひであつたといふところをみると、亡つた伯爵夫人に對する愛着の念が、子供心にも深い深い哀傷を覺えしめるのであらう。その眉にもその眼にもさう思つてみると、子供らしくない哀愁が宿つてゐる。八重子はそれを思ふと何とも云へない寂しい心持ちがして來た。後妻、その言葉の果敢なさをしみ／＼味はせられたやうな氣がするのであつた。

二十三の三

八重子はしばらくすると又氣を取直して、やつと口を切りながら、

「ね、美代子さん。貴女もし私が貴女の母様になるやうになつたらどうして？ 貴女お厭？」と、訊いてみた。

美代子はさういふ八重子の顔を下からあからめもせずじいつと見上げてゐるが、やがて冷たい眼つきになつて、

「でも、小母さま……。』と、云つたぎり悲しさうな顔になる。

八重子は眞顔で、

「なあに？ 貴女お厭なんてせう？」と、もう一度繰返して訊いたが、美代子はそつと首を振

つて、唇だけで笑ひながら、

「でも小母さま。あの私の母様はもうお亡くなりになつたんですわ。」と、云ふ。

そのひの言へ八重子には美代子の心のうちがはつきりと分るやうだつた。どんなに親切を盡しても、母らしい愛を注いでも、この美代子ばかりは到底自分に懐いては呉れまいといふ豫想がはつきり胸に映つて來るのであつた。

八重子は今度は自分の方が稍腹立たしいやうな顔をしながら、

「ぢや美代子さん。貴女お亡りになつた母様と私とどつちがお好き？」と、押被せるやうに訊く。

美代子は顔を背けてそれには答へなかつた。そしてそれなり母屋の方をじいつと眺めてゐたが、しばらくすると薄く涙ぐみながら、

「私、お母さま好きなんですけど、もうお亡くなりになつちまつたんですもの。もういつまで待つてゐても歸つて來て下さらないんですつてねえ。」と、しをく／＼云ふ。

八重子はそのまゝ、口を噤んでしまつた。彼女には今迄少しも考へ及ばなかつたやうな心の世

界が初めて考へられるやうになつて來た。今津家で送つた二年あまりの結婚生活の間には自分が子を生んで母にならうなど、云ふことは少しも考へたことはなかつた。この美代子を見ると彼女はふつとそれを思ひ出して、何かしら急に手足を抱き竦められるやうな心持ちにならずにはゐられなかつた。繼しい子、繼しい親、さう云つた世の中にありがちな悲劇は今走馬燈のやうになつて眼の前を通り過ぎてゆく。そして彼女が宮島伯と結婚した後はこの美代子がどんな役廻りを勤めるだらうと思ふと急に八重子は年を老つてゆくやうな切なさを覺えた。

八重子がそんな暗い思ひに暮れてゐる間にふと聞耳を立てると誰か庭石傳ひに此方へ歩いて來る足音がする。ふと振顧つてみるとそれはいつ歸つて來たのか伯爵であつた。八重子と同じやうに庭下駄を突懸けて庭石を一つ一つ拾ひながら悠々と此方へ歩いて來る。

伯爵はその日紋付の羽織に折目の正しい袴をはいてゐた。さうした風姿をみると自ら貴族らしい威儀が備はつて、見るから人を惹きつけるやうな様子になつて來る。伯爵は八重子達の方へ近づくと満面に笑みを含んで、

「やあ、どうもお待たせした。」と云つて、軽く一禮して、今度は美代子の傍へ寄つてその頭を

撫てながら、

「お前は小母様と遊んでゐるのか。は、は、は、そりや好いな。」と、さも嬉しさに云つた。事實伯爵にとつては二人がかうして日に日に接近してゆくらしく見えるのが何を措いても嬉しいのであつた。

八重子は急に今までの浮かぬ顔を捨て、艶やかな嬌態をしながら、

「どうも先達は遅くまで、……又お邪魔に伺ひましたの。」と、云ふ。

伯爵も晴れやかに笑つて、

「いや、よく来てくれました。さあ、こんな處にゐないで、彼方の茶座敷の方へ行きませう。」と、云つて、ぶら／＼歩き出したが、その隙に美代子はそつと二人の間を摺りぬけてばたばたと芝庭の方へ驅けていつてしまつた。

二十三の四

伯爵は茶座敷の沓脱石のところまで來ると、ふと美代子がゐないのを發見して、

「おや、美代子は何處へいつた。美代子、美代子。……」と、云つて、二聲ばかり靜かに呼んでみたが、何處からも返事がしないので、そのまゝ、微笑んで、

「は、は、は、あなたが居ると氣が詰るもんぢやから、又遁げて行きをつたな。」と、云つて、
「さあ、ずつと上つて下さい。」

八重子はそのまゝ、伯爵のあとから座敷へあがつていつた。障子には若葉の色が蒼々と映つて小禽の聲がこゝては軒先にひびくやうに閑寂な調子で轉つてゐる。五月らしい温かな風がすうつと吹いて通つた。

そこへ小間使達が茶道具やら菓子やらを運んで來る。それがいつてしまふと伯爵は急に膝を崩して、さも意外な出來事を語るやうな顔をしながら、

「いや、細かいことを話さんと分らんかも知れんが、實は今日私は實に意外な事件を聞き込んで來たんだが、……」と、茶を啜りながら云ふ。

八重子は態と誇張した表情をしながら、

「え、何んて御座いますつて、何か變つたことでも出來ましたんで御座いますか？」と、首を

傾げる。

伯爵はその艶やかさを讃嘆するやうに微笑みながらじいつと見てゐるが、やがて煙草に火を

点けて、

「今日華族會館へいつたのも實はそのことなんだが、今私は彼處で外務省の鈴木に逢つてな、

彼の話では清岡君が又愈々近々うちに此方へ歸つて來るといふぢやないか。」

八重子は少し顔色を動かして、

「まあ、では愈々彼處で英國の方と結婚遊ばしたんですか知ら、……。」

「いや、ところがその事に就いて少し面倒が出来てゐるのださうだ。國籍が違ふと宮内省の方の手續きが面倒なので、それを清岡君から鈴木のところへ頼んで來たのだ。私にも英國では一緒にゐるた仲だからひと骨折つて呉れといふのだがどうしたものだらうなあ。」と、伯爵は笑談のやうに云ふ。

八重子はぼつと頬を染めて、

「そんなことを仰有つて、私をお調弄ひ遊ばしちや厭てすわ。」と、云つたが、そのまゝ、顔を

背けて、「ではなんて御座いますか、もしその手續きがうまく運ばば清岡さんはすぐに此方へお歸りになるんですか？」

「まあ、私はさうだらうと思ふ。ところが鈴木の話では例のリーナがつい此間旅先でお父さんを亡くなしてしまつたのださうで、その死の報知が來るとすぐにお母さんは英國へ歸つてしまふ。リーナはたつたひとりて清岡君のところへ残つたのでひどく歇斯的利的になつて、もう昨今

ではまるで精神病者のやうになつてゐるのださうだ。考へてみりや全く無理のない話だが、それで清岡君もほと／＼弱つて、早く日本へ連れて來て静養させ度いと云つてゐるのださうだ。」

「まあ、お父さんがお亡くなりになつたんですつて？　ほんとにお可哀想ですわねえ。」八重子は口だけで云つて、「それでなんて御座いますか、清岡さんは矢張り今でも新嘉坡に被居るんで御座いますの？」

「さうださうだ。ほんとにリーナの身になつてみれば氣の毒も氣の毒だねえ。はる／＼こんな

東洋まで尋ねて來て、お父さんに死なれては耐らない。西洋人といふものは存外さうした感情の

強いもんだからさぞ苦悶してゐることだらう。それと同時に又清岡君の心中も察してやらなけ

りやならんねえ。』

八重子はそれには答へなかつた。清岡を慕つて態々萬里の波濤を越えて來たりナの身のうへを自分に引較べてみると彼女の胸にも涙ぐましい心持が湧いて來ずにはなかつた。旅路で父を喪つたりナ、しかも若い身空でいかに戀慕つてゐるとは云ひながら、まるで見も知らぬ人種の住む國々をさまよひ歩いてゐるその身を思ひ遣ると八重子は自分までが耐まらなく悲しくなつて來た。

二十三の五

八重子はしばらくすると又顔をあげて、

『でも、いづれ近いうちにはお二人の結婚は許されるんで御座いませうねえ。』と、陰鬱な眼つきになつて訊く。

伯爵は煙草の煙をすうつと靜かに吐きながら、

『さあ、宮内省の方の手續きさへ運べば明日にも結婚は許されるのだが、……』と、云つて

八重子の方へ眼を移しながら、『併し鈴木の話の様子ではもう二人は新嘉坡で結婚してしまつてゐるのではないかと思はれる節もあるんだ。耶蘇教の結婚は日本のと違つて簡單だからねえ。は、は、は、。それで清岡君は唯日本人としてその結婚を承認して貰へばい、ぐらゐるな考へてゐるのかも知れない。若しそれが承認されなれば英國へいつて生活しさへすりやい、んだからねえ。』

八重子は黙つて伯爵の顔をみてるた。彼女の心には今遠く去つた清岡子爵の面影が髣髴として浮んでゐるのである。一度は思ひ切つた幻影が再び心に歸つて來て、あの眼、あの唇、さうした念ひ出の深い面貌をまざくと憶ひ起すと、八重子の胸には又耐へ難い逢ひ度さの思ひが湧いて來る。

伯爵はそれを顔色で讀んだか、やがて薄く笑ひながら、

『大層沈みだしたぢやないか。又清岡君のことでも思ひ出しやしないかね。』と、戯れるやうに云ふ。

八重子ははつと我れに歸つて、

「い、え、そんなことは御座いませんですけど、でも私ほんとにそのリーさんとか云ふ方が可哀
想で、……。」と、その場を云ひくろめる。

「全く可哀想は可哀想だね。私は英國人のことだからさぞ日本の結婚制度が野蠻だといつて清
岡君を責めてゐることだらうと思ふ。自己に對する権利の觀念の發達したものから見や、日
本の結婚制度ぐらゐる野蠻なものはないのだからねえ。」

八重子は黙つて合點くばかりであつた。そしてさういふうちにも彼女の心は清岡のことと漸
次と一杯になつて來た。

伯爵は頻りに清岡のことから結婚といふことを論じてゐたが、そのうちに八重子が聞いてゐ
ないのを感じくとやがて話頭を轉じて、彼女の顔を見ながら、

「それはさうと、貴女のお父さんは今度大層大仕掛けなことを始められたやうだな。今日の新聞
聞てみると米國で鐵材の買占めをやられたとか云ふ話だが、それはほんとのことなのですか？」
八重子は此頃新聞なども碌に讀まないし、それに父の民造ともそんな話はまるでしないので、
さうした事實は少しも知らなかつた。唯鬼塚や店の方の重役達が常になく頻々と出入りして、

夜遅くまで奥の父の居間で密議を凝らしてゐたりするのを見懸けるのでひよつとしたらそんな
ことが起りつ、あるのかも知れないと思つた。で、格別氣にもならないやうな調子で、

「まあ、そんなことが御座いますんですか、私どもはちつとも存じませぬわ。」と、云ふ。

伯爵は笑つて、

「は、は、は、。新聞にまで載るのを知らんといふのは面白いな。いや昨夜もちよつと交友倶楽
部へ行つてみたが、あすでも大分實業家連の間では問題になつてゐるやうな様子だつた。なん
でも三星を向うへ置いて決戦するのだとか云ふ話だつたが、えらいことを始めたもんですな。
私達はまるでさういふ消息は分らんが、しかしさう云ふ事業家の競争は端から見とつても痛快
なものだ。どうかうまく勝おほせて呉れ、ばい、が、……。」

八重子はそんなことは浮の空で、

「ほんとで御座いますわねえ。でも父も今迄には大分失敗の経験も持つて居りますから、今度
だつて何か成算のないことは致しますまいと思ひますわ。」と、口だけで云ふ。

伯爵は鷹揚に笑つて合點いた。

庭の樹立ては又ひとしきり小禽の囀りがすが／＼しく聞えた。

二十三の六

八重子は伯爵の思惑もあるので、やがて氣を取り直しながら、胸にあまる思ひを紛らかさうとして、此の祖父の民造が買占めをやつて失敗した時の話などを順序もなく語り出した。鑛山で同盟罷工が起つた時のこと、勢洋丸の沈没した時のこと、さう云つたまだ記憶に新たな事實の思ひ出はやがて八重子の胸に溢れて來た。それにつけても思ひ出されるのは清岡のこと、あの時はあゝであつた、又あの時にはかうであつた、と、それ等は一々指呼するやうに心象の面に浮んで來る。さうした場面場面で主な役をつとめてゐるのはいつもその清岡と、稻垣の貞夫であつた。

伯爵は黙つてその話を聞いてゐたがやがて眞顔になつて、

「貴女のお父さんでもそんな悲境に立たれたことがあるのですかねえ。尤もあの時にはいろいろな風聲鶴唳は立つたが、私はそれほどはなと思つとつた。あれだけの資本と、あれだけの後援とを持つてゐられるのだから、たとへどんなことがあらうともそんな悲境に陥られることは萬々なからうと思つてゐた。全く事業家の運命なんて云ふものは危険なものですなあ。」と、さも思入つたやうに云ふ。

八重子はそんなことは幾度となく考へたことがあるので、深い嘆息を以て答へながら、

「ほんとで御座いますとも。私なんか家のことがどうなつてゐるかちつとも存じませんけれど、時々心細くなることも御座いますわ。今度の買占めだつてうまいければ宜しいんで御座います。せうけど、ひよつとして外れたときにはそれこそ惨めて御座いますよ。以前の創痕が癒りきつては居りませんのですからねえ。それに父も又此節はどうも健康が務れませぬのですから。」伯爵はそれを打消すやうに、

「いや、今度はもう以前のやうな失敗を繰り返すことはありませんまい。併し考へてみりや全く運ひとつなんだからなあ、……。」

さう云つてゐるところへ庭の方から忍ぶやうな足音が聞えて來た。みると、いつの間によつて來たか美代子が縁端のところからじいつと此方を覗き込んでゐる。

伯爵は嬉れしきうにそれを迎へて、「お、美代子か。此處へ上んなさい。何か御用かね？」と、やさしく笑つてみせる。

美代子は黙つて笑ひながら首を傾げてゐたが、やがてそつと次の間を廻つて此方の座敷へ入つて来た。

八重子と伯爵はそれから長いこと美代子を相手に時を過ぎした。そして八重子はいつものやうに洋館の方の食堂で晚餐を御馳走になつて、日の暮れ方にやつと永田町の邸へ歸つて来た。邸へ歸つてみると、その日はどうしたものか、洋館の應接室の方では大變な大客で、女關先の馬車廻しのところには自動車や俵が幾臺となく押懸けて來てゐた。

居間へ通つてお絹に訊くと、なんでも午後から入れかはり立ちかはり來客がついてゐるのださうで、漸次と様子を窺つてみると、商會の方の取引關係や市場に於ける磯谷商會の地位が昨今漸う白熱時代に入つたものらしくつた。鬼塚や重役達は父の居間へ陣どつて、上血せたやうな眼つきをしながら頻りに獨樂のやうに立働いてゐた。

八重子もじつとしてゐられなくなつて、歌子の居間へいつてみたが、歌子はその時何處へや

るのか長い長い手紙を書いてゐた。姉の姿をみると慌て、それを巻き返しながら、「あら、姉様、いつお歸り遊ばしたの？」と、とつてつけたやうな笑ひ方をする。

八重子は態と見てみぬ風をしながら、「私つい今しがた歸つて來たの。なんだか大變な騒ぎぢやないの。」と、云ふ。

「ほんとに私もさつきから吃驚して居りますのよ。まだお父様にもお眼に懸りませんからよくは分りませんが、何んでも米國の方のことが大層都合よくいきさうなんて御座いますつてね。」

「へえ、そりやい、鹽梅だわね。」

八重子はそれからずつと晩までそこで歌子とたつたふたりで話し暮らしてしまつた。

二十四のI

磯谷邸ではそれからもう毎日のやうに混雜が續いた。四時に商會が退けてしまふと鬼塚達は民造と一緒に自動車で邸へやつて來る。密議は密議についで、ともすると十一時頃までも客

が歸らないことがあつた。顔見知りのないやうな人達が入れかはり立ちかはりやつて来ては晩餐を食べていつたりした。電話は殆んど民造の居間へ引き、りになつて、何處と通話するのかしきりなしに電鈴が鳴つてゐた。そして八重子も歌子も此頃は殆んど民造と一緒に食事などをとることがないので、事件がどうなつてゐるのかまるで窺ひ知ることが出来なかつた。

その日はいつになく來客の數も少なくて、もう夕方の方の五時頃から先は邸も静かになつたので、民造は久しぶりで八重子達と食事を共にしようと思ひ出した。そして奥の十疊にその支度をすゝるやうに命じたが、それが出来ると彼は態々八重子達の居間へやつて来て、にこやかに笑ひながら、

『どうだ、今日は久しぶり振りで皆で一緒に夕飯を食べようぢやないか。』と云つて誘つて歩いた。二人は嬉しさにそのあとに随いて、奥の間へいつた。

民造は膳へ就くといつものやうに白葡萄酒の盃をあげながら、

『どうも此頃はひどく忙しくて、お前達ともゆつくり話をする事が出来なかつたが、何か變つたことはないかな?』と、笑ひながら云ひ出した。

八重子はそれを軽く受けて、

『ほんとにお父様。此節は大層お忙しう御座いますのねえ。一寸お話しに伺はうと思つても、伺つていゝか悪いか分らないんで御座いますもの、私達随分寂しう御座いましたわ。』

『は、は、は、お前達を放つて置いて、金儲けの工夫ばかりしとつちや可かんねえ。だがもう彼此十日も経てば體も暇になるから、さうしたら一つ何處かへ又旅でもしようかな、かう時候が温かくなつちや京阪の方などもさぞよからう。ひとつ皆で京都の方へても出懸けるかな。』

八重子は嬉しさを眼に輝かして、

『ほんとにお暇になつたら何處かへお伴致し度う御座いますわねえ。私の方の婚禮のことが差迫つて参りますと、又忙がしくなりますから。』

『さうとも、さうとも。何を云つてももう來月のことだからなあ。』民造は燈籠のほんのりと點つた庭の葉蔭を見ながら、『此頃は高輪の方はどうか。相變らず達者にしてゐられるのだらう。』

八重子は一寸嬌態をして、

「え、あのつい二三日前にも一寸伺つてみましたんですけど、何もお變りは御座いませんでした。お父様へくれぐれも宜敷くつて仰有つて被店いました。何んですか交友俱樂部でお父様のお噂を聞いたとか仰有つて、今度のことなんか大層心配して下さつてゐるやうて御座いましたわ。」

「は、は、は、。どうも新聞などで騒ぎを大きくしてしまつたので困るなあ。高輪あたりまで聞えてゐては恐縮だねえ。」

「でもその方のことは旨くいつてゐるんで御座いませう？私共が伺つたつて分りませんが、今度はどうかして御成功遊ばして下さらなくちや困りますわ。」

「は、は、は、。お前達からまでさう云はれちや、私も大いに發奮せんけりやならんねえ。まあお庇護で今度はどうやら旨くいささうだが、それもまだはつきりとは分らんのだ。何にしる千里も二千里も先てやつとる仕事なんだからなあ。」

民造の顔にはそれと一緒に晴々とした輝きが現はれて、成功に對する自信と豫期とはその眼の色を見ただけでも分つた。

八重子も歌子も嬉れしさに父の顔を見てゐた。

二十四の二

民造はやがてまた得意さうに笑ひながら、

「併し世の中のこと、云ふものは妙なものだな。譬へ此方が悪いと思つとつても、向うからそれに對して意地悪く復讐をされるとつひ此方も又それに輪をかけて返報したくなる。今津の場合などが全くさうだ。今津も今度のやうに私に致命的な復讐をしさへしなければ私だつて決して、こんな敵對するやうな計畫は立てやせんのだ。これでもし旨くいけば今津だつて随分手酷い損害を蒙るだらうし、それにお前が宮島家へ嫁くとなりや今津の方は散々になつてしまふ。面白いやうて極めて悲惨な話だ。私だとして決してい、ことだとは思つちや居らんが、併しかう意地づくになつて來るともうどうにも仕様がなくなつてしまふのだからなあ。」と、云つて、彼はまた盃をあげる。

八重子はそれを聞くと急に眉を曇らせてしまつた。今まで忘れてゐた心の古創が再び記憶の

底から湧いて来たのであつた。それと同時にまた宮島伯から聞いた清岡のことも思ひ出されて、彼女の胸は散々に掻亂されて来た。

八重子はしばらくすると態と氣を紛らかすやうに、

「でもお父様。そんな今津のことなんかお考へ遊ばさなくつても、唯御自分が御満足の出来るやうなことさへなさればそれでい、ぢや御座いませんか。私なによりももう一度家の運がもとのやうによくなればそれでい、と思ひますわ。」

「無論私だつてそれ以外の考へはないさ。唯時々ふいに今津のことが思ひ出されるもんだから。」と、云つて強ひて笑つてみせる。

八重子はそのまゝ、黙り込んでしまつた。

民造は今度は歌子の方を向きながら、「歌子。お前は此頃妙に沈んだるやうぢやないか。何處か體ても悪いのぢやないかな？」と、云ふ。

さう云へば歌子は此頃になつて妙に物思はしげな風をしてゐて、八重子などに逢つても昔のやうに打明けて口をきかなかつた。それと一緒に眼の色なども何處となく陰鬱な光をおびて、

漸次と子供らしい生々としたところがなくなつて来て居る。

歌子はさう云はれると恥しさうに顔を伏せて、膝のうへで手の指を弄んでゐた。

八重子は傍から口を出して、

「い、え、それはなんて御座いますよ。あの、歌子は餘り本ばかり讀むせめて御座いますわ。」

此節ぢや一日家へ引込んで、本を讀んでばかりゐるんで御座いますもの。」

民造は大きく笑つて、

「は、は、は、。ぢや歌子はなにか研究をして博士論文でも提出しようと思ふつもりかな。ほんとにさういへばお前は讀書ばかりしてゐるやうだな。そりや決して悪いことぢやないが、あんまり耽ると體によくない。どうだ、姉さんと一緒に少し外の空氣にも觸れてみちや。さうしたらもう少しは血色がよくなるかも知れんなあ。」

歌子は黙つて、益々首垂れるばかりであつた。民造も八重子も今彼女の胸にどんな深い憂ひが湧き起つてゐるのか少しも知らないの、格別さうした様子を氣にも止めなかつたが、歌子はしばらくするとおぼく顔を上上げて、さも思ひ餘つたやうに嘆息をついた。そして何か云は

うとしては躊躇してゐるやうであつたが、そのうちに彼女の頬にはぼうつと血の氣がさして来て、めかてさも思ひきつたやうに、

『お父様。』と、小聲で呼びかけた。

民造は笑つて、

『なんだ？』と、云つたが、それをみると歌子は又顔を伏せて、

『あの、お父様。あの、私お父様に少し御相談いたし度いことが御座いますんですけど、……』と、口のなかに咬いた。

二十四の三

歌子はしばらくすると父の民造に問ひ詰められて、到頭眞紅になりながら消え入るやうな聲でその相談といふのを切りだした。それは歌子自身の結婚問題であつた。彼女は今自分で一人の男を選定して、その男との結婚をどうか許して呉れと父に申出たのであつた。

その男といふのは民造達には思ひも懸けぬあの武田の欽哉であつた。親友であつた芳子が死

んだ後は何かと思ひ出されることが多いので、二人の間には人知れず月に二度ぐらゐづゝは手紙の遣り取りが續けられた。そのうちに素朴な摯實な男の性質はいつともなく歌子に深い同情を起こさせる、欽哉もまたやさしい歌子の心情にひかされて漸次と彼女の方へ接近してゆく。

二人の間にはいつとも知れず極めて純潔な戀愛關係が成り立つてゐたのであつた。あの慎ましやかな歌子が思ひ切つてかう云ひ出すからには餘程深い決心を持つてゐるのであらう、民造の胸に映つたのは先づその思考であつた。で民造は態と平然と装ひながら、

『うむ、お前の云ふことはよく分つた。實は私ももうずつと以前からその問題に就いて随分頭腦を傷めとつたのだが、併しその間にいろ／＼面倒な出来事が起つたりしたものだからつひその儘になつとつたが、……』と、云つて、又洋盃をあげながら、『一體お前はどいふ點であの武田を選んだのかな？』

歌子は恥しさに顔を染めながらも何處か自信のあるやうな調子で、

『どうつて別になんて御座いますけど、私唯あの、あんな地味な、しつかりした方のところへ参り度いんで御座います。』と、云ふ。

民造はゆつたりと笑つて、

『そりやまあ尤もな話だが、しかし北海道へ行くとなると餘程の覺悟をもつて居らんと駄目だぞ。尤もあの武田だつて一生彼地で暮らす氣もあるまいが、……』と、云つたが、歌子はそれを打消すやうに、

『い、え、あの、彼の方はもう一生彼地の農場で暮らしなさるんで御座います。私それがいいと思ひますもんですから。』

『ふむ、併しかう云ふ家庭で育つたお前が、あんな寂しい北の果の開墾地の生活に耐へられるかどうかは疑問だねえ。私にはどうもそこまで思ひ切れまいと思ふのだが、……。』民造は歌子の心柄としてさうした地味な寂しい思考を持つのは無理のない話だとは思ひながらも危むやうに云ふ。

歌子はそれには答へずに堅い決心をもつたやうな眼つきをしながら、じつと民造の方をみた。八重子は二人の會話を黙つて聞いてゐるが、やがて傍から口を出して、

『だけど歌子さん、それはよく考へてみないと可けませんわ。貴女は何か理想を描いてそれで

いろんなことを定めてゐるんでせうけど、世間で云ふものは決してさう思ひ通りにいくものぢやありません。北海道だつて寫眞でみたり、本で讀んだりすりやい、處に相違ないけど、まだ貴女は一度も行つてみたことはないんでせう。』と、云ふ。

歌子は黙つて又首を垂れてしまつた。

八重子は嵩にかゝつたやうな調子になつて、

『ねえ、お父様。差出がましいことを申すやうですけど、私はその結婚には不賛成で御座いますわ。第一武田さんと歌子とでは身分も境遇もあんまり違ひ過ぎますもの。』と、云ふ。

民造は合點いて、

『いや、さういふ點もあるが併し歌子から云へばそんなことは問題にはならんのだらう。』

八重子はそれを抑へるやうに、

『い、え、たとへ歌子は問題にして居りませんが、お父様の方で問題にして下さらなければ困りますわ。どうかお父様、私が宮島家へ參ることも考へて頂き度う御座います。』

民造は仕方がなさ、うに笑つて、

『その點もあるなあ。』と、云つて、今度は歌子の方を見た。

二十四の四

民造は歌子が面白くなさ、うな顔をしてゐるのを見るとそつちへも氣を配つて、

『だがしかし武田の方だつてさう悪い家系ではないからなあ。武田光五郎と云へばあの時代には司法省でも鳴らしたもんだ。今生きてゐれば無論次官ぐらゐにはなつとるだらうし、ひよつとかすると彼は憲政黨の寵兒だつたから大臣の椅子に就いてゐるかも知れん。』

八重子はそれを抑へるやうに、

『でもそれは過去のことぢや御座いませんか。私の申すのは現在のことで御座います。私この歌子を北海道の農場なんかへ燻らしてしまふのは残念でなりません。出来ることなら私と釣合ひのとれる家へ嫁づかせて、此れからも一緒に力になつたりなれたらしたいと思ふんで御座います。』

『そりやお前とすりや至極尤もな話だ。併しこればかりは私の一存でもいかんことだし、當人

の意志も十分汲んでやらなければならぬからなあ。』

民造はさう云つて又笑ひ顔になる。

八重子は何かそれを打破する理由を考へてゐるやうにじつと歌子の横顔をみてゐるが、やがてい、ことを思ひ付いたといふやうに、

『それに第一なんて御座いますわ。あの武田さんの家系は肺病筋ぢや御座いませんか。お父様も肺病でお亡りになつたんですし、芳子さんも矢張りさうぢや御座いませんか。それからして可いませんわ。』

民造もこれには少し弱つて、

『うむ、その點は少しも氣が付かなかつたな。全くあの武田家は肺病筋だ。』と、云ひながら歌子の方をみて、『歌子、お前はさう云ふことはどう考へるな?』

歌子は黙つて返事をしなかつた。

八重子は民造の方へひと膝居坐り寄つて、

『ほんとに身分よりも何よりも血統が一番大事で御座いますわ。あの欽哉さんは御丈夫さうで

すけど、さういふ遺傳があればいつどうなるか分りませんし、それにもし生れた子供にでも出るやうなことがあつては歌子自身も不幸だと思ひます。ですからそれだけでも結婚の資格が缺けてゐると思ひますわ。』

民造もそれには答へなかつた。唯笑つて尤もだといふやうな顔をみせるだけであつた。

そこへ小間使のお絹がしとやかに入つて来て、敷居際へ手を支へながら、八重子のところへ來訪客があることを告げた。

八重子はつと後を振顧つて、

『なに、お客様？』と、訊き返したが、『誰方なの？ 私の方のお客様？』と、いふ。

お絹はもう一度辭儀をして、

『あの、稻垣様の若旦那様で被居います。』と、答へる。

『まあ、貞夫様？そりやお珍らしい。では私直に行きますから、あの、二階の應接間へお通し申して置いてお呉れ。』と、云つて八重子は今度は民造の方を向きながら、『お父様あの私にお先へ頂いてもよう御座いませう。貞夫様をお待たせして置くのもなんですから。』と、云ふ。

民造は合點いてみせた。

八重子は大急ぎで食事を済ませるとやがて熱い茶を啜りながら、

『ねえ、お父様。私、ほんとうのことを申すと歌子にはあの貞夫様が一番適當ぢやないかと思ひますの。かうして長くお交際してゐますので氣心もよく分つて居りますし、それにあの方は歌子のやうな氣性のひとがお好きなんですから。』と、云ふ。

歌子は何んと思つたか少し顔をあげて、姉の方をみながらぼつと頬を染めた。

民造は笑ひながら、

『それもひとつ考へてみなければならんことだ。私も一度はそんなことも考へてみたんだが、……』

八重子はそれを聞き捨て、

『兎に角、私一寸貞夫様にお眼に懸つて参りますわ。』と、いつてそのまゝ、應接間の方へ出ていつた。

二十四の五

洋館の方の應接間へ上つてみると、明るい電燈の輝いた卓子の傍の安樂椅子へ貞夫はふつくり沈んだやうになつて坐つてゐる。八重子が入つていくのをみると、彼はにこやかに笑ひながら、

「まあ、先日は失敬しました。」と、云つて、態と元氣らしく挨拶をした。

八重子はいつぞやの日比谷の夜のことを思ふと少しは氣恥かしい氣もしたが、そんな風は氣振りにも見せず、

「まあ、貞夫様。ほんとにお待たせ致しました。私、今食事を致して居りましたもんですから、ほ、ほ、ほ。」と、笑つて、「ほんとによく被來つて下さいましたのねえ。」

八重子はそのまゝ、貞夫の傍へ行つて並んで坐りながら、何かと口に任せて話してゐるが貞夫はやがて改まつた顔になつて、

「ねえ、八重子さん。今日は實は變な用があつてやつて來たんですよ。先づそれよりも此れを

見て下さい。」と、云ひながら彼は背廣服の隠囊を搜つて、一封の手紙をとりだした。それは厚い角封に入れたもので、表に唯八重子様としてあるだけで差出人の名前もなにも書いてない。

八重子は差出されるまゝにそれを貞夫の手から受取つてみたが、怪訝な顔をして、

「まあ、貞夫様、此れ何んですの？」と、云ふ。

貞夫は少し笑つて、

「は、は、は、變な手紙でせう。誰れから來たんだか當て、御覽なさい。」

「誰方とも書いちや御座いませんのね。私、分りませんわ。」

八重子は頻りに表や裏を打返してみても不思議さうな顔をしてゐる。

貞夫はその様子をさも面白さうに眺めながら、

「まあ、兎に角當て、御覽なさい。決して貴女に當らない譯はないんだから。」

八重子はしばらく考へ込んでゐるが、やがて眼を丸くして唇を綻ばせながら、

「そんなことを仰有つて貴方、御自分のぢや御座いませんの？」

「は、は、は、。笑談云つちや可けませんよ。自分の手紙を自分で配達して歩く奴があるもんで、

「すか。貞夫は椅背へ倚つて大きく笑つたが、やがて『いや、そんなことぢや迎も當りさうもない。ぢや云つて上げませう。此れは實は清岡子爵からの手紙なんですよ。』
八重子はそれを聞くと愕乎として、

『えッ、清岡さん？どうしてこんなものが？……』

『いや、かう云つたッけぢや分りますまいが、實は僕、或人からこれを頼まれたのです。その或人といふのは僕の中學校時代の友人で、今は新嘉坡のすぐ傍で護謨林を經營してゐる男なんです。それが此間病氣をして、そのあとの静養をするために此地へ歸つて來たんです。その男は彼地で清岡さんと始終往來をしてゐるんで、今度歸朝をするに就いて此の手紙をことづかつて來たんです。』と、云つて、貞夫は煙草へ火をつけながら、猶ほも言葉をつゞけて、『この手紙は僕に宛た手紙のなかへ封入されてゐたんですが、僕の方の手紙には今貴女がどう云ふ境遇になつてゐるか分らないので、直接に手紙を出すのも餘り不躰だから、どうか氣の毒だが序の折りにこれを八重子さんに手渡し、て呉れと書いてありました。僕は前後のことを考へてみると、もう貴女も近々うちに宮島伯爵と結婚なさる體ではあるし、却つてこんなものを渡して

貴女の心を搔亂すのもどうかと思つたものですから、實は今の貴女の境遇をすつかり書いて、この手紙はこのまゝ、そつくり清岡さんの方へ返して上げようかとも思つたんですが、……』貞夫は云ひ遊つて、じつと八重子の顔を見ながら『併し、折角かうして寄越されたものをそんなことにするのねえ、……。』

八重子は唯だ夢でもみてるやうにぼんやりしながら薄青い紙で包まれたその厚い手紙をじいつと凝視してゐた。

二十四の六

八重子はやがて細かく慄へる指先でそつとその手紙の封を切らうとした。併し厚紙で出來た封筒なのでなかく裂けさうもない。彼女は又力なくそれを卓子のうへ、置いて、深い歎息を吐きながら、

『あとでゆつくり拜見しませう。』と、口のなかに云つた。その顔はいつになく蒼ざめてゐた。貞夫はその様子をじつと見てゐたが、急に氣を變へたやうに、

「さあ、それで僕の責任は済んだんだ。確かに貴女に手渡し、さへすりや清岡君に對して申譯がたつ譯だ。は、は、は、は、と、態とらしくとつてつけたやうに笑ひだしながら、今度はひと膝進み出て、『そこで僕のお願ひといふのは他ぢやないんだが、一寸云ひ惜いなあ。』と、云ふ。八重子は浮かぬ顔で無理に笑ひながら、

「何んで御座いますの。御遠慮なく仰有いませう。」と、云つたが、貞夫は思ひ切つたやうに八重子の顔をみて、

「いや、それぢや思ひ切つて云つてしまひませう。實は此間お話ししたあの村木の娘ですなえ、彼女と僕と愈々今度結婚することになつたんです。」

八重子は吃驚したやうに口だけで笑つて、

「まあ、ほんとで御座いますの。そりや結構ぢや御座いませんか。何日で御座いますの？」

「まだ日取りはよく分りませんが、多分來月の末になるだらうと思つてゐます。それで實は少しお頼みがあるんですが、……。」と、云つて、貞夫は何を思ひ出したか、急に顔を染めながらそつと八重子の顔をみる。

八重子も顔を背けながら、

「ほんとにそりやお目出度う御座いますのねえ。今も實は彼方で父と貴方のお話しをしてゐたんで御座いますよ。今度歌子もどうやら結婚の話が湧いて來ましたもんですから、もし出来ることなら貴方に貰つて頂けばこんないふことはないつてね、私一生懸命になつてさうすゝめて居りましたの。」と、云つて、八重子は嬌態をしながら、『でももうお極まりになつたんぢや駄目ですわねえ。もう少しそのお話を早く伺ふと私はどんなことをして、もさうして頂くんてしたのに。』

貞夫は少し恥しさに目を逸らして、

「いや、御親切にさう云つて下さるのは嬉しいんだが、併し僕には歌子さんの良人になる資格はないのですよ。は、は、は、と、彼は態と笑つて、『それでお願ひといふのは他ぢやないんですが、實は先方からの強つてといふ望みて貴方のお父様に仲人に立つて頂き度いんですがなあ。それに就いちや僕の父が是非此方へ伺つて、お願ひする筈になつてゐるんですが、何しろ事件が事件ですから一應僕に御内意を伺つて來いつて云ふもんですから……。』

「まあ、そんなに他人行儀になさらくつてもい、ぢや御座いませんか。厭ですわねえ。」と、八重子は軽く云つて、「そりや、父もきつとお引受け致しますわ。村木と云へば立派な店て御座いますし、それに父なんかもよく存じてるますんですから。」

八重子は口ではさう云つたもの、何かしら顔色が沈んで来た。せめて歌子と結婚でもして呉れ、ばと思つてゐたのに、それをまるで見も知らぬ家の娘で、しかも美人の聞え高い村木の娘と結婚するとなると、彼女には云ふに云はれぬ嫉妬の思ひが湧いて来るのであつた。この貞夫をむざ／＼他人に引攫はれてゆくやうな気がして、彼女は耐らなく焦悶かしくなつて来た。

ふとみるとすぐ眼の前には清岡の手紙が置いてある。それをみると八重子は急に息塞るやうに胸が躍つてきて、じいつとしてゐるうちにその封筒のなか、ら繊細い訴への聲が聞えて来るやうな気がする。このなかに何が書いてあるのかと思ふと彼女は何も彼も打忘れて又その手紙を取上げて、今度はそつと袖口から胸のなかへ押入れてしまつた。

貞夫は八重子がそんなことを考へてゐるようとは知らずに、頻に仲人の話をしてゐた。

二十四の七

貞夫はそれから後一時間ばかりいろ／＼な話をしたあとで、民造の諾否はいづれ明日でも電話で聞くからと懇々頼んでやがて歸つていつた。

八重子は寂しさうな顔でそれを大女關まで送り出した。そしてその足で父の居間へは寄らずに大急ぎで自分の居間へ歸つて来て、すぐさま肌の温みて温かくなつた清岡の手紙を取出して封を切つてみた。と、なか、らは西洋風の厚いレターペーパーが四枚ほど出て来て、それには細かい文字で何やら細々と書いてある。

慌たしく読んでいくうちに八重子の頬は紅く燃えて来た。涙は留度もなくはふり落ちて、ともすると手紙のうへ、ぼとりぼとりとかすかな音をたて、は滴り落ちる。八重子はそれを拭かうともしらずに息をもつかず讀みつゞけていつた。

その手紙は清岡が一生に始めて書いたやうな文で充ちてゐた。歐羅巴へいくと人を欺き、世を偽り、自分はリーナと結婚するためにかうして新嘉坡へ来たこと、それからリーナの父の

死、母の歸國、リーナの發狂、さうした事件のなりゆきを事細かに告白したあとで清岡は故郷を思慕する心持ちを涙の滲むやうな言葉で書き綴つてゐた。彼は八重子が今津家から離婚になつたことや、今度宮島伯と結婚することなどもよく知つてゐて、それに對する彼の濃やかな悲しみを述べてゐた。

「私はもう何をする力もない。過ぎ去つたことはすべて夢である。私は唯その夢が餘りに傷ましかつたことを悔恨せずにはゐられない。八重子、八重子、その名は私にとつて一生忘れることの出来ない名である。私が墓場までもつていかなければならぬ一種の悲しい謎である。私の一生は全くこの名のために支配されてゐた。リーナのこと、今かうして萬里の異域に漂泊して歩かなければならないこともすべてその名のつくつた禍ひであつた。

「私はその八重子がどんな境遇にゐようとも自分の忘れ得ぬ唯一人の戀人であると斷言することが出来る。今椰子の樹陰を熱帯地方の夜風が颯々と吹いてゐる。港には慕かしい日本の方へ歸つてゆく汽船が最後の汽笛をながく長く吹き鳴らしてゐる。あゝ、私は日本へ歸り度い、この心持ちは到底筆では書きつくすことが出来ない。八重子、せめて御許の夜の枕に私のこの切

なる思ひが通じたならば、私はどんなに幸福であらう。

「リーナも今日はいつともより靜かて、久しぶりに机の傍の安樂椅子に眠つてゐる。蒼ざめたその顔を見ても、私は一生涯つき纏ふ暗い運命の影をそのなかに見るやうな氣がする。私の過去はすべて呪ふべき失敗の歴史であつた。併し一度過ぎ去つた月日はもう二度と再び私のうへには歸つて來ない。私はもうこのまゝ、その暗い運命に引摺られてゆかなければならぬのであらうか。それを思ふと私の胸は裂けるやうだ。

「八重子、八重子、私は今激しく歎息しながら悲しい御許の名を呼んでゐるのである。私の聲は血を吐くやうな響きをもつてゐる。自分で戦くやうな聲である、……。」

そこまで讀んで來ると八重子は耐らなくなつて、いきなり疊のうへに身を投げ伏して聲を呑みながら激しく泣いた。あの清岡がかうした心持ちでゐて呉れようとは今の今までも夢にも知らなかつた。あゝ、なんとといふ悲しい手紙であらう。此の手紙を讀んで泣かないものが何處にあらうか？

八重子の眼の前には蟲平と異様な姿に生ひ繁つた椰子の林がみえて來た。暗い夜の空には大

きな星が眞蒼な焰を吐きながら爛々と輝いてゐる。港には数多い灯が明滅して、そのなか、らは啜り泣くやうな出船の汽笛が陰々と響き上つて来る。その港をひと眼に見渡す窓のところには今面寝れのした清岡が大きな卓子の前へ坐つて頻りに手紙を書いてゐる。彼の傍には白蠟のやうな血の氣のない顔をしたリーナが金髪を振り亂して寝てゐる。清岡の眼には涙がちらちら光つてゐる。彼の唇からは切なさうな嘆息が洩れてくる。……八重子は氣狂のやうになつて頻りに泣き欬りながらその幻影を凝視してゐた。

二十四の八

八重子の胸は刻一刻に狂熱にちかい熱情の焰をもつて燦かされて来た。逢ひ度さなつかしさは心の埒を破つて、今にも彼女の渾身を燃し盡くさうとするやうに激しく殺到して来る。八重子は幾度か清岡の手紙に熱いキッスを與へながら夢中になつて泣き欬つてゐた。

そこへふと聞き耳をたてると、戸外の玄關の方では消魂しく自動車の警笛が二聲ほどかすかに聞える。こんな夜遅く誰れが訪ねて来たのだらうと思つてゐると、やがてその自動車はぐ

るりと馬車廻しを廻る音がして、その儘ひつそりと鳴りを静めてしまふ。それからあとはもう何の物音もしないので八重子は再び自分の幻想のなかへ没頭していつた。

それにしても清岡はこれから先どうしようといふのであらう。リーナが發狂してしまつたとすれば、彼の運命は益々暗い方へばかり沈んでいくにきまつてゐるのである。その憐れな清岡をどうしてこの儘思ひ捨て、置くことが出来よう。一生に唯一人、心の底の底から戀した彼、たとひ今どんな恐ろしい破綻が自分の身のうへに迫つて来ようとも八重子はかうした手紙をみた以上はどうしてもこの儘に放棄つて置くことが出来ないのであつた。

清岡は死にまさる切なさを以て今八重子を戀してゐるのである。墓場まで背負つていかなければならぬ苦痛としてこの自分をば戀してゐるときへ書いて寄越したのである。八重子の胸には父の顔や、宮島伯の顔、それから今別れた貞夫の顔までが火輪車のやうに旋轉しながら映つて来た。それと同時にすべて自分の境遇の周邊を取圍む人々の顔は一樣に夢のごとくに思ひ返されて来た。併しそれは唯一瞬の幻のやうなもので、やがて彼女の心にはそれらのものを根こそぎに一擲してしまふだけの強い強い、寧ろ病的な決心が湧いて来た。あの清岡のためならず

べてのものを擲つても決して惜しいとは思はぬ、寧ろすべての係累から脱離してこの身を彼の膝下に投げ伏し、その犠牲に供へ度い。

そんな行詰めた思ひに暮れてゐるうちに、ふと廊下の方では慌たゞしい足音が聞えて、

「姉様。姉様は被居らなくて？」と、いふ歌子の聲が聞える。

八重子はそれを聞きつけると悸平として、いきなり清岡の手紙を内懐へ捻ぢ込みながら慌て、涙を拭いた。

そこへ居間の障子がすつと開いて、張り切つた顔色をした歌子がそこから顔を出して、

「あら、姉様、こちらに被居いましたの？私洋館の方かと思つて方々捜して歩きましたわ。」と、云ひながら入つて来た。

八重子はその咄嗟言葉も出ないやうに黙つて、妹の顔をみてゐた。

歌子は姉の傍へ来て腰を下ろすと、たゞならぬ顔を一層暗くして、

「あの、姉様。大變なことになつてしまひましたわ。」と、云ひながらそのまゝ、先は云はずに涙ぐんでしまふ。

八重子は何事が起つたのかと思ひながら、

「どうしたの？」と、訊くには訊いたが、歌子はそれなり八重子の傍へ泣き崩れて、

「姉様、あの、今鬼塚さんが見えて、あの、お父様の思つて被居つたことが皆外れてしまつたんですつて、……あの、お父様はまだよく分らないんですけど、今度は五十萬圓からうへの御損になりさうなんですつて……。」

八重子はそれを聞くと夢かとはばかり驚きながら、

「えッなんですつて？米國の方が可けなかつたんですつて？……。」と、息をもつかずに云つたが、歌子は急に聲をたて、泣き沈みながら、

「姉様。ほんとにお父様はどうしてかう御運が悪いんでせう。私ほんとにお可哀想で、……。」

二人はそれなり顔を見合せながら悲しげに泣き欝りだした。口もきけないやうな絶望の思ひに閉されて、姉妹は唯黙つて泣くより外はないのであつた。

磯谷の邸も商會もそれから一週間ばかりの間はまるで戦争のやうな混亂状態を呈してゐた。深夜に亞米利加の方の權利代表者から密電が来て、それによると三星とアイゼル商會との早手廻しが成功した、めに、折角巧く渾んでゐた磯谷商會の機運は脆くも打破られ、小さな蟻穴のやうな失敗から到頭總崩れになつて、民造は僅か一月ばかりの間に五十萬圓以上の大損失を招かなければならぬやうな悲惨の運命に遭逢してしまつた。それには亞米利加の方の相場の變動も無論累をなしたのだが、その陰には輸送關係に對して重大な勢力を持つてゐる東海汽船會社の力が働いてゐるのは隠れもない事實であつた。つまり磯谷民造は敵のために巧に裏を搔かれたのであつた。

この二度めの大打撃は商會にとつて確かに致命傷であつた。たとひ直に破産をするやうなことはなくとも、併し商會はもはや既に前途の生命を限定されてしまつたやうなものであつた。商會では秋田の方の鑛山の賣却説が出る、此の前の時にもう鑛工場の方は或會社へ譲り渡してしまつたので、今差當つて賣却するとなると先づ鑛山を手離すより他はなかつた。商會は瀕死の野獸のやうに唸めき、喘ぎ、最後の力をつくして頽勢の挽回策を講じてゐた。

邸の方では毎日々々暗い日ばかりが続いた。無論宮島家との慶事なども延期になつて、八重子も歌子も火の消えたやうな寂しいその日その日を送つてゐた。家の運命がどつちかにきまるまでは二人とも外へ出てゆく氣さへしなかつた。

その間に心配して訪ねて来て呉れたのは貞夫だけであつた。商會の悲報が各新聞紙に依つて傳へられると、彼はまるで自分の家のことのやうに色を變へてやつて来た。そしていろ／＼とその後の様子などを聞いたあとで、親身になつて二人を慰めていつた。

二度めにやつて来たのはそれから四五日たつてからであつた。その日はいつになく晩遅くやつて来て、女關のところへ八重子の顔をみるや否やさも心配さうに、

「八重子さん。その後はどうです？ 少しは片がつきましたか？」と、訊いた。

八重子は嬉しさうに笑つて、

「え、有難う。まだどうもはつきりしたことは分りませんが、……」と、云つて、「さあ、ずつと應接室の方へお上り遊ばせな。此處ぢやしみる／＼お話しも出来ませんわ。」と、云ひながら自分が先へ立つて、階段を上つていつた。

貞夫は何處かの歸り途だといつて、もう遅いからなど、云ひながらもぢくしてゐたが、やがて、

『ぢや兎に角ちよつとお邪魔をませう。ほかに少しお話し、たいことでもありますから。』と、云つて、そのまゝ、八重子の後についてつか／＼階段を上つていつた。

二階の應接にはいつに變らぬ明るい電燈の光が輝いてゐた。家の悲運も知らぬ顔に美しいカーテンや安樂椅子やさまざまの善美をつくした家具、裝飾品の類は燦然と照り輝いて、何處を見廻してもそんな恐ろしい衰運が此の邸へ迫つてゐるようとは夢にも思へなかつた。

八重子は安樂椅子のうへへ、がくりと力なく腰を下ろして、そのまゝ、じいつと貞夫の顔を見あげた。此前に逢つたときとは違つて、憂慮と心勞のためさすがに八重子の頬にも激しい神経的な窶れがみえてゐた。眼の色も妙に冷たく沈んで、その底には何ものをも焼きつくすやうな冷たい焔が燃えさかつてゐるやうに見える。

貞夫は傷ましさにその姿をみながらそのまゝ、彼女の傍に立つてゐた。

二十五の二

貞夫はやがて八重子のすぐ向うの椅子へ腰を下ろして、

『今夜はお父様はお宅ですか?』と、訊く。八重子は態と愛嬌づくりながら、

『い、え、まだ商會の方から歸つて参りませんの。此頃はいつも十一時より前に歸つて來ることは御座いませぬのよ。今夜も亦何かむづかしい問題が起つたとみえまして、夕方に一度歸つて参りまして、又出ていきましたの。』と、云ふ。

貞夫はしばらく間を置いて眉を擧めながら、

『いや、併しどうも飛んだことになつてしまひましたなあ。實は昨夜も俱樂部でその話が出て大議論だつたんです。或人などは商業道德論を提出して頻りに三星やアイゼルの遺口を非難してゐたが、併しそりや僕などのやうな門外漢から考へてみたつて無駄なことだと思ふ。どうせ他を排しても、自分の力さへ利益を得ていけばそれで世間は通つていけるんですからなあ。』と、云ふ。

八重子もそれに引込まれて、

「ほんとにさうで御座いますわ。今更商業道徳など、云ひ出したつてもう駄目なんて御座いますもの。それに父だつて決して自分に相應した道を踏んだといふんでも御座いますまいし、なんでも自分でも餘り計畫が投機的だつたと云つて今ではひどく後悔をしてゐるらしいんで御座います。それも今津に對する妙な感情の行違ひで、今度のことの陰には私といふ者が随分働いてゐるんで御座いますから、私ほんとにどうしようかと思つて居りますんですわ。」と、氣懸りらしく云つたが、やがて顔を背けて、「でも、それにしても父も随分運の悪い人で御座いますわねえ。一度ならず二度までもこんな目に逢はされて、もう此上浮ぶ瀬もあるまいと思ひますわ。」

貞夫は煙草に火をつけながら、

「僕は何よりもお父さんの御健康を心配するんです。此の前の時もあんなにあとてお弱りでしたから、今度も亦ひよつとしたことでもありやしないかとそれが氣になつてならないんです。」それを云はれると八重子は急に心細さうな顔色になつて、

「私達もほんとにそればかり心配してゐるんで御座いますわ。たとへ家の方はどうなりまし

ても、よく整理がついて呉れさへすればあとはどうにでもなりますんですけど、茲でもし父がどつと病ひついてしまひますとそれこそどうにもなりませんのですからねえ。」

貞夫はさう云ふ八重子の顔をしげ／＼見ながら、今度は急に氣を變へたやうに、

「いや、まあ併しそんなことを心配したらきりが無い。それよりも宮島さんの方のことはどうなるんですか。他のこと、違つてもう略方針もきまつたでせうが、……」

「さあ、それが今の處ではどうなりますかまるで分りませんのですわ。私あれからまだ一度もお眼にかゝりませんし、唯父の方から無期延期といふことにお願ひ致してあるばかりなんで御座いますから。……」

「無期延期？ そりや先方でもさぞ困るでせうなあ。かうなつた以上は己むを得んとしても、併し他のこと、違つて宮島家にとつては随分重大なことなんですすからなあ。」

「さうで御座いますとも。私もそれを考へないんぢやないんで御座いますけど、何を申しても他に致し方も御座いませんしねえ。……」

貞夫の考へは走馬燈のやうに廻つて今度は宮島家のことからふつと清岡子爵のことを思ひ出

して、

「ときに清岡君のところからあの後何か消息がありやしませんか。つい二三日前に例の手紙を持って来た友人に又逢ひましたが、その時の話ではなんでも近々のうちにあのリーナとか云ふ人を連れて日本へ歸つて来るとか云ふやうな話をしたけど、……」

「まあ、お歸りになるんですか？ 私のところへは何ともお消息は御座いませんけど、……」
さう云ふ八重子の顔には又唯ならぬ血の氣がのぼつて来た。

二十五の三

貞夫は八重子の顔をみながら、

「併し清岡君も考へてみりや氣の毒な人ですなあ。聞けばなんでもリーナはほんとうに發狂してしまつたんださうだか、そんな人と一緒に海を渡つて日本へ歸つて来るのは彼の人としてはどんなに苦痛だらう。それを思ふと僕はほんとに氣の毒でならないんです。あの人ばかりは始終順境にゐて、何の煩ひもなく生きていける人だと思つてゐたんだが、矢張りあんな人でも運

命の力には勝てないんですなあ。」と、しんみり云ふ。

八重子は急に涙ぐんで来て、

「貞夫様、どうかお願ひで御座いますから、清岡さんのお話だけはなさらなくて下さいましな。私の方のことを思ふと何んだか悲しくなつて耐らないんで御座いますもの。」と、云つたが、その胸にはもう清岡子爵に對する切ない思慕の思ひが火のやうに燃えたつてゐるのであつた。

貞夫はそれをみると何か云はうとしたが、そのまゝ、云ひそびれたやうに口を噤んでしまふ。その時、女關の馬車廻しの處で砂利のうへに軋る自動車の轍の音がして、やがて女關の正面で警笛の音が二聲ほど聞える。

八重子はいつと立つて、

「父が歸つて参りましたんぢや御座いませんかしら。」と、云つて、窓際へすら／＼と歩み寄つていつたが、そこからみると門内の廣場には二條の眞白な前燈の光が斜に駛つて、誰か何事か大聲で叫ぶ聲がしてゐる。

八重子は格別その人聲には氣もとめずじいつと暗い馬車廻しのところを眺めてゐたが、その時突如、後の應接間の入口の扉がさつと開いて、そこから唇の色まで喪つた歌子が小間使のお絹と一緒に慌たしくばたくと駆け込んで来た。

八重子は吃驚して、

「まあ、歌子さん。どうかしたの？」と云つたが、それをみると歌子は眼を大きく睜つて、

「あ、お姉様。お父様が、お父様が、お父様が大變です……。」と口もきけないやうに叫ぶ。

八重子は悸乎として、

「えッ、お父様がどうか遊ばしたの？」とは云つたが、何かしら妙な豫覺が胸に迫つて、肩先がわな／＼と打慄へて来る。

貞夫も眼を睜つてついと立ち上つた。

歌子の云ふところを聞くと、何んでも父の民造が急に發病して今商會から自動車で大急ぎで送り返されて来たのだといふ。八重子はもうじつとしてゐられなくなつて、そのまゝ、ばたく階段を降りて、奥の父の居間の方へ走つていつた。

父の居間へ来てみると、今丁度民造は鬼塚や懸りつけの醫師に助けられてそこへ入つていかうとしてゐる處であつた。小間使達は足を宙にしてそこへ臥床をのべてゐる。

八重子は後から走り寄りながら、

「お父様。お父様。どうか遊ばしたんですか？」と、叫んだが、それを聞くと醫師はじろりと後を振顧つて、「靜かに」「靜かに」と、眼顔でしらせる。

八重子はそのまゝ、前へ廻つて、そつと父の顔をのぞき込んだが、それと一緒に、

「あ、……。」と、小さな叫び聲を放つてふらくと紙襖の方へ倒れか、つた。民造の顔色は鉛のやうに蒼ざめて、だらりとあけた唇には生唾のやうなものが溢れさうに垂れか、つてゐる。そして雙眼は力なくどんよりとして、何處をみつめるともなく空をみつめてゐるのである。

鬼塚と醫師とはやがて小間使の手をかりて民造の羽織をぬがせ、そのまゝ、そつと白いシーツのうへ、横にならせた。そして柔かい毛布をかけて安靜にしたあとで、醫師は小さなサツクのなか、注射の道具を出して、二筒ほど注射を試みた。そして足先を温める湯たんぽの用意をさせたり、注腸の準備をしたりして、足音を忍びながら氣忙はしさうに働き廻つた。

八重子と歌子は紙襖際へ宙腰になつたまゝ、どうなることかと息をつめて様子を窺つてゐた。

二十五の四

二筒の注射は効果があつて、民造の顔には漸次と生色が現はれて来た。それまで態と黒い布片で一方だけ暗くしてあつた電燈も、それと同時に布片が取除けられたので間内は急に晴れやかに明るくなつて来た。

醫師も鬼塚もやつと愁眉を開いて、

「やあ、もう大丈夫です。やつと開いた。」と云つて、醫師は取散らした醫療器械を取片付けながら「いや、どうも先刻は全く驚きましたよ。餘り急なのでひよつとしたら脳溢血でも起されたのではないかと思ひましてなあ。』

鬼塚も醫師の方を振顧りながら、

「いや、私もきつと卒中だらうと思つたのです。お宅へ伺ふまでの心配といつたらありませんでした。」と、云つて、やつと煙草に火をつけながら、「併しお庇護様で安心致しました。もう

大丈夫で御座いませうなあ。』

「さあ、もう減多なことはありませんまいが、併し豫後がお大事です。なにしろ先達からの過勞で随分衰弱してゐられるのですからなあ。』

「全く御座いますよ、大概丈夫なものでもこれぢや參つてしまひます。」と云つて、鬼塚は煙草の烟を胸の底まで深く吸ひ入れるやうな顔つきをした。

八重子も歌子も漸う民造の枕邊に寄つて来て、心配さうな眼つきをしながらじいつと父の顔を覗き込んでゐた。八重子はやがて口を切つて、

「一體どう致したんで御座いますの、急に卒倒でもしましたんですか？」と、訊く。

鬼塚はふつと氣付いたやうに更めて丁寧に挨拶をしながら、民造の病狀を詳しく話して聞かせた。なんでも商會で會議中に急に苦しいと云ひ出したので、大急ぎで自動車の支度をさせ永田町へ歸邸させようとすると、丁度商會の階段のところではつたり卒倒してしまつたのださうである。それから大騒動になつて、ひと先づ民造を自動車へ昇ぎ乗せ、全速力で懸りつけの醫師の許へ驅け付け、直様手當を加へて貰つたので、どうやら事なきを得たが、一時は可成りの重

態であつたといふ。病症は一時性の腦貧血ださうて急激に發作したのと、その程度が激甚だつたので、一時は誰れしも卒中だと思つたくらゐてあつた。

醫師はやがてもう一度そつと民造の胸を開いて診察したあとで、

『いや、もうほんとうに大丈夫です。どうか此の儘ずつと安静にお寢みになれるやうにして上げて下さい。』と、云つて、あとの服藥のことなどを細かに話して、自分はそのまま、引取つていかうとした。

鬼塚は何となく心細いやうな氣がするとみえ、どうかもうしばらく病床にゐては呉れまいかと云ひ出したが、醫師は笑つて、

『もうその必要はありませんよ。却つてざわ／＼しない方が、よろしいですから。……もし何か變化がありましたらどうか電話でさう仰有つて下さい、早速伺ひますから。』と、云つて歸つていつた。

あとには鬼塚と八重子と歌子の三人が民造の病床にしよんぼり残つた。電燈の光は徒に明るく輝いて、四邊にはこそりとも物音がしない。鬼塚も先頃からの氣苦勞にすつかり面寝れがし

て、眼の色も絶え間ない憂慮に沈んでゐた。

そこへ廊下の方からかすかな、忍ぶやうな足音がして、誰れか、そつと入口の紙襖を細めに開けた。と、みるとそこから心配さうな眼つきをして差覗いてゐるのは貞夫で、彼は八重子の方へそれとなく手招きした。

八重子は靜かに立つて出ていつたが、貞夫は彼女から民造の容態をすつかり聽き取るとやつと安心したやうな顔色になつて、

『いや、それを聞いて僕も安心しました。どうなつてゐるのかと思つて、僕今迄彼方で氣が氣ぢやなかつたもんだから、……』と、云つて、軽く頭を下げながら、『それぢや僕もう今夜はこれで失敬します。いづれ父にもさう云つてお見舞に伺ふやうにしますから。どうかお大事に。』と、云つて、そのまま、歸つていつた。

二十五の五

八重子が再び民造の枕邊へ歸つて來ると、やがて民造は口をもぐ／＼動かしながらぼつか

眼を睨いて、

「八重子、歌子もゐるのか。」と、痰のからむだやうな聲で云ふ。

八重子はすぐさま父の方へ顔を寄せて、

「お父様。歌子も此處に居ります。もう御氣分はおよろしう御座いますか？」と、慰めるやうに云つた。

民造はやつと眼がはつきりしたやうに四邊を見廻しながら、

「や、實に變な氣持ちだつた。何んだかまだ耳がよく聞えんやうな氣がするが……。」と、云つたが、やがて何を思ひ出したのか、「おい、八重子、今誰れかその入口のところへやつて来たやうだつたが、誰れだつたかな？」と、訊く。異常に鋭敏になつた彼の神経はちよつとした物音にも憚るといふ風があつた。

八重子は事もなげに、

「今のは貞夫様で御座いますよ、さつきから遊びに被來つてゐて、お父様の御鹽梅が悪いのをお聞きになつて心配して態々見に来て下さいましたんですわ。」と、云ふ。

民造は唯黙つて合點いた。そして今度は鬼塚の方へ眼をやりながら、

「鬼塚君、君は商會の方へ行つてゐて呉れんと困るなあ。まだ税關の方の話がつかんやうだと明日の手筈に差支へるからなあ。」と、さも商會の方のことが氣にかゝるやうに云ふ。

鬼塚はそれを抑へながら、

「いや、商會の方は水島にすつかり委任して置きましたから、どうか御心配なく。それよりもお體の方が大事で御座いますから。」

民造は態と元氣な顔になつて、

「いや、私はもう大丈夫だ。この儘安靜に眠りさへすりや明日はもとの通りになるさ。これくらゐなこと倒れてどうなるもんか。なにしろ眠りが足らんもんだから、それが體に障つたのだ。」

「さうでも御座いませうが、しかしさつきのやうなことが御座いますと、皆が心配いたしますから。」と、鬼塚は嚙んでく、めるやうに云つて、「どうかもう商會の方のことは御心配下さらないで、今晚はゆつくりお寢みになつて下さいまし。水島も松井も皆残つて居りますから何と

かうまい解決をつけるに極まつて居りますから。』

民造は少時考へ込んでゐるが、やがて絶望的な眼つきになつて、

「併しもういくら心配しても、此のうへはなるやうにしきやならんのだからなあ。」と、嘆息をつくやうに云つて、『それにしても兎に角一應電話でも會議の結果を訊いてみて呉れんか。うまくいかんものなら、それで又断念める方法もあるのだから。』

鬼塚は當惑したやうな顔つきをしてじいつとあらぬ方を瞻めてゐるが、やがて仕方がなしに、『それでは一應電話で、訊ねて見ますから。』と云つて、そのまゝ座を立つていつた。

鬼塚の足音はまるで啜り泣くやうにひそやかに長い廊下を傳つていつた。

民造は涙ぐんだやうな眼つきをしてその足音の消えゆくあとを追つてゐるが、やがて耐らなくなつたやうに、

「おい、八重子、歌子。もうちつとお父様の枕許の方へ寄つて呉れ。何んだか私は寂しくて耐らんのだ。せめてお前達の顔でも見てゐるより他に私にはもう何の慰藉もないのだ。私は今夜ほど寂しい心持ちのする晩はない。私はこのまゝ、死んでしまふのぢやあるまいか。何だが電燈

が馬鹿に暗くなつたやうだが、……』さう云ひかけて民造は惜えたやうな眼を据ゑてじいつと電燈の光を瞻つた。

八重子は民造の枕許へ居坐り寄りながら、

「お父様、そんな心細いことを仰有つちや厭て御座います。そんなことをお考へ遊ばすのもお氣のせるですわ。どうかしつかり遊ばして、……。」と、云つて、涙ぐんだ眼で父の顔を見つめた。

二十五の六

父の民造はしばらくすると八重子達の方へ寢返りをしながら又口を切つて、

「私はほんとにお前達に對して濟まんことをしたと思つてゐる。お前達ももう聞いて知つとるだらうが、私の運命は、私の運命はもう愈決つてしまつたのだ。磯谷商會といふものは早かれ遅かれ破産をしてしまはなければならんのだ。いつぞやもお前達に云つたとほり、私は此前の時にうまく見限りをつけて自分の野心を擲つてしまひさへすれば、今日決してこんな悲惨な羽